

2024 年度

博士論文

(指導教員：小林 誠)

論文題名 異質な他者とともに生きる：
在日カンボジア人の生き方から学ぶ

英文題名 How to Live with the Others:
Learning from the Experiences of
the Cambodians living in Japan

東京経済大学大学院

コミュニケーション学研究科博士後期課程

氏名 濱野 敏子

目次

序章：問題関心、目的、方法	1
第1章 本稿の解釈のための道標	9
1-1 線：生の流れ	9
1-2 応答：出会いとつながり	10
1-3 絡みあい：生成と変化	11
1-4 メッシュワーク：関係の集合体	12
1-5 移動：異質な他者とともに	14
1-6 応答プロセス：解釈のための道標	14
第2章 在日カンボジア人とは	16
2-1 在日カンボジア人の概要	16
2-2 カンボジア定住難民の概要	16
2-3 カンボジアの自然と歴史と文化	19
2-4 カンボジアの近現代史	20
2-5 在日カンボジア人の生活実態と課題	21
第3章 希望を生きる在日カンボジア人 1.5 世	26
3-1 問題関心、目的、方法	26
3-2 「移民 1.5 世」と「希望のメソッド」	27
3-2-1 移民 1.5 世の先行研究	27
3-2-2 希望のメソッド	30
3-3 在日カンボジア人 1.5 世のライフストーリー	31
3-4 「希望を生きる」ことについての考察	47
3-4-1 不確実性の中で生きる	47
3-4-2 異質な他者とメッシュワークを作る	48
3-4-3 親密性と開放性の中で生きる	51
3-4-4 生活の中で自己を探求する	53
3-5 小括：応答プロセス	54

第4章 経験の継承を生きる在日カンボジア人 1.5 世	56
4-1 問題関心、目的、方法	56
4-2 生の連続性、物語、歴史	57
4-2-1 生の連続性と物語	57
4-2-2 歴史の構成	60
4-3 在日カンボジア人 1.5 世のライフストーリー	63
4-3-1 N さんのライフストーリー：二つの国の良さを伝えたい	64
4-3-2 M さんのライフストーリー：カンボジア人であることを忘れてほしくない	75
4-4 「経験の継承を生きる」ことについての考察	81
4-4-1 経験の違いと共通点	82
4-4-2 経験の総体性と連続性	83
4-4-3 経験と自己変革	85
4-4-4 経験の排除と共有	85
4-4-5 経験と他者との絡みあい	87
4-4-6 経験と歴史	89
4-5 小括：応答プロセス	90
第5章 モノとともに生きる在日カンボジア人	92
5-1 問題関心、目的、方法	92
5-2 モノの力、媒介作用	93
5-2-1 モノの力	93
5-2-2 モノの媒介作用	94
5-3 在日カンボジア人のライフストーリー	95
5-3-1 S さんのライフストーリー：絵画と対話	96
5-3-2 M さんのライフストーリー：銀塊、石臼、言語の物語	103
5-4 「モノとともに生きる」ことについての考察	109
5-4-1 モノと対話	109
5-4-2 モノと物語	111
5-4-3 モノとイメージ	113
5-4-4 モノといのち	115
5-5 小括：応答プロセス	116

終章	・ ・ ・ ・ ・	118
第一部 「応答プロセス」と在日カンボジア人の生き方	・ ・ ・ ・ ・	118
1 「応答プロセス」の促進と阻害	・ ・ ・ ・ ・	118
2 「応答プロセス」と「移動」：知の移動へ	・ ・ ・ ・ ・	123
3 「知の移動」と「異質な他者とともに生きる」	・ ・ ・ ・ ・	125
第二部 在日カンボジア人の生き方から学ぶこと	・ ・ ・ ・ ・	127
補足説明	・ ・ ・ ・ ・	130
引用・参考文献	・ ・ ・ ・ ・	134
謝辞	・ ・ ・ ・ ・	140

序章:問題関心、目的、方法

目的

本稿の目的は、難民として来日したカンボジア人が日本社会という異文化の中で直面する困難や危機をどのようにすり抜け、いかに新しい地平に向かっていくかを描き、考察することである。その際に重要になってくるのが周囲の人やモノを含めた多様な他者との関わりである。本稿では、この周囲の他者との関わりに焦点を当て、彼/彼女らの生のプロセスを明らかにする。さらに、本稿は彼/彼女らの生き方を通して、閉塞的な状況にある私たち日本人が新しい地平へ向かうためのもう一つの生き方を学ぶことを目指している。

カンボジア難民との出会い

筆者はかつて支援活動に赴いたタイ国境のカンボジア（避）難民キャンプで、祖国の混乱から逃れ安全を求めて国外へ脱出した人々と出会った。東西冷戦下で大国の代理戦争となったベトナム戦争のあおりをうけて荒廃したカンボジアの国土と社会、その後に成立した過激な共産主義政権による人心の破壊、そして政権崩壊後の内戦という大きな物語の中で翻弄される小さな民たちだった。筆者は難民となった人々とともに生活する中で、自分の知らない世界と生き方を教えてもらった。生命と暮らしの破壊、家族や友人との別離、将来への不安、祖国を離れるという決断、その中でも希望を失わず、他者への心配りと暖かい関係を保って生きている姿に尊敬という気持ちしかなかった。しかし、難民たちとの日々の交流の中で、生きるとはどういうことか、他国で暮らすとはどういうことか、国家とは何か、国民とは、難民とならなかった自分は何者か、難民となった人と私はどのようにつながっているのか、などについて考えることになった。そして、難民キャンプから第三国への定住が許可され、新しい人生に向かって他国へ移動していく彼らの幸せを願わずにはいられなかった。その出会いから 30 年近く経って、海外での仕事を終え日本に帰国した筆者は、外国にルーツを持つ住民たちの厳しい生活状況と彼らに対する日本政府の冷たい対応を見た。そして、日本に定住したカンボジア難民やその他の外国人の生活はどうなっているか、彼/彼女らはどのように日本で暮らし、何を感じ、どのように生きたいと願っているのかと思い巡らした。

難民との出会いという自分の経験を振り返った時に、そこには高度経済成長をおし進めていた日本という近代国家があった。高度経済成長の中で、生活が保障され、大学進学が許され、将来への不安もない中で可能となった海外でのボランティア活動であった。難民キャンプでの活動は、「支援」という名によって肯定的なイメージが持たれるが、そこには「支援する側」と「支援さ

れる側」という落とし穴があった。支援する者は、支援されるカンボジア人という存在を生み出しているのではないか、その構造を作っている歯車となっているのではないだろうか。この分断構造は日本とカンボジアという国家の関係と重なった。もう一点の懷疑は、難民を生み出した原因である当時の冷戦構造下にあつて、日本は資本主義陣営として存分の利益を受けていたことにある。そのような国家間の政治的・経済的構造の中で可能となった難民との出会いだつた。それは、自分が享受した経験が実は難民となった人々の犠牲の上にあつたということではないか。個人的なミクロな関心が国家というマクロの構造の中で、矛盾をきたしていたことに気がついた。そのことへの反省が、筆者にとっての一番の本稿の研究動機かもしれない。

日本におけるカンボジア難民の受け入れとその背景

日本における在日カンボジア難民の受け入れは、1979 年の日本政府のインドシナ難民定住許可の閣議決定によって始まった。インドシナ難民とは、1975 年のベトナム戦争終了後の政治体制の変更に伴い混乱した祖国を離れて国外に出たベトナム、カンボジア、ラオス人の総称であり、そのうちのカンボジア出身者がカンボジア難民である。日本に初めてインドシナ難民が到着したのは、1975 年の 5 月であつた。漂流していたベトナムからのボートピープルをアメリカのタンカー船が救助し、乗っていた 9 人が千葉港に到着した。それまで対岸の火事と思っていた日本の人々は驚き、メディアも一斉に報道した。日本政府はベトナム難民を一時的に上陸はさせたものの定住は許可せず、すぐにアメリカへ送り出した。この対応がその後 3 年間繰り返され、その間に漂着した 1206 人は 1 人も定住できなかった¹。このような自国の安全と秩序のみを重視し、難民を他国へ押し付ける日本政府の態度に、国際社会からの批判が集まり、その外的圧力によって日本政府は 1979 年にインドシナ難民の受け入れを閣議了解したのである。それでも、インドシナ難民の受け入れには消極的で、その代わりに難民支援のための資金は出すと弁明し、「ヒトは受け入れないが、カネはだす」と揶揄された(滝澤 2017)。このような日本政府の排他的対応のベースに、日本社会に根強くあるよそ者排除の傾向があつたことは想像に容易い。

インドシナ難民受け入れに前後して、「ニューカマー」と呼ばれる外国人労働者が多く来日した。その背景は、産業界が高度経済成長に伴って必要となつた労働力、それも低賃金で単純労働に従事できる人材を必要とし、それに政府が応じたのである。特に中南米からの日系人が標的にされた。主に建設現場や工場で働き、その行動範囲は住居と仕事場の往復のみで、ほとんど日本人とも接することのない状況だつた。そして、地域の日本人住民もすぐ隣にいる外国人を見ても、自分の世界とは違う世界の人間という態度を示し、地域社会の中で外国人はその存在を認識され

¹ 1978 年に漂着したボートピープル 712 人のうち初めて 3 人の定住が認められ、翌年は 1165 人のうち定住が許可されたのはわずか 2 人であつた。

ていない存在だった。これを「顔の見えない定住化」と呼んだ（梶田・丹野・樋口 2005：72）。当時、外国人急増の状況を「内なる国際化」と呼んだが、実際は「内なる排除化」だった。

上記のような外国人への排他的対応は現在にまで続いている。その象徴の一つは、日本政府の難民申請者に対する認定率の低さである。2023 年現在の申請者に対する認定率は、3.8% (2023 年) と他国(カナダ、英国、米国は約 60%) に比べて次元の異なる低さである。また、入国管理庁の収容所における外国人に対する虐待事件は、2021 年のスリランカ人ウィシュマさんの死によって世間の注目を集めたが、それ以前から習慣的に行われていたことが知られている²。それにもかかわらず、マスコミの報道は少なく、一般の人々の関心もほとんどなかった。外からは見えない収容所の中でおこなわれるこの人権侵害は、弱者となった者への徹底的な抑圧と無関心という日本人の「負」の国民性を表しているように見える。外国人への排他的態度は、一般の人々の間にも根強くあり、その例として民間の賃借住宅の拒否がある³。この賃借住宅拒否をほとんどの外国人が経験しているが、さらにもう一つの問題点がある。それは、人種差別である。米西欧人とその他の人との間には、同じ外国人と言ってもその扱いに明らかな違いがあり、前述の住宅拒否の事例においてのそれは示されている。

この人種差別は、日本人の北米・西洋人に対する劣等意識とアジア・アフリカ・中南米の人たちに対する優越意識を基礎としている。姜尚中は、「近代日本の国民的体験から生み出された対外観の特徴は、『古い侮辱的・攘夷的な西洋観の克服』とともに、『態依然たる近隣アジア諸国から日本を区別しようとする自意識』が強化され、ふたつの対外観が両極分解していった」と述べる（姜 2005:102）。明治以来の西欧近代化と資本主義経済の導入、それによる産業振興と帝国主義、アジア・太平洋地域の植民地支配、敗戦、そして戦後の米国従属化と西洋文化への過剰な同化、それと比例するかのようにアジアやその他の地域への軽視という日本の傾向が見えてくる。特に戦後から現在まで変わることなく続きさらにその度を増しているのは、常に自分を中心に置いて他を序列化する態度であろう。戦前には植民地支配者としてアジア諸国の上に立ち、戦後は米国の従属者として仕え、他者との対等な関係を経験したことがない日本人の私たちである。このような背景のもとで、日本における西洋/アジア＝優/劣という二項対立・序列化が強化されていった。

在日カンボジア人の生きづらさと挑戦

アジアに対して偏見と差別をもつ日本という国に移住してきたカンボジア人たちの生きづら

² 2024 年 9 月 2 日アクセス https://www.toben.or.jp/message/libra/pdf/2022_04/p02-18.

³ 法務省が 2017 年に公表した「外国人住民調査報告書」によると、日本で住まいを探したことのある外国人約 2000 人のうち、約 4 割が「外国人であることを理由に入居を断られた経験がある」と答えている。

さは、容易に想像できる。そうでなくても、それまでの慣れ親しんだ故郷の共同体から全く未知の社会に投げ出され、異なる人、異なる言葉、異なる衣食住、異なる習慣、すべてが異なる中で生きること自体が大きな挑戦である。現象学者のアルフレッド・シュッツは、日常の生活世界の思考について次のように述べる。今日の生活は昨日と同じく、そして明日も今日と同じく続くという前提のもとで、それまでの経験や知識が役に立ち、親や教師から教えられることや伝統や習慣によって伝えられることは信頼でき、生活の中で起こるほとんどの問題はすでにコード化されているから、それらの問題に対処する処方箋はすでにあり、同じ準拠図式を持つ集団の中であれば大体の問題は解決すると考える（シュッツ 2015）。このような思考において、日常生活は順調に営まれる。しかし、この思考の条件が成り立たない場合は、逆に危機に陥ることになる。それが、在日カンボジア人やその他の外国人の状況である。彼/彼女らにとって、日常生活は全くの非日常であり、挑戦の連続である。

来日したカンボジア人が定住に向けて、まず行うことは就業である。言葉の障壁や技能に制限があるため、多くは日本語を必要としない単純作業が中心の工場労働者となった。そのような職場では日本人たちとの接触もほとんどなく、日本語や日本の文化・習慣を習得する機会もなく、ひたすら作業をする毎日である。何のために日本にきたのかと後悔する人も多かった⁴。その中でもコツコツと真面目にはたらくカンボジア難民を、産業界は「都合のよい外国人労働者」として受け入れた。しかし、一旦不況となると一番先に解雇し、カンボジア人たちは失業した。そのような不安定な就業状況は、経済的な困難のみならず心理的な抑圧となり、また家族内での葛藤や対立を起こす原因ともなった（鈴木 2000）。

日本の学校へ編入した学齢期の子どもたちは、同質的・均一的な学校文化に適応できず困難を抱えた。クラスの中で孤立し、教科学習に追いつけず、いじめにもあい、不登校になる子どもも多かった。一方、学校側もそれまでの均質化を基本とする教育方針のもとで教師たちは、「異質」な子どもたちに対しどのように対応しているのか分からず戸惑った（志水他 2006）。公立の学校は国民化教育の場でもあるため、外国人の子どもたちに対して学校側の秩序や規範に同化させるように訓練する場でもある。太田晴雄はこれを「日本的モノカルチャリズム」と見て、外国人の子どもの登場によって日本の学校文化の問題が可視化されたと述べる（宮島・太田 2005:57-75）。

他国から移住した外国人は、通常エスニック・コミュニティが大きな支えとなる。就業の斡旋や公的手続きなどの生活面で、また母国の料理をともにして楽しむ時間など精神的な支えともな

⁴ 実際に、筆者は何人ものカンボジア人からこの言葉を聞いた。15歳で来日した人は中学を卒業したとされ、就学できずにすぐに働き始めた。またある人は高等教育へ進学を希望したが、その選択肢は難民にはないと拒否された。

る。しかし、カンボジア人の場合はそのような同胞コミュニティは当初はまだ存在していたかったため、一人ひとりが直面する問題に試行錯誤して向かい合う日々であった。子どもの場合も、通常であれば何か問題があった時に一番先に頼りになる存在は親であるが、親も同様に未知の世界に放り出された状態で生活再建に忙しく、子どもの悩みをともに考える余裕はなかった。反対に、日本語の上達が早い子どもが親を助けることになり、親子の立場が逆転するという問題も生じた(鈴木 2003b)。このような状況の中で、困難や危機を乗り越え自分たちの居場所を見つけていく過程は容易くない。しかし、その挑戦を引き受けて、生きているのが在日カンボジア人たちである。

在日カンボジア人と「生きていること」

あるカンボジア人1世は「私たちは逃げたのではなく、生きたのです」と語った。またあるカンボジア人1.5世は「嬉しいことや辛い経験もいっぱいあるけれど、一生懸命生きているのだと感じています」と語る。このように語る在日カンボジア人にとって、「生きていること」とはどのようなことなのだろうか。人類学者ティム・インゴルドによると、「生きていること」はまず動き続ける運動であり、環境の中で他者と出会い、応答し、出来事が生成し、世界に開かれていくプロセスであるという(インゴルド 2021)。在日カンボジア人は、祖国から日本に来て、異なる環境(社会と自然)の中で、異質な人間やモノと出会い、関わり、多様な出来事を通して世界と繋がり、日々自己を生成している。彼らは祖国の大きな歴史と自己の小さな歴史の交叉、日本という移住した国の文化と祖国で身につけた文化の挟間で生きている。そのような彼らの生は、多様な糸の複雑な絡まり合いによって織られたタペストリーのようなものである。

在日カンボジア人は生きていくために、祖国から日本へ移動してきた。その移動に伴って、未知なる人やモノ(他者)と出会う。それはあらかじめ予定されていることではなく、出会ってしまうという偶然の出来事である。出会ってしまう他者は前提条件のない他者であり、そこに先入観や恣意的な選択が入る余地はない。その出会いとつながりは、自己利益や自己目的に先行する人間としての始原的な他者との関係に基礎付けられる。それは他者を対象化することではなく、他者と「ともに生きること」である。

では、他者と「ともに生きること」とはどのような状態なのだろうか。人類学者のティム・インゴルドは他者の内側に入って真剣に向き合うことであると述べ、現象学者のモーリス・メルロー＝ポンティは相互が巻き込まれる内的な交流⁵であるとし、哲学者バルフ・デ・スピノザは個と個が合体して一つの個となる情動的な現象⁶とする。さらに、この「ともに生きること」は、その関

⁵ 巻末に「補足説明」をつける。

⁶ 巻末に「補足説明」をつける。

係自体が自律的に発展し、展開し、ある集合体（生の領域）を形成する。これをインゴルドは「メッシュワーク」と呼び、ジル・ドゥルーズが生み出した「リゾーム構造」や「アレンジメント」⁷、ブルーノ・ラトゥールが提唱する「アクターネットワーク（ANT）」⁸の概念・理論と重なる。これらの集合体において、構成する要素は多様で人間に限らず、その関係は対等で、中心と周辺、主体と客体、優劣はなく、相互に影響しあってお互いを変化させ、絶えず生成変化の途上にある。

「ともに生きること」はこのような状態であるが、その抽象的な説明では全く内実がわからない。本稿では、このわからない「他者とともに生きること」を在日カンボジア人の生きている現実を通して具体的に描いていく。

「異質な他者とともに生きる」ことに至る解釈⁹の道標：応答プロセス

本稿では「異質な他者とともに生きる」ということについて、在日カンボジア人の生き方を通して考察していくのだが、その際に道標が必要である。そこで、本稿ではその生き方を解釈するための道標を暫定的に設定する。これは現実の姿をある方向や枠組みに閉じ込めるためではなく、より開かれた柔軟な解釈を可能にするためであり、変更可能なものである。その際に用いる概念は上記で触れたティム・インゴルドの「生きていること」、並びに関連する他の概念である。本項では、この解釈の道標を「応答プロセス」と呼ぶ。「応答プロセス」は、端的に言えば「つながりの連鎖・循環」である。本稿は、在日カンボジア人と他者のつながりについて、その契機やスタイル、効果を「応答プロセス」に沿って解釈していく。「応答プロセス」の詳細については第1章で述べる。

なお、本稿で用いる「在日カンボジア人」という名称について若干の説明をしておく。「在日カンボジア定住難民」あるいは「難民につながる人」と特定することで、「難民」に焦点が当たってしまうことを懸念するからである。なぜなら、本稿は祖国から日本へ移住せざるを得なかった人の「生き方」に焦点を当てるからである。もちろん、その背景として「難民になったこと」あるいは「難民につながることは重要であるが、本稿は「難民とは何か」についての研究ではない。本稿で紹介する人々を「難民」としてではなく、日本という場所で「異質な他者とともに生きている人」として位置付ける。実際に本稿で紹介する人々は、いわゆる政府が認定した「定住難民」という資格外の人もある。本稿では以上の理由により、広く「在日カンボジア人」として呼ぶ。ただし、記述の文脈上「カンボジア定住難民」や「難民につながる人」とする場合もある。

⁷ 巻末に補足説明をつける。

⁸ 巻末に補足説明をつける。

⁹ 本稿では、分析ではなく解釈をおこなう。分析と解釈の違いは、分析は理論的・科学的な知識をもとに還元的・共時的・技術的に理解する。解釈は、対話的・歴史的・状況的に理解する（鶴田 2007）。つまり、解釈は受け取る側の理解であり、それは絶対的ではなく、常に懐疑や変更を含み、理解しようとする努力過程の一つのステップである。

る。

調査方法

在日カンボジア人の視点から捉えた現実を知り、その生活世界を描くために聞き取り調査を行う。また、在日カンボジア人が主催する行事や会合などに参加して観察を行い、関連する文献・資料を用いる。

聞き取り調査は、対話構築的インタビューによって構成されるライフストーリー方法である。対話構築的インタビューとは、聞き手と語りによる相互作用によって語りが構築され、その語りは両者の共同制作となる。ライフヒストリーとは、個人の人生、生活、生き方についての口述の物語であり、また自己の生活世界、そして社会や文化の諸相を読み解くための質的調査法である。ライフストーリーはライフヒストリーに出自があるが、概念としては違いがある（桜井 2012）。桜井によると、ライフヒストリーは語られる出来事を時系列的に編成しなおし、歴史的変化を叙述するものであり、ライフストーリーは語り手が過去の出来事の体験を振り返って意味付けした経験であり、出来事の忠実な事実とは限らない。ライフストーリーの語りには語り手自身が得た情報や価値判断、思いが加わっている（桜井 2012）。ライフストーリーで記述される出来事は、語り手の主観的世界ということになるが、それはもう一つの確かな現実であると言える。筆者は上述のライフストーリーとライフヒストリーの明確な線引きには同意しがたく、実際にはこの両者の間、あるいは両方を含むと考え、本稿では上述の概念の定義にはこだわらず、語り手の生き方をより現実的に表現することに注力する。

本稿の構成

本稿の構成は、「第1章 本稿の解釈のための道標：応答プロセス」において、インゴルドの「生きていること」の思想を出発点とし、関連する概念を参照して設定した解釈の道標「応答プロセス」について、そのキーワード（絡みあい、メッシュワーク、移動、異質な他者）とともに説明する。「第2章 在日カンボジア人とは」では、在日カンボジア人並びにカンボジア定住難民の概要と、その生活実態・課題について整理し、検討し、本稿の特異性を述べる。第3章から第5章は、在日カンボジア人のライフストーリーである。「第3章 希望を生きる在日カンボジア人1.5世」は、幼少時に来日した1.5世が不確定な状況の中を周囲の多様な他者とともに危機を乗り越え成長していくプロセスを「希望メソッド」という概念を用いて検討する。「第4章 経験を継承する在日カンボジア人1.5世」は、成人となった1.5世が異文化社会の中で直面した自身の困難や葛藤、喜びの経験を次世代のより良い未来に向けて継承していこうとする物語を、「生の連続性・物語・歴史の構成」という視点から検討する。「第5章 モノとともに生きる在

日カンボジア人」は、「異質な他者」を人間以外のモノに広げて、在日カンボジア人がさまざまなモノを通して想起する過去の記憶と想像によって現在を生き、新たな世界へ開かれる過程を「モノの生きた力と媒介作用」の視点から検討する。この3つの章は、それぞれのテーマにおける「異質な他者」の位相が異なる。第3章では国籍や民族の異なる共時的な他者（横軸）、第4章では世代の異なる通時的な他者（縦軸）、そして第5章では人間以外のモノという種差的な他者（第3軸）というように立体的に他者像を設定する。「終章」は2部構成とする。「第一部 『応答プロセス』という生き方についての考察」では、在日カンボジア人の「応答プロセス」という生き方における促進要因と阻害要因の検討を通してその特徴を明らかにし、次に、「応答プロセス」を「移動」の側面から考察し、移動によって未知の他者に出会い、ものの見方が変わり新しい生き方へ変化することを「知の移動」として捉え、その「知の移動」は「異質な他者とともに生きること」によって導かれることを論じる。そして、「異質な他者とともに生きること」はより自由により賢く生きるための条件であり、世界へ開かれる可能性であると結論とする。「第二部 在日カンボジア人の生き方から学ぶこと」では、日本人にとって在日カンボジア人の「応答プロセス」の生き方は、日本社会の閉塞的な状況を脱するためのもう一つの生き方となることを具体的な点をあげて示唆する。

第1章 本稿の解釈のための道標：応答プロセス

本稿の「異質な他者とともに生きる」という主題にアプローチするための道標として、「応答プロセス」という解釈の道標を暫定的に設定する。これは、人類学者のティム・インゴルドの「生きていること」という思想を核にして、関連する概念を参照する。インゴルドは「生きていること」を Being Alive と進行形で表現し、環境の中で他者と出会い、他者とともに生き、世界の形成に参加していく生のプロセスであるとする。以下に、「応答プロセス」設定に至る思考過程を順に追うことで、解釈の道標の内容説明とする。

1-1 線：生の流れ

インゴルドは生を「線」に喩える。線は初めも終わりもなく流れ、閉じられることがなく、曲がりくねりながら、前進する。私たちは線の流れに導かれて生きている。生は固定された場所で営まれるのではなく、人やモノが行き交う道筋においてその出会いとともに営まれる。その道筋は生の軌跡となり、物語として語られ、伝えられ、生が紡がれていく（インゴルド 2014）。

インゴルドは線の特徴を示すために、ブロックと比較する（図 1）。線は内部も外部もなく、その流れは閉じられない。閉じられそうになっても必ず隙間があり、そこから外へ通りぬけができる。線の流れが止まって隙間が塞がれるとブロックができ、内部から外に出られず、また外から内に入ることはできない（インゴルド 2014）。つまり線の流れに導かれる限り、たとえ困難な状況に陥ってもなんとかブロックの亀裂（通り道）から脱出し生き抜くことが可能である¹⁰。しかし、ブロック状態になると危機の中で埋没するしかない。線に導かれた生は予測不可能で不安定ではあるが、自由な世界へ開かれていくことを可能にする。一方で、ブロックに閉じ込められた生は安全かもしれないが束縛された監獄のようである。

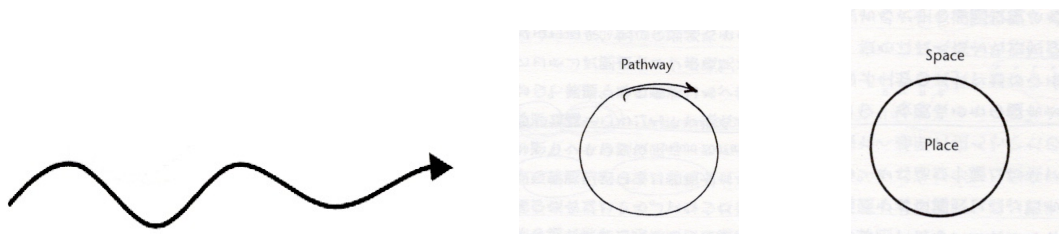


図 1 流れる「線」と閉じられた「ブロック」（出典：インゴルド 2021:172、351）

¹⁰ この線のイメージを、インゴルドはジル・ドゥルーズの「逃走線」の概念から得た。逃走線は、現実という既存の枠組みから逃走する線のことだが、それは現実逃避というより、新しい世界への創造的・能動的営みである（ドゥルーズ 2010：上巻）。

インゴルドは線の流れをドローイング、文字、音符、織物に当てはめる。それらはまず頭の中で概念を構想し、次にその概念を外に出すという2段階の表象活動ではなく、意識と身体が一つとなって動く働きである。これが生の基本的な様相である。たとえば、歌は言葉がそのまま旋律となるのであり、織物は糸がそのまま絡まり合うのである。つまり、感覚と身体的一致¹¹である。近代は精神と物体を別個のものとし、精神を上位に置いて身体という物質を下位におく二項対立と序列化を原理とした。しかし、生の線はこの身体と精神の二項対立と序列化を無効にする。

インゴルドが「線」を通して主張することは、私たちの生は線のように自由に流れ、運動すること、その線の流れは世界に開かれているということである。

1-2 応答：出会いとつながり

自己と他者（たち）の生の線が出会い、つながり、ともに歩むことが「応答(correspondence)」である。応答の特徴を示すために、インゴルドは相互作用(interaction)と比較する（インゴルド 2017:220）。図2を使って説明してみよう。

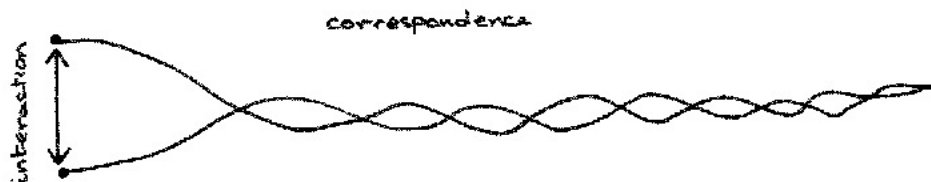


図2 「応答」と「相互作用」（出典：インゴルド 2017:220）

応答は、自己と他者の線が絡み合って一つとなり曲線状にすすむ動的状態である。一方の相互作用は、自己と他者の点と点が直線で結ばれ、分離したまま固定される静止状態である。応答は自己と他者が並んで(along with)歩き、ともに眼前に広がる風景を見て進むようであり、相互作用は自己と他者が向かい合い (between)、見つめ合って立ち止まり、相互の背景しか目に入らないようである。応答は弦楽四重奏の演奏家が他の演奏家の音を聞いて調音するようである。そう

¹¹ この精神と物体の一致という考えは、モーリス・メルロ＝ポンティの身体論を参考に行っている。ポンティによれば、身体は物体と精神の両方を持つ両義的なものである。一般的に精神は感情や認識や意志を、物体は形や重さや運動を司るものとして捉えられているが、たとえば悲しくて涙が出るというように身体上では一つの現象として現れる。そのような身体を、ポンティは世界と出会い、世界を経験するための媒体（メディウム）と考える。何かを見るときは、目が見て脳が認識するのではなく、身体全体が見ているのである。そのような身体を「現象的な身体」や「生きた身体」と呼んだ（鷲田：2003:97-100）。

して発した音は「あいだの音」¹²である（あいだにある音ではない）。あいだの音とは、あいだを流れ続ける音である（インゴルド 2018:290）。あいだの音は、こうして全体と混じり合い調和していく。英語の correspondence は、応答、調和、一致、文通¹³といった言葉に訳されるが、これらの意味を包含している。

1-3 絡みあい：生成と変化

「応答プロセス」における自己と他者のつながり方は「絡みあい」である。インゴルドは、これを内側で絡みあって進行する相互の働きかけであると述べる（インゴルド 2020:118）。この「絡みあい」を理解するために、メルロ＝ポンティの「巻き込み」の概念¹⁴を参照しよう。それは他者の中に入って相互浸透する内面的な交流である。自分を忘れ、他者の内側に入ることによって両者が交叉し、その立場は交換可能となり（可逆性）、主体/客体、中心/周辺、主/従といった二項対立の関係は薄まり、対等で合一的な関係が生まれ、そこから出来事が生じる。

「絡みあい」というつながり方をイメージするために組紐¹⁵にたとえてみよう。組紐は、色や材質の異なる糸を組み合わせて、多様な模様の作品が生成する（図3）。

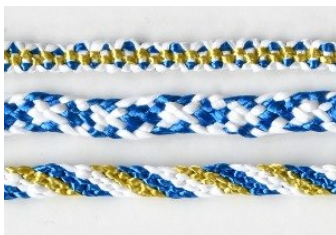


図3 異なる糸の組み合わせから生成する多様な組紐作品

（出典：<https://imagenavi.jp/search/#!/組紐> 2024年11月26日アクセス）

組紐の作成過程について見てみよう（図4）。もとは個別のバラバラの糸が織り合わされ、複雑な色彩模様が生成され、その織られた組紐が他の組紐と結ばれ、さらなる複雑な組紐に変化していく。この生成と変化による展開は無限である。

¹² 「あいだのもの(in-between)」と「あいだ(between)」は違う。後者は単なる架け橋であるが、前者は始点も終点もない生成世界である（インゴルド 2018:289）。また、インゴルドは「あいだ」を能動態でも受動態でもない領域としての「中動態」と近い意味でも用いている（インゴルド 2018:299）。

¹³ 文通は往復する手紙による交流であり、そこには特定の誰かに向けた特別の言葉（メッセージ）が記され、唯一無二の関係が生まれる。

¹⁴ 巻末「補足説明」5)のメルロ＝ポンティの項を参照。

¹⁵ この組紐のイメージは、アンリ・ベルクソンの「生の組紐」の概念を用いている。ベルクソンは、生物の進化をダーウィンの遺伝と自然淘汰という外部要因による受動的な出来事としてではなく、自律的に、創造的に進化する成長プロセスとした。生物は環境に対して直感的に適応し、他の生物と生の交換が行われ、その時にエネルギーを発散し、進化する。この力を「生の躍動」と呼んだ。

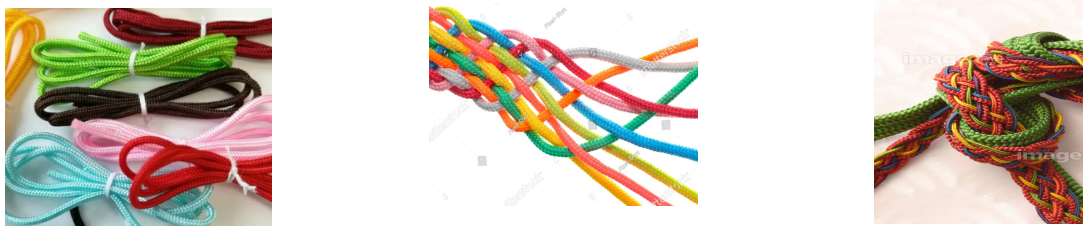


図4 組紐の作成過程：左は個々の糸、中は異なる糸の織り合わせ、右は組紐のさらなる展開
(出典：<https://imagenavi.jp/search/#!/組紐> 2024年11月26日アクセス)

組紐の特徴は、素材となった元の糸の色や形（特質）が生成した組紐に保持されまま、元とは異なる新しい糸（組紐）が誕生することである。これは再生産の仕組みである。しかし、全く同一のものが生産されるのではなく、差異が生じ、新たなものが生まれる再生産である。ここでの差異は二つのものを区別し断絶する差異ではなく、連続性と新規性を持つつながりの差異である。

組紐の糸を人間に置き換えれば、自己と他者が絡みあって新しい人間が生まれる（生成変化）ということになる。その絡みあいの要は組紐の結び目（図3の右図）にあり、人間で言えば出来事を経験を他者ととともにすることである。そして、この絡みあいのつながりは次々と別の絡みあいのつながりへと広がっていく。これは「生の絡みあい」と言える。この自己と他者による絡みあいは、バルーフ・デ・スピノザがいうところの「物体は単一の個体ではなく単体と単体が合一して形成された新たな個体である」という「情動」¹⁶の概念と重なる。このような形で自己と他者はともに生成変化を続けながら生きている。

1-4 メッシュワーク：関係の集合体

「生の絡みあい」どのような展開をするのだろうか。それをインゴルドは、「メッシュワーク」という比喻で表現する。メッシュワークは網目構造と訳されるが、それは規則正しく配列された網目ではなく、無秩序で形も大きさも定まらず、無方向で行き先もわからない、あたかも蜘蛛の巣やリゾームのようである。メッシュワークの特徴を示すために、インゴルドは、「メッシュワーク」を一般的なネットワーク構造と比較する（図5）（インゴルド 2014:133）。

¹⁶ 巻末に「補足説明」をつける。

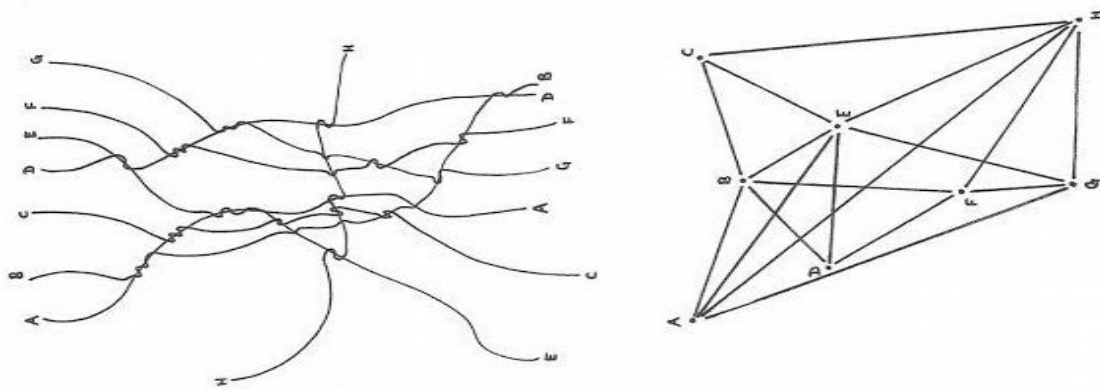


図5 メッシュワーク（左）とネットワーク（右）（出典：インゴルド 2014：133）

メッシュワークは、曲がりくねった線がある所で分岐し、ある所で交叉し無秩序・無方向に広がっていく。これと対照的に、ネットワークは点と点が直線で結ばれ、幾何学的に秩序だっとながっていき、その結節点は機械の連結器のようである。インゴルドは、メッシュワークとネットワークを徒歩旅行と輸送という移動の形式に喩える。徒歩旅行は行く先が決まっているわけではなく、気が向いた場所を放浪し、途中で偶然に友人に会ったり、見知らぬ人と出会って交流したり、道端の植物を観察したり採集したり、そのプロセスを楽しみながらさまざまな発見をする。一方で輸送は、ある品物がある目的地まで確実に短速で届けることが使命であって、そのプロセスに意味はない（インゴルド 2014：134）。生きていくことは、徒歩旅行のように偶然と不確定要素の中で、驚きと発見が溢れるプロセスである。メッシュワークという比喻を用いてインゴルドは、生きているということはあらかじめ設定した目標に向かって数量化したデータを用い計画的に進むことではなく、道中での他者との偶然の出会いと新たな発見を楽しみながら進んでいくプロセスであるとする。そうして形成された生の領域を、インゴルドは「メッシュワーク」と呼ぶ。

この「メッシュワーク」は、ジル・ドルーズの「リゾーム」や「アレンジメント」、あるいはブルーノ・ラトゥールの「アクターネットワーク (ANT)」と重なる概念である。これらは、多様な要素(存在)のつながりによって形成され、その要素とは人間に限らず存在するもの全てである。この集合体における要素間の関係は対等で、相互に影響しあい生成変化していく。このような集合体は自然界に見られる。たとえば、蜘蛛は植物の葉や木の枝と絡まり合って巣を作り、この巣の網の目の中に昆虫を絡みとり、その昆虫を求めて鳥がやってくる。このように、蜘蛛の巣の周囲に異なるものたちが寄り集まって生の領域が形成される。

メッシュワークは多様な存在のつながりによって形成された領域であると述べたが、ここで用

いる領域の意味は、国家の領土のように境界線を定めてブロック化し、内側と外側を分けて相互の交流を阻止するものではない。メッシュワークが意味する領域は、つながりの強度が絶えず変化し、その配置も変化するから境界は緩やかである。そして、境界線は恣意的なものでないから、領域への出入りは自由である。この自由な領域であるメッシュワークは、いつでも他のメッシュワークと繋がることが可能である。

1-5 移動：異質な他者とともに

蜘蛛が来て枝に巣を作り、虫がその巣に引き込まれ、鳥が飛んでくることは、すべて移動によって起こる。移動とは、ある場所からある場所へ動くことであるが、それに伴って様々なことが起こる。インゴルドは「生きていること」は動くこと、動くことは知ることであると述べる（インゴルド 2017:14）。ジョン・アーリは移動とは人、モノ、情報の関係であると述べる（アーリ 2015）。また、ドゥルーズは遊牧民の移動を新しい創造の可能性として捉える（ドゥルーズ 2010）。移動は未知なる他者（人やモノ）との出会いとつながり、そして新しい出来事が生じる出発点となる。

移動に伴う他者との出会いは、あらかじめ予定されていることではなく偶然の出来事である。そこには他者に対する先入観や恣意的な選択が入る余地はなく、その他者とのつながりは始原的・情動的な関係である。それは他者を対象化するのではなく、「ともに生きること」である。インゴルドは「ともに生きること」は、異なる生きものがそれぞれの道を歩みつつ出会い、お互いの特質に注意を向け、応答し続けることだと述べる（インゴルド 2024）。花崎皋平は私たちが互いに加害性と受苦性を持つ存在として認め合いともに生きることを理想としとし（花崎 2001）¹⁷、井上達夫は異質な人格が互いに他者を手段としてではなく、他者自体を目的とすることがともに生きることの基本である¹⁸とする（井上 1996）。J・L・ナンシーは異なる人々が共通性によってではなく異質性によってつながる集合体を「無為の共同体」¹⁹と呼ぶ（ナンシー 2001）。移動は、このような異質な他者²⁰とともに生きることを導く行為なのである。

1-6 「応答プロセス」：解釈のための道標

「応答プロセス」は、以上のような思考過程を経て設定される解釈の道標である。「応答プロセス」とは、「環境(社会と自然の融合)の中で、異質な他者（人間と人間以外を含むすべての存在）と出会い、絡みあい、ともに出来事を経験し、メッシュワークを形成し、新しい地平を開い

¹⁷ 巻末に「補足説明」をつける。

¹⁸ 巻末に「補足説明」をつける。

¹⁹ 巻末に「補足説明」をつける。

²⁰ 巻末に「補足説明」をつける。

ていく生き方」とする。

「応答プロセス」は生き方の様式である。それは具体的な態度、意識と行動、そこから生成する他者との関係である。生きていることは、出会い、応答、出来事、そして世界へと連続するプロセスであって、断片のつながりではない。このプロセスの核は「絡みあい」というつながり方にある。「絡みあい」は、異質な個（人、モノ）がその差異を維持したまま他の個と一体となり新しい個（差異）となる。この「なる」ということが「生成変化」である。この絡みあいのつながりは、分離と合流を繰り返し、無作為にしかし自律的に展開し、「メッシュワーク」という生の領域を形成する。

第2章 在日カンボジア人とは

本章では在日カンボジア人を理解するために、在日カンボジア人とカンボジア定住難民の概要、母国カンボジアの自然・歴史・文化と近現代史、在日カンボジア人の生活実態と課題について述べる。

2-1 在日カンボジア人の概要

「在日カンボジア人」を日本に生活基盤を持って暮らすカンボジア人とする。在日カンボジア人は主に留学生、定住難民とその家族、技能実習生である。図6にあるように在日カンボジア人の人口の推移をみると、1965年の22人から1975年の人々は主に留学生である。1980年代初めには100人、そして後半には1000人という急激な増加は定住難民と呼び寄せられた家族たちである。この人々が本稿の中心となる人々である。2015年以降の急増は技能実習制度の拡張²¹によって来日したカンボジア人である。2023年現在、外務省に登録された在日カンボジア人口は2万人を超えている。

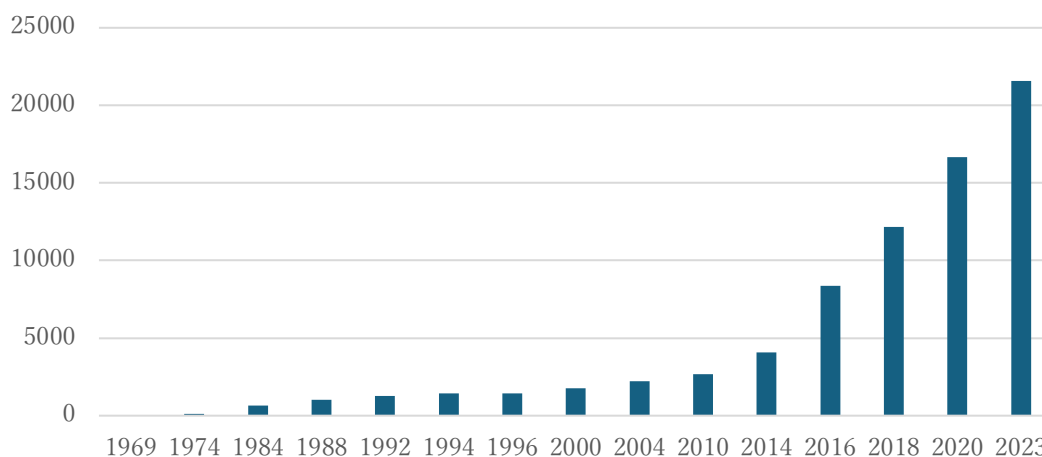


図6 在日カンボジア人口の推移

(出典 法務省在留外国人統計より筆者作成)

2-2 在日カンボジア定住難民の概要

²¹ 技能実習制度は1993年に創設され、2015年の制度拡大によって研修生が急増した。その背景は、工場や建設現場での労働力需要から、介護の急激な担い手不足という日本の事情による。研修という名のもとであるが、実際は日本の社会と経済を支えるための制度である（鳥居2020）。

在日カンボジア定住難民とは、日本政府が認定したインドシナ定住難民 11,319 人のうちのカンボジア出身者である。インドシナ定住難民とは、1979 年の閣議決定によって、定住を前提に正式に受け入れたインドシナ 3 カ国、ベトナム、カンボジア、ラオスの人々である。カンボジア定住難民は 1,357 人、全体の 12% である（図 7）。

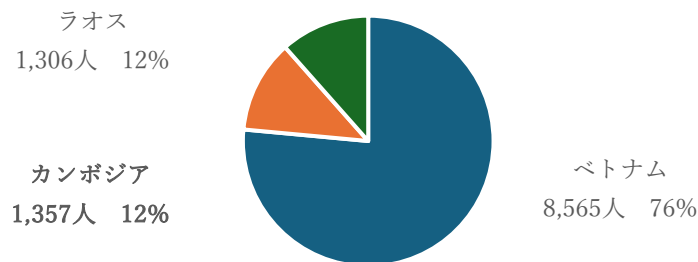


図 7 国別 在日インドシナ定住難民の割合
（出典 法務省在留外国人統計より筆者作成）

図 7 のインドシナ 3 カ国の難民の来日経路を見ると、ベトナム人はボートで漂流して日本にたどりついた人が 41% いるが、カンボジアとラオスからの人のほとんどは難民キャンプから空路で来日し、日本政府が正式に定住者として迎え入れた人たちである。残りのわずかな人たちは留学生としてすでに日本に滞在していた人たちである。

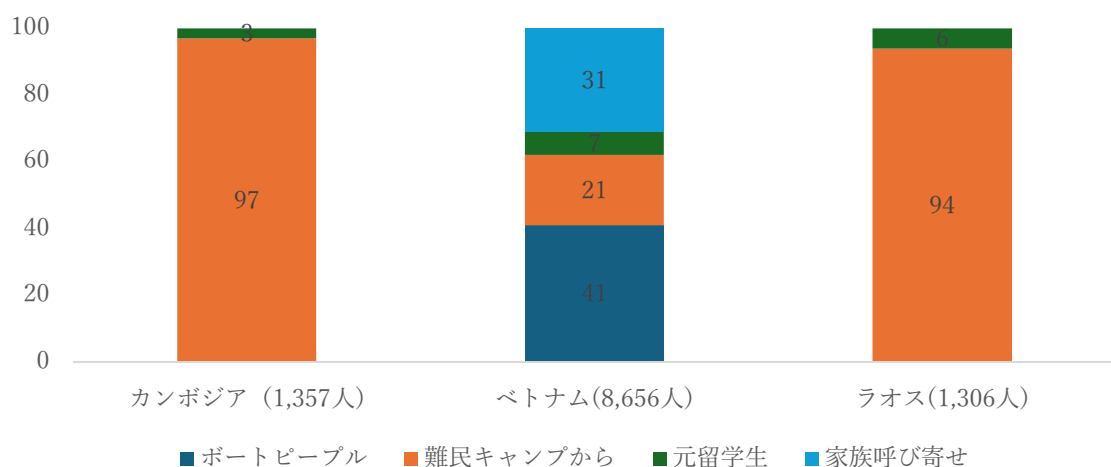


図 8 国別 インドシナ定住難民の来日経路

（出典：難民事業本部案内 2018「インドシナ難民定住許可数」より筆者作成） 17

カンボジア難民は、他の2カ国の難民とともに「インドシナ難民」とひとくくりにされる理由は、3カ国の人々の国外脱出の原因と時期が共通であることによる。かつてない大勢の難民を国際社会が庇護するために、国連が「インドシナ難民」として一括して認定した。その大量流出の原因は、1975年のアメリカの敗退によるベトナム戦争の終結、それに伴って生じたベトナム、カンボジア、ラオスの急激な政治体制の変化と社会の混乱である。

カンボジアはベトナム戦争の終結とともに樹立したポルポト政権が1979年に崩壊、その後誕生した新政権とポルポト軍の間の内戦は激化し、大勢の人々が国外脱出を決意した（詳細は後述する「カンボジアの近現代史」を参照）。1975年から1995年の間に、24万人のカンボジア人が国外脱出したといわれる。その多くは陸路で主に隣国タイの難民キャンプへ避難した。キャンプはタイ軍の管轄下であり、国連や非政府組織によって食糧配給、医療、教育などの支援が行われた。キャンプの人口は、カンボジアの地方都市並みの規模になり、カオイダンキャンプでは15万人にまでになった。タイにある複数のキャンプは、1993年のパリ和平合意まで存続する。この難民キャンプを経由して定住審査に通ったカンボジア人が、アメリカ、カナダ、オーストラリア、フランス、そして日本などの第3国へ向かった。その数は約11万人、そのうちの1,357人が日本に受け入れられたカンボジア定住難民である。

日本では、1980年の受け入れ開始から2005年の終了までに1,357人のカンボジア人が正式に受け入れられ、「定住難民」という資格によって年金や健康保険などの社会保障、公営住宅への入居など国民と同じ待遇が適用され、また本国で生き別れた家族を日本に呼び寄せることが認められた。これらの人々は、来日後に難民定住センターで3ヶ月の日本語学習と生活オリエンテーションの支援、並びに就職の斡旋を受けた。ただし、実際には難民の状況にあるにも関わらず、日本政府による難民認定が受けられず、さまざまなルートを通して来日したカンボジア人も多い。そのような人を含め、本稿では広い意味で「難民につながる人」として位置づける。図9は、政府公認のカンボジア難民数の推移である。

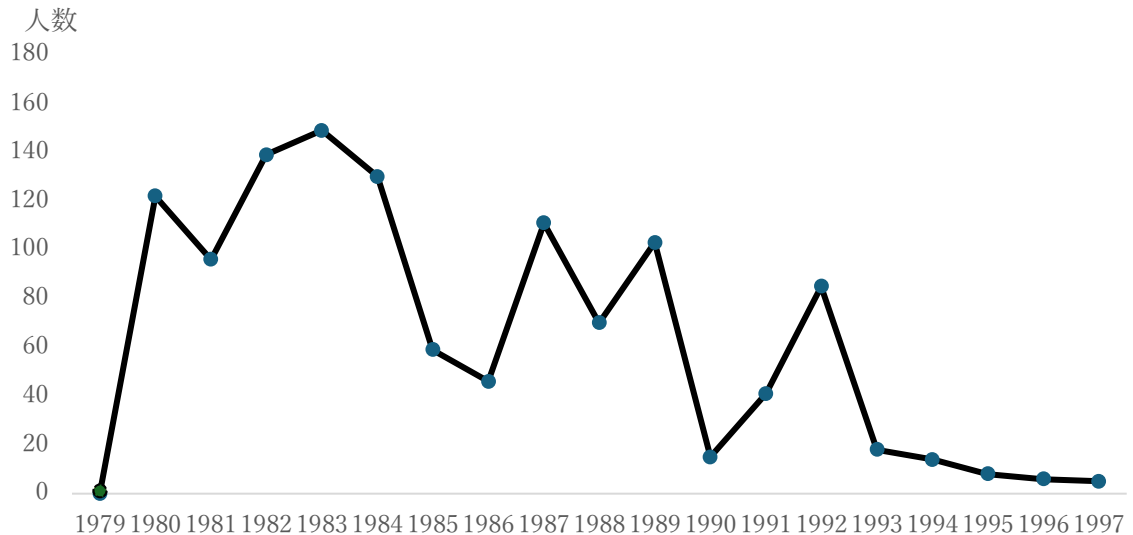


図9 年代別 カンボジア定住難民の来日人口の推移

(出典：難民事業本部案内 2018「インドシナ難民定住許可数」より筆者作成)

本稿で用いる「在日カンボジア人」という名称について、若干の説明をしておく。「在日カンボジア定住難民」あるいは「難民につながる人」と特定することで、「難民」に焦点が当たってしまうことを懸念するからである。なぜなら、本稿は祖国から日本へ移住せざるを得なくなった人の「生き方」に焦点を当てるからである。もちろん、その背景として「難民になったこと」あるいは「難民につながることは重要であるが、本稿は「難民とは何か」についての研究ではない。本稿で紹介する人々を「難民」としてではなく、日本という場所で「異質な他者とともに暮らす人」として位置付ける。実際に本稿で紹介する人々は、いわゆる政府が認定した「定住難民」という資格外の人がいる。本稿では、以上の理由により広く「在日カンボジア人」とする。ただし、記述の文脈上「カンボジア定住難民」や「難民につながる人」とする場合もある。

2-3 カンボジアの自然・歴史・文化

カンボジアはインドシナ半島に位置し、南西はシャム湾に面し、タイ、ラオス、ベトナムの3国に隣接する。カンボジアの中央平野を北から南へと流れるメコン河は、水源をチベット高原に発し、中国、ラオス、ミャンマー、タイを経てカンボジアへ至り、プノンペン首都の王宮前で北西部にあるトンレ・サーブ湖からの川と合流し、バサック川に分流する。メコン河は、現地の言葉で「大いなる川」と呼ばれるように、カンボジアの人にとってのシンボルでもある。メコンデルタの肥沃な土壌は米を、メコン河とつながるトンレ・サーブ湖は世界有数の淡水魚の生産を誇り、メコン川沿いの森林は豊かな食物を生み出す。このような自然の恵みとともに営まれる生活

は、その地で誰もが生きていける定住を基本とした穏やかな共同体を形成した。

東南アジア最大の湖であるトンレ・サープ湖が位置する現在のシェムリアップ州は、9世紀から12世紀にわたって国家統一を果たしたクメール王朝（アンコール王朝）誕生の地であり、多くのアンコール遺跡がある。クメール王朝は802年に成立し、12世紀になってその勢力は周辺のタイやベトナムにまで及び、この時にアンコールワットや多くの寺院が建築された。カンボジアの象徴でもあるアンコールワットは、当初はヒンズー教の寺院であったが、その後王の信仰の変化にともない、仏教の色合いが濃くなっていった。その移行は穏やかで二つの宗教は平和的に共存する長い時期を経て行われた。このような急変や混乱を避ける傾向、融通性や寛容さはカンボジアの人々の穏やかな性格を形作る。

宗教は、アンコール王朝以降は仏教（小乗仏教）が主流である。特にクメール民族においては90%以上が仏教徒である。どこの村にも仏教寺院があり、その地域の人々の生活の核となっている。仏教の教えは、社会の倫理・道徳となっている。この仏教の教えを基礎とした慈愛や寛容、歓待の精神は「クメールの微笑み」と言われ、カンボジア人の温和で平和な性質を表現している。

主要言語はクメール語であり、その源はサンスクリット語にある。現在でも仏教で使われる宗教用語には多くのサンスクリット語が使われている。それらを習得することは、一つの教養とみなされている。しかし、その他にも多くの少数民族は独自の言語を用い、それらは共存している。

クメール王朝時代の宗教的儀式において披露された踊りが、クメールの古典舞踊の始まりである。それは、クメールの宇宙観を表現している。影絵もまた、神聖な物語を伝えるために古代より演じられたが、時を経て現在では民衆の娯楽として定着している。

国外を問わず、カンボジアにルーツを持つ人にとって、以上のような祖国の豊かな自然、歴史、文化は大きな誇りとなっている。

2-4 カンボジアの近現代史

アンコール王朝時代の平和で豊かな時代と比べて、カンボジアの近現代史は苦難と混乱に満ちている。この苦難の歴史は、カンボジア難民が生み出される原因でもある。

アンコール王朝衰退後、ベトナムとタイからの侵略によって領土は縮小し、19世紀に入るとフランスの侵略によってインドシナ連邦に組み込まれ、植民地化される。この時にフランスの代理としてカンボジアの統治を担ったベトナム人との間の対立が、ベトナム人へのネガティブな感情として今日まで影響している。1944年には東南アジアへ侵略していた日本がフランスに代わってカンボジアを占領したが、戦後はフランスが再び占領する。1953年にシアヌーク国王を元首とする「カンボジア王国」として独立国家となり、東西冷戦下にある国際情勢の中で政治的中

立の立場をとったが、1970年にアメリカの思惑によりクーデターが起こり、シアヌーク国王は国外追放、アメリカ寄りのロンノル政権が誕生する。しかし、政権内の汚職や腐敗、アメリカ軍によるカンボジア国内への空爆が激化し、国土は壊滅状態となり、農村からプノンペンに農民が逃れ、ホームレス状態になった人々で溢れるようになる。このような中で、共産主義を掲げるポルポト派（クメール・ルージュ）貧困層の支持を得て、1975年に4月にポルポト軍の人民解放戦線がプノンペンを陥落、駐留していたアメリカ軍は撤退し、ポルポト政権の「カンプチア民主共和国」が成立する。しかし、極端な共産主義政策のもとでの強制移動、強制労働、家族の分離、貨幣の廃止、知識階級・都市階級への粛清などによって、多くの人々が飢餓や病気、処刑によって死んでいった。この間、カンプチア民主共和国は国際社会から孤立し、その国内状況は世界に知らされなかった。そして、1979年1月にベトナム軍がカンボジアに侵攻、ポルポト政権は崩壊した。そして、ベトナムに亡命していたヘン・サムリンが首相となって、「社会主義国カンプチア人民共和国」を樹立する。しかし、新政権もまた国際社会、特に資本主義陣営から孤立させられ、カンボジアの経済は極度に窮していく。同時に、下野したポルポト軍と政府軍との抗争は激化し、国内は内戦状態となり、人々の生命と暮らしは危険にさらされる。このような混乱状態の中で、多くの人々が生きるために、そして安定した将来の生活のために故郷を去り、避難民（国内）あるいは難民（国外）となっていった。それが、1980年代の初めのことである。

以上の近現代史を俯瞰すると、カンボジア自身は一度も他国を侵略していないにもかかわらず、近隣諸国から侵略を受け、帝国主義国家の犠牲となり、さらには資本主義対共産主義というイデオロギー対立の抗争道具として使われていく理不尽な運命が見える。そのような背景を知ると、カンボジア難民の原因を単純にポルポト政権に帰して、共産主義を批判する資本主義陣営は、狡猾である。あたかも自分には何の責任もないかのような顔をするが、歴史を振り返ってみると、元凶はカンボジア人にあるのではなく、西洋近代的な帝国主義・自国主義（日本も含めて）にあると見える。

もう一点、歴史を振り返って注目する点は、アンコール王朝までの平和で豊かな時代と植民地化されて劣勢に立たされる時代のギャップと、その後の戦後に独立し中立的立場をとって安定化した時期とその後の東西冷戦によって国内が分断化された時期のギャップという、二重のギャップである。特に戦後のシアヌーク時代の安定した祖国を知っている人は、現在でもその後に起こった内戦による混乱への失望を語る。その大きなギャップはカンボジア人によって生み出されたことではなく、国際政治による暴力とも見える。その政治的暴力によって苦しむのは一般の人々であった。

2-5 在日カンボジア人の生活実態と課題

1978 年に日本政府はインドシナ難民の受け入れを閣議決定し、1979 年から定住難民が集団として地域社会に参入した。それは日本社会にとって初めての経験であり、社会に大きなインパクトを与えた。インドシナ難民受け入れは、現代の「黒船」(田中 2013)になぞらえ、外国人政策の大きな転換点となっていくが、それは政治的な意味だけでなく、文化や社会、そして日本人の意識や態度へ大きな影響を及ぼしていくことになる。それまで定住する難民に対する人々の関心は高くなかったが、このインドシナ難民の受け入れを契機にさまざまな分野での論考や研究が始まる。以下では、日本におけるインドシナ定住難民、中でもカンボジア難民に焦点を当てた生活実態調査を含めて、政治学的・社会的・文化人類学的研究を通して彼らの状況を概観し、課題を抽出する。

1980 年代の受け入れ開始から受け入れ人数²²が増えていく 1990 年代初頭にかけて、インドシナ難民の生活実態の現状把握が課題であった。定住難民の相談・支援業務を担っていた民間の日本国際社会事業団²³は、インドシナ難民の生活実態調査を二度にわたって実施し、以下のような問題・課題を明らかにした(日本国際社会事業団 1983、1985)。1) 日本語習得 2) 経済的困難 3) 就労 4) 住宅確保 5) 子どもの教育 6) 男性の結婚問題 7) 家族呼び寄せと帰化。日本語学習は、日本人との意思疎通という点で就労や日常生活に大きな影響を及ぼす。経済状態は、全般的に厳しく、生活保護世帯は約 11%に上っていた。就労は、転職率が高く不安定な状況にある。住宅は、安価で安全な公共住宅への入居が確保されるべきである。多くの親は子どもに高等教育を受けさせたいと希望している。男子人口が女子人口を大きく上回るため、未婚男子は同国人と結婚することが困難で、67%が不安を抱えている。家族を呼び寄せたいが、永住権の取得や帰化が困難である。アジア福祉教育財団は、1990 年代にさらに具体的で詳細な内容の定住実態調査を実施したが、その結果は前述と大きな変化はなかった(アジア福祉教育財団難民事業本部 1993、1996)。つまり、当初の 10 年間は民間団体の支援と努力にもかかわらず、カンボジア人の生活はかなりの混乱と困難の中にあったということであろう。

法務省入国管理局難民認定室は、1987 年に定住難民の生活実態調査をおこなっているが、その目的は支援団体と異なり、定住難民の生活能力判断という意味合いが大きく、その調査結果により、難民たちの生活は自立には程遠いと総括する。その上で、日本語学習支援などの政府の諸政策は適切で、それなりに周囲との交流があり、先進国として負うべき国際協力を果たしている

²² 初年度は 500 人、しかし国際的圧力のもとで徐々に増やし、1985 年には 1 万人を超えた(滝沢・山田 2012:291)。

²³ 日本国際社会事業団は厚生省から認可された社会福祉法人で、世界 140 カ国以上にネットワークを持つ国際福祉機関の日本支部で、人々が国境を越えることで生じるさまざまな問題の相談に応じる民間団体(日本国際社会事業団 ホームページ <https://www.issj.org> 2024. 7. 17 アクセス)。

と述べ、自己弁明的である。このような難民の立場に立つのではなく、自分中心の法務省の態度はその後にも変わることがなく、現在まで続いている。日本政府のインドシナ難民受け入れに際しての排外的態度については、当初から批判されている（吹浦 1989、本間 1990、加藤・宮島 1994）。ちなみに法務省による調査は、この調査一回限りである²⁴。

それに比して、前述の国際社会事業団やアジアアジア福祉教育財団の調査結果と背景の説明は妥当である。この結果を活用して、実際の支援策が作成され、業務の向上に活用されている。また、この結果に基づいて、その後のさまざまな調査研究が行われ、難民の生活状況の変化を追うことが可能である。

カンボジア難民の「大量流出」の原因について、栗野鳳は 1970 年のクーデター後の内戦、ポルポト政権樹立、その後の内戦という政変と食糧危機にあるとし、また隣国タイに設置された難民キャンプが人々を国外脱出へ向かわせたと説明する（栗野 1986）。カンボジア人は伝統的に自給自足的な定住生活を営んでいたが、それが 1970 年代以降に崩壊し、農民が都市へ流れる「流動性」が生じていたことを難民流出の背景にあるとしている。

1990 年代後半から、カンボジア定住難民に特化した主題の研究が徐々に登場する。鈴木美奈子は、彼/彼女らの来日以前の移動過程から来日後の日本での生活を通して彼らの状況を論じた。それによると、カンボジア難民の多くは都会のエリート層ではなく、農民を含めて一般に人たちであり、また多くがポルポト政権下での強制労働を経験している。最初から海外への移住を考えていたわけではなく、国が安定したら帰国するつもりでいたが、その後も内戦状態は続き、難民キャンプでの長期滞在を余儀なくされ、早くキャンプを出たいという気持ちになり、日本の定住許可により、来日した（鈴木 1999）。このように来日への経緯は偶然と必然が重なり、単純ではなく複雑な流れの中にあることが鈴木の研究によって示されている。

鈴木はさらに、カンボジア難民たちが難民定住センターを経て生活再建に向けて就業していく状況を家族生活への影響と絡めて検討する。就業は定住センターを通して紹介してもらうが、自らの選択の余地はほとんどない。日本語を必要とせず、高度な専門技術を要しない職場は、大体が中小の工場での単純作業である。当時はまだ高度経済成長の中で、産業界は安価な労働力を求めていたので、就職に困ることはなかった。カンボジア人たちは定住難民という政治的資格を持つにもかかわらず、実際には安価な外国人労働者として産業界に利用された。そして構造不況の中では簡単に解雇され、失業し、そのために家族内に亀裂や葛藤を引き起こすという状態に陥った。鈴木は、この日本の政治的・人道的な制度と現実の矛盾を指摘する（鈴木 2000）。

次に、鈴木はカンボジア難民の日本社会への適応という側面において、家族の世代間葛藤につ

²⁴ 政府機関による調査として、1997 年に内閣府インドシナ難民対策連絡調整会議事務局による「インドシナ難民の定住の現状と定住促進に関する今後の課題」が実施された（内閣府 1997）

いて論じる（鈴木 2003b）。定住難民は、母国で生き別れたり、亡くなったりした人を思い、また内戦や避難の道程で恐怖の記憶を内在させながら、異国の地で新たな生活再建に向けて、社会へ適応していかななくてはならない。一方で子ども世代は、内戦を直接的には体験せず、日本社会の中で成長するが、学校でのいじめや差別に直面する。このように、家族間でも社会的適応のあり方や直面する問題には違いがあり、また親子間の日本語習得のレベルの違いによるコミュニケーションギャップによって、親子間における物理的、精神的なギャップが生じる。家族の間で異なる価値観や世界観を持つようになり、日常生活一般へネガティブな影響となって現れることを、鈴木は指摘する（鈴木 2003）。

志水宏吉らはインドシナ難民の子供達の学校適応について論考し、その要因として出身国による違いを反映した家族の物語が要因であるとする。カンボジアの場合、本国での過酷な経験と比較して日本の生活を「安住」と捉え、多少の抑圧にも我慢する傾向があり、それを親は子どもにも求める傾向がある。また、日本の均一的な横並びの学校文化が、異質な文化を持つ子どもたちにとっての大きな摩擦要因となることを指摘する（志水他 2006）。

長谷部美佳は、カンボジア難民男性の配偶者として日本に来た同国人の若年女性の実態を、「労働」と「結婚」という切り口から描き、「妻」「母」「嫁」という役割を期待され「再生産労働」に従事させられる女性たちは、エージェンシーとしての主体性が抑圧される状況にあることを提示した。その背景には、移民コミュニティのジェンダー規範とそれに影響を与えている日本の家父長制の存在があることを指摘する（長谷部 2010）。

堀井愛は、2000年代前半からカンボジア難民の生活世界についてインタビューと参与観察を通した質的調査を継続して実施した。堀井は「多文化共生」という言説のもとで、行政や支援団体、地域住民がカンボジ難民を、自分達に都合の良いイメージに合わせて表象し、それを難民自身が内面化してしまい、日本人にその表象を許していると述べる（堀井 2005）。しかし、日本人に対するそのような受動的態度をとるだけでなく、カンボジア人コミュニティの中で相互扶助を行い、また他の難民や日本人との交流を行う能動的な姿も描くことで、葛藤と困難の中で、自分なりの生き方を模索し、実践していると論じる。堀井は、この生き方を「生き残りの技術」とし、これをカンボジア人の「ディアスポラ性」として解釈する（堀井 2005）。

以上の先行研究は、在日カンボジア人の「難民性」に焦点が当てられている。それは当時の状況を考えると優先的な主題であったろう。難民としての困難や葛藤を示し、その原因や構造を検討することによって、カンボジア人の社会適応政策や支援策を設定するために必要だった。一方で、カンボジア人を「難民」という立場に限定し、あるいは「難民性」に集中するあまり、それ以外の主題が希薄となった。また、カンボジア人の生活を「難民性」の視点から見ることで、「不安」「困難」「脆弱」「葛藤」「抑圧」といった負のイメージで表象することが多く、それがステレ

オタイプ化して、一般の人の中に難民＝弱者が固定されてしまう傾向が生まれた。例えば、買い物難民、介護難民といった言葉がマス・メディアで頻繁に用いられるが、難民である人にとって、これらの言葉はどのように感じられるのか。本稿では、在日カンボジア人の難民性を前景させず、異文化社会の中で、多様な人やモノに囲まれて生きる存在として、その生き方を模索することを意図する。当然、彼/彼女らの特性として難民となったことや難民につながることは重要であるが、本研究は「難民研究」ではなく、「生き方の研究」として、生きていく上での条件と可能性を現場から探る研究である。

加えて、上述した先行研究と異なる方向として、難民＝弱者という負のイメージからの脱却を意図している。人間の人生や生活は誰でもプラスとマイナス両方の傾向を持つが、インドシナ難民についての研究の多くは、その負の側面が前景されてきた。その偏重から脱し、本項ではプラスの側面を前面に示していく。

また、先行研究の多くは在日カンボジア人の生活世界のある部分やある時期を取り上げて検討したものが多く、全体から俯瞰して部分を見るという視点は十分ではない。それは、多くの研究が 1990 年代から 2000 年代にかけてのもので、来日してから十分な時間的経過を経ていないことによるのだろう。その点で、本稿は来日から 40 年近い年月が経ち、第一世代から第二世代へと世代経過を経て、長いスパンで在日カンボジア人の生活世界を見ることができる。この点から、本稿では全体から部分を捉えるという視点を取り得る立場にある。

もう一点補足的であるが、インドシナ定住難民の中でも在日ベトナム人を対象にした研究に比べ、カンボジア人に関する研究は極端に少なく、この点から在日カンボジア人に関する研究の蓄積への一助となるであろう。以上が、研究上の本稿の特徴であり、また意義である。

本稿で捉える在日カンボジア人の特徴を確認すると、以下のようである。第一に、母国の共同体における自然や隣人との親密なつながりへの感性和仏教に根ざした道德観を引き継いでいること、第二に、興隆と衰退、平和と混乱という母国の歴史の二重のギャップが生活と精神に影響を与えていること、第三に、難民となって世界各国へ拡散した同胞との間で新しい関係と民族的アイデンティティが築かれつつあることである。

第3章 希望を生きる在日カンボジア人 1.5 世

本章は、在日カンボジア人 1.5 世の希望を生きるライフストーリーとその考察である。ライフストーリーに入る前に、問題関心と目的、調査方法、そして「移民 1.5 世」の概要と「希望のメソッド」の概念を紹介する。

3-1 問題関心、目的、方法

本章の目的は、幼少時に来日した在日カンボジア人 1.5 世（以下、1.5 世）が、不確実な状況の中で遭遇する困難や危機に対してどのように対応したか、何を学んだか、そのことを周囲の多様な他者との関わりに焦点を当てて描き、考察することである。

在日カンボジア人 1.5 世は、日本に移住した 1 世の子どもであり、「移民 1.5 世」の範疇にある。移民 1.5 世とは幼少時（年齢に規定はないが学童期直前から中学生まで）に他国へ移住し、移住先の学校教育を受けて成人となる人である。1.5 世は、出身地の言語、文化・習慣から移住先の言語と文化への移行と、形成途上の自己アイデンティティの再形成という二重の移行を同時に行い成長する。また、移住先の公立学校教育を受けるということは、移住先の「国民」として訓練されるということを意味する。

筆者は、調査の当初から 1.5 世という世代に注目していたわけではなかった。初めは 1 世の人たちへのインタビューが中心であった。その 1 世たちの語りの中心は、主に祖国からの離散や難民キャンプでの経験が中心であった。その中で子どもである 1.5 世の学校のこと、仕事のこと、結婚のことなどが話題となり、1.5 世が 1 世とは異なった困難や葛藤を抱えている様子がうかがえた。そこで、直接に 1.5 世にインタビューを申し込み、話を聞くことにした。すると、同じ在日カンボジア人でも 1 世と 1.5 世の経験には大きな違いがあることを知り、そして何よりも同じ日本の地で暮らしているにもかかわらず、筆者が知らない様々な経験をしていることに圧倒された。その彼らの生き方をもっと深く知り、学びたいと思ったことがきっかけである。

1.5 世の生き方を探究する理由は、一つには彼/彼女らが 1990 年前後に日本に移住したニューカマーの子どもたちの先陣として、同質性の高い日本社会において「異質な子ども」として経験する困難は、他の外国人の子どもと通じると考えるからである。もう一点は、1.5 世が現在壮年期に入り、過去の出来事を意味付け、再帰して語るができるステージにあることである。

調査方法は、対話的インタビューを通したライフストーリーを中心にして、関連する各種イベントでの参与観察と文献、資料による。

3-2 「移民 1.5 世」と「希望のメソッド」

3-2-1 移民 1.5 世の概要

移民 1.5 世という世代概念は、移民学者のルベン・ルンバウトがアメリカのインドシナ定住難民の適応に関する研究において、移住期に成人であるか子どもであるかによってその適応形態や生活経験には大きな違いがあり、同様に分析することはできないということから提唱した世代概念である (Rumbaut 1991)。1.5 世は出身地の言語を母語とし、生活習慣や社会規範など出身地の文化を身につけた上で移住し、移住先で新たに言語や文化を学び直し、アイデンティティを形成していく。その経験は、母国ですでにアイデンティティを確立した 1 世とも、また移住先で生まれ育ち移住先の言語を母語として育つ 2 世とも異なる。「移民 1.5 世」の定義には確立したものがあるわけでないが、本章では、「思春期以前に移住し、移住先の学校教育²⁵を受けて成長する人」とする。

ルンバウトらは、アメリカの 1970 年代以降の中南米やアジアからの新移民 1.5 世の適応形態は、かつてのヨーロッパ移民のような単線で直線的なものではなく、複雑で多様な過程をとることを明らかにし、これを「分節化する同化」²⁶と称した。分節化要因として、1) 人的資本 (学歴、職業、言語といった個人的属性) 2) ホスト社会の受け入れ体制 (移民政策や人々の意識) 3) 家族構成 (両親・片親など) をあげ、その適応の型を「不協和型文化変容 (親はアメリカ文化を習得せず、子どもは母国文化を喪失し、親子間で文化の不協和がある)」、「協和型文化変容 (親子ともにアメリカ文化を習得し、母国文化を捨て去る)」、「選択型文化変容 (エスニック・コミュニティに繋がることで、主流文化を習得しつつ、母国文化を選択的に保持)」と分類し、「選択型文化変容」が個人的にも社会的にも恩恵が大きいとする (ポルテスとルンバウト 2014)。そして、1.5 世の適応によって彼/彼女らが将来をどのように実現していくかは、当事者のみならず、受け入れる社会にとっても重要な関心事であることを指摘する。ルンバウトらによる 1.5 世の適応形態は 20 年前のアメリカの 1.5 世についての枠組みであり、またあくまで理念型でそのまま応用することには無理があるが、基本的に現在の日本の 1.5 世にも当てはまり参考となる。

²⁵ 学校教育を受けるということは、その国の文化や規範を身につけさせる規律化・社会化という点で、移民 1.5 世の特別な立場を作る意味がある。

²⁶ 分節化された同化 (segmented assimilation) における「同化」の概念の基本にあるのは、移民マイノリティと受け入れ社会のマジョリティとの出会いがどのような結果をもたらすかをその事実に基づいて予測し、同時にそれが社会的に望ましい目標であると主張することにある。「不協和型文化変容」は、移民の子どもが親より先にアメリカ文化を習得し移民文化を喪失した場合、「協和型文化変容」は親と子どもがアメリカ文化を習得し徐々に母語や母国文化を捨て去っていく場合、「選択型文化変容」は親子が自分のエスニック・コミュニティに埋め込まれ主流文化による影響を調整し母語と母国の規範を選択的に保持する場合に起こる。「選択型文化変容」が親子の葛藤を少なくし、バイリンガルとなる可能性が高い (ポルテス他 2014)。

日本における移民 1.5 世の人口は、1970 年代から 90 年代にかけてインドシナ定住難民（ベトナム、カンボジア、ラオス）、日系中南米人（ブラジル、ペルーなど）、フィリピン人、イラン人などニューカマーと呼ばれる人の増加に伴って増加した。移民 1.5 世の人口状況を概観・推定するために、絶対数ではないが 5 歳から 14 歳までの外国人人口状況の推移を図 9 に示す。

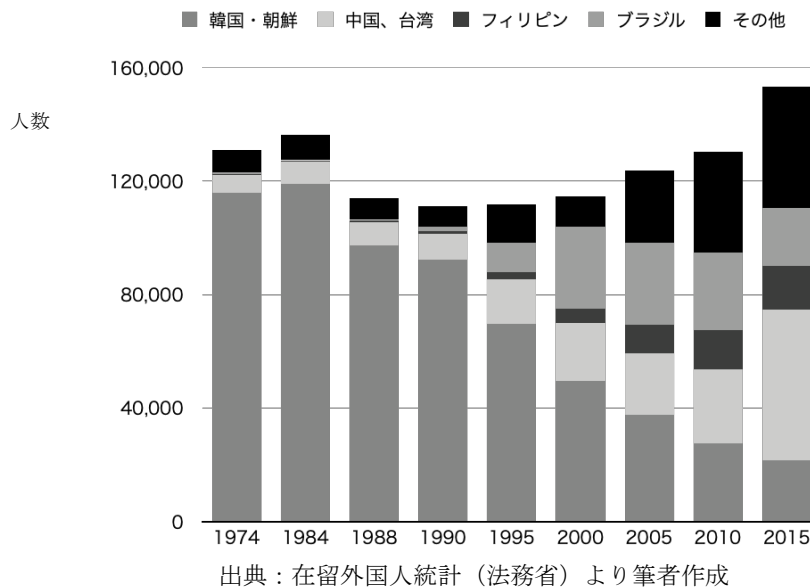


図 9 年代別、国籍別 外国人人口（5-14 歳）の推移

1974 年から 2015 年の人口数は約 13 万から 15 万人と大きな変化はないが、その国籍の割合は大きく変化する。1974 年に 88%（総数 131,076 人）を占めていたオールドカマーである韓国・朝鮮国籍²⁷の子どもが減少し、代わって中国、フィリピン、ブラジルなどニューカマーの子どもが増えていく。さらに、2010 年以降になると「その他」の国籍の割合は 28%（総数 153,245 人）に達し、多国籍化がすすんでいる状況が見て取れる。ニューカマーの来歴は、定住を許可され来日したインドシナ難民、労働力として日本政府が受け入れを促進した日系ブラジル人、エンターテインメントとして興行ビザで来たフィリピン人など様々であり、1.5 世の状況や経験は、それら親の来歴や日本における立場に大きく影響を受ける。

その移民 1.5 世たちの状況が社会の課題となっていき、2000 年代以降に 1.5 世に関する社会的・文化人類学的研究が活発になっていった。それらの研究の主題は、主に異文化社会に参入した子どもがどのように言語や文化の課題を含めて社会に適応するか（志水他 2001、児島 2008、

²⁷ 韓国・朝鮮国籍について、「韓国」は大韓民国の国籍、「朝鮮」は敗戦後に日本に在住する朝鮮人の国籍欄に記載されたものであり、朝鮮民主主義人民共和国の国籍ではない。

中室 2012、大谷 2013)、日本と母国のあいだでどのようなアイデンティティを形成するか(大西 2001、森田 2007、三浦 2015、額賀 2017)が中心であり、それによって社会の1.5世への社会の認識は促進し、学校や社会の制度において改善がはかられてきた。しかし、1.5世の一人の人間としての生き方という視点からの研究は多くない。1.5世は、マジョリティとは異なる経験を通して、生活の中からそれぞれの生きる知恵を生み出している。

以下では、在日カンボジア人1.5世の人口の推移と歴史的な経過を述べ、その後に1.5世についての先行研究を検討する。図10はカンボジア人5歳から14歳の人口の推移である。1974年には4人のみであったが、1984年からいっきに増え、1990年に323人、1995年に342人とピークに達する。この中に本論の調査協力者である1.5世が含まれる。

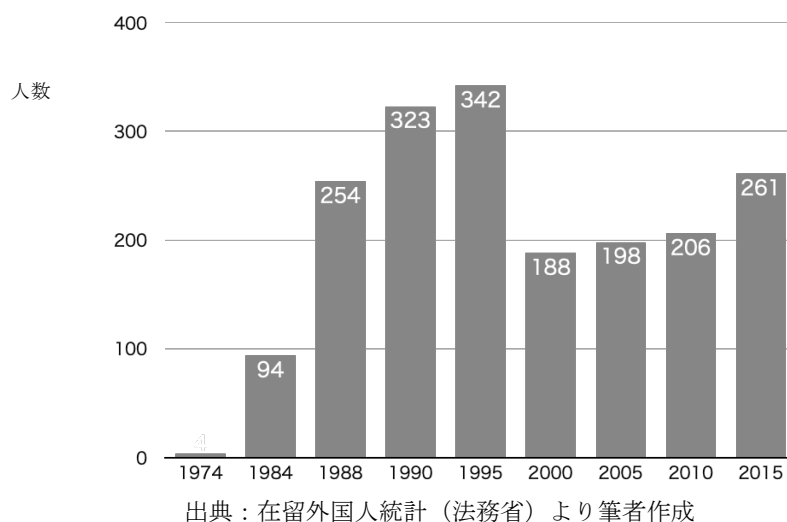


図10 在日カンボジア人（5-14歳）人口の推移

本章の調査協力者であるカンボジア人1.5世は、1980年代から90年代にかけて来日した人々である。彼らの親世代は、祖国での繰り返される戦争の歴史、アメリカ軍による空爆、ポルポト政権下での強制労働や家族分離、内戦による社会の混乱という状況の中で家族の生命と将来のために国外へ脱出した。しかし、当時子どもであった1.5世はなぜ祖国を離れなければならないのか、なぜ他人の国で暮らさなくてはならないのか、理解できないまま、他国へ避難し、親から説明されることはほとんどなかった。親世代の多くは、ポルポト政権下で思春期をおくり、強制労働させられ、適切な教育の機会を奪われ、家族分離によって家庭内での教育も受けられなかった。そのため「文化的資本」も十分に持っていない場合が多く、ベトナム難民1.5世の親と比べると学歴は低く、家庭内での民族教育への関心も低いという調査結果がある(内閣官房 1997)。この

ことは、カンボジア人 1.5 世の学習環境や進学・進路に影響を及ぼし、また親子の価値観の違いや葛藤の原因にもなっている。

カンボジア人 1.5 世が来日した 1990 年前後は、東西冷戦構造が終結し、経済のグローバル化と新自由主義が勢いを開始した時期である。日本でも経済界からの安い労働力の要請に政府が応じ、外国人労働者が急増し「多民族社会」が予見され、「内なる国際化」や「多文化共生」²⁸という言葉が謳われるようになる。後期近代と言われるこの時期は、社会の流動化が進み、人々が「原子化・個人化」していく時期でもある（バウマン 2001）。このような、社会の変動期に 1.5 世は来日した。それは、彼/彼女らの生活にとってプラスにもマイナスにもなり得た。プラスの面としては、外国人への支援活動が盛んになり、学校での国際教室やボランティア団体による学習支援などを受けることができたこと、マイナス面としてはニューカマー外国人労働者の一員として低賃金の単純労働市場の枠組みに組み込まれていったことなどがある。

3-2-2 希望のメソッド

不確実な世界を生き抜くため方法は、過去にあった〈もうない〉ものを求めるのではなく、未来の〈まだない〉ものに向かうことであると宮崎は述べる（宮崎 2009）。これが、「希望のメソッド」の核である。その実践はより良い生を求めて他者と関わり、希望と絶望を繰り返しつつ、新たな自己を発見していくプロセスにある。これを宮崎は、「知の方向転換」と呼ぶ（宮崎 2009）。インゴルドによれば、「希望のメソッド」は世界との関係を調整する「応答」である（インゴルド 2017:27）。そして、希望を〈いまだない〉ものと定義したエルンスト・ブロッホによれば、希望は閉じることのない「つながりの円環」の中にある（ブロッホ 2012）。

宮崎は、先住民系フィジー人（スヴァ人）の土地返還を求める試みを希望メソッドの事例としてあげる。イギリスに植民地化されたフィジー諸島では、先住民のスヴァ人は祖先伝来の土地を収奪され、他所へ移住させられた。スヴァ人はその後 100 年にわたって、奪われた土地の補償金を政府に請求したが、拒否され続けた。スヴァ人にとって、補償金の要求は単なる金銭的利益ではなく、祖先の魂と言葉を実現する使命なのである。無視し続ける政府に対して、証拠となる文書の公開を求めるが拒まれる。スヴァ人は単なる請求から戦略を変え、複数の氏族が共同して質問状を政府に出し、それまで常に政府からの質問に答える立場にあったスヴァ人が質問する側になり、政府が答えるという関係の逆転が起こった。〈いまだない〉ものへの挑戦である。このことにより、それまでスヴァ人を見下していた政府の態度が変わり、土地所有の再審議を約束し、

²⁸ 日本では、「多文化共生」を行政がスローガンとして利用したり、イデオロギー概念となって専門用語として使われたりして、本質的な意味が無化されていると指摘される（栗原 2016、塩原 2012、モーリス＝スズキ 2013）。

その結果は第3者に委託するというものだった。この結果は必ずしもスヴァ人が願ったものではなく、再び新しい不確定性の中に入ったが、それは再び〈いまだーない〉＝希望の実現に向かって歩み出す瞬間でもあった。スヴァ人の自己知識への探究はこのようにして続いていく（宮崎2014）。

「希望メソッド」における「知」は抽象的な知識ではなく、具体的な状況におけるものである。人類学者のティム・インゴルドは、「後ろを見ることよりも前方を見ることの方に、過去を振り返るよりも物事を予期することの方に、何かを発見する道は開かれている」と述べ、さらに「計画や予測に應えることから遠く離れて、希望と夢の中で、その手は物事と出会う」と述べ、生きていることは「経験することにおいて行うことである＝経験された行動」とも述べる（インゴルド2018:284）。その意味は、生は行うことであり、その具体的な実践が生であり、そこから生まれるものが「知」である。

「希望のメソッド」の特徴は、不確実性と可能性、失望と希望、差異と同一化にある。これは移民1.5世の現実には当てはまる。未知の世界に突然放り込まれた移民1.5世は、様々なリスクにさらされると同時に、新しい可能性に満ちている。その不確実的な状況を生き抜くために、あらゆる手段を講じ、あらゆる人びとと関わりながら、世界を学んでいく。この1.5世の現実を「希望メソッド」という視点で描く。

3-3 在日カンボジア人1.5世のライフストーリー

本節は、在日カンボジア人1.5世が異質な他者との関わりを通してどのように生きる知恵を身につけていったのか、どのように希望メソッドを実践したかについて、Pさんのライフストーリーを中心に論じていく（他の1.5世や関連する人のエピソードについても、随所で取り入れる）。

Pさんは、1980年にカンボジアで生まれ、5歳のときタイへ脱出し、1993年に一旦帰還するが、1994年に父と妹と三人で来日し定住する。Pさんへの聞き取りは、2019年1月16日に第1回（約2時間）、2021年11月21日に第2回（約2時間）をあるカフェにて行った。インタビューでの言語は日本語である。2022年6月現在、日本人の夫と息子（小学3年）の三人で暮らし、カンボジア語と日本語の翻訳や通訳などの仕事をしている。

祖国を離れる：不確実性と希望

1980年にカンボジアの首都プノンペン郊外で生まれたPさんは、内戦の混乱の中、5歳の時に家族に連れられて隣国タイに向かった。まず国境手前のバタンバン州の親戚の家を目指し、そこからタイ国境まで闇夜の森の中を歩いた。

夜中に何時間歩いたかわからないほど長い道のりで、森の中で寝ていると動物の声が聞こえてきた記憶が残っています。

安全な場所を求めて、危険と恐怖の道程を経てようやく辿り着いたタイの難民キャンプは既に封鎖されていた。「不法侵入」したキャンプ内では、常に監視のタイ軍兵士に見つからないように隠れていなくてはならなかった。見回りが来ると地下室にもぐったり、雨を溜める甕に入ったりした。

地下室の真っ暗な中で蠟燭をつけると、その煙がすごく苦しくて、入るのが嫌で嫌でしかたなくて、その後トラウマになってしまいました。

安全な場所であるはずのキャンプもまた危険な場所であった。この不安と怖れの日々は続いたが、その後、難民認定がなされ、やっと安心して暮らすことができた。

(難民) 許可が出て、堂々と暮らせるようになって、学校にも行き出して、キャンプの生活も楽しかったですね。(中略) 学校とかも公平だし、貧困さもないし、皆が平等な感じ。(中略) (キャンプでは) いろいろな新しいものがあって、珍しい物や外国の雑誌を見て、視野が狭いから、こんな場所もあるんだとか想像して。新しい情報が入ると、学校の友達に自慢したりして。

一般にメディアに報道される難民キャンプ生活は、貧弱なテントに住み、キャンプの外には出られず食料配給に依存するなど、物理的にも精神的にも抑圧的な状況の中で生きる困難ばかり強調される。それは事実であるが、全てではない。国際的な支援のもとで、様々な国の NGO やその外国人ボランティアが学校や病院を運営し、そこでは人間らしい豊かな交流²⁹があったことも事実である(日本国際ボランティアセンター 1990)。生存のために遂行した移動は、リスクと同時に異質な他者との出会いと新たな関係性(絡まりあい)の経験をもたらした。また、難民キャンプでは本国での社会階層による格差意識が希薄化されて、Pさんが語るように難民たちの間にある種の平等意識が生まれ、同胞であるカンボジア人との関係性にも変化があった。キャンプ

²⁹ 難民キャンプで当時ボランティアとして活動していた人から筆者が聞いた話では、難民の家に招待されて食事を供されたり、結婚式に参加したり、子どもたちと一緒にカンボジアの遊びをしたり、日本の遊びを教えたりという。野球の試合を企画したときは、初めて体験するこのゲームに難民たちは興奮したという。

は、カンボジアの伝統的共同体とは異なるもう一つの生の領域（メッシュワーク）となった。

難民キャンプで育ち、キャンプの外の世界を知らないPさんにとって、キャンプ生活が“普通の生活”であり、そこには子どもなりの喜びや楽しみがあった。難民キャンプは幼少期を懐かしむ場として、また現在の自分を育てた大切な場として、Pさんの中に記憶されている。このことは、他のカンボジア人1.5世も同様の経験を語っている³⁰。そのキャンプ生活の中でつらかった思い出として、Pさんは次の出来事を語る。

一番辛い思い出は、クラスで仲良くなった人が、第3国に行くことになって、行き先もわからず、離れたら一生会えなくなるのではないかと思うと、一週間くらいへこんでしまいました。

友人との別離は、移住先の連絡先がわからないことによって再会の可能性を絶たれることを意味した。二度と会えないかもしれない別離は、死にゆく人との別れに通じる。Pさんは、幼少時にすでに多くの人の死に出会ってきた³¹。その中には身近な人もいれば、通りすがりの人もいたであろう。しかし、それが誰であれ、関係が絶たれることは未来を失うことである。その絶望感をPさんは感じ取り、身体的に学んだ。このことはまた他者とのつながりが人間の感情に大きく影響することを示している。そしてPさんは難民キャンプで、始原的な他者とのつながりという「応答プロセス」を実践していたことが示されている。

このように、Pさんの人生は不確実性の中で始まり、安全な暮らしを願って行動するが、その先には常に失望や落胆が待っていた。その中で希望を失わなかったのは、他者との始原的なつながりにあるのだろう。

本国へ帰還：失望と新たな出発

Pさんは難民認定されて以後キャンプでの安住を得たのだが、再び大きな歴史の転換によって意図しない状況へ追いやられる。キャンプ生活が9年を経た1993年、対立する政党各派とその後ろ盾となってきた大国によってパリ和平合意が成立し、キャンプにいる難民の帰還が決定された。しかし、この決定は他国への移住を望んでいた人の意向を無視するものだった。アメリカへの移住を希望していたPさん一家もこの決定に従わざるを得なかった。Pさんはこの帰還を“強

³⁰ カンボジア人1.5世のNさんの語りでは、キャンプ内での生活は爆弾の音が聞こえるような不穏な状況にあったにもかかわらず、キャンプの生活は現在の自分を育んだかけがえのない日々であったと振り返る。

³¹ Pさんの語りの中に直接は出てこなかったが、Kさんの脱出の記憶の中には、祖国の内戦下で、そして逃亡の過程でいくつもの遺体を見たことが語られ、自分の兄も地雷を踏み死ぬ寸前だったという。このように、難民は死と隣り合わせの経験を持っている。

制的帰還”と語る。国際政治と国家の失策によって故郷を奪われたPさん一家は、再度権力によって自分たちの未来を奪われた。そして、本国に戻ったPさんを待っていたのは、隣人による冷たい態度だった。

あなたたちは、国が大変な時にあっちに行って、国が平和になったら戻ってきてずるいとか、裏切り者とか言われた。だから、タイのキャンプにいたことを隠して暮らしていたんです。

かつては共に暮らした人たちに深く心を傷つけられた。その背景は、Pさんの説明によると、P K O（国連の平和維持活動）によって土地の値段が急騰し、国民全員に配分された土地の利権をめぐって、本国にとどまった人が帰還難民に対して競争心と嫉妬心を持ったのだという。身近な隣人が敵対する他者になった。それは難民キャンプで経験した異質であるが親密となった他者と対照をなすものだった。同じ文化や祖先を持つ共同体の人だからといって、単純に助けあう親密な関係にはならないことを示す。難民キャンプでPさんは、何も持たない人たち同士が物質的な共通利益や目的によるのではない「無意の共同体」³²のような人間関係を経験したが、本国では（西側）国際社会による政治的解決という介入によって、人々の関係は再び資本の論理に翻弄されるのである。本国に戻った一家は、将来への展望を描くことができず、親戚がすでに移住していた日本へ移住することを決意する。Pさんにとって、三度目の国境を越える移動である。

日本に行くとき、自由に勉強できて、治安が良くて平和で、食べ物にも困らず、頑張れば結果がついてくると、いろいろと希望を抱いてきました。それまでの環境が悪かったから、前向きでいられるのかもしれませんが。

この時にPさんは14歳になっていた。祖国で失望を味わった原因は、物の不足という貧しさではなく、隣人からの敵対的な眼差しという人間関係の貧しさだった。Pさんは自分の将来をかけるに値する場所ではないと判断したのだろう。日本への移住を決意した。そこで、発せられたのが「希望を抱いて来ました」という言葉である。

ここでは、「失望は希望の出発点である」という希望メソッドのテーゼが具体化される。それは、より良い生を求めるための知の方向転換である。本国にとどまるか、あるいは他国に移動す

³² 「無為の共同体」とは、経済的・物質的な共通利益や領土的な統治・支配による共同体ではなく人間が根源的にもつ「他者とのつながり」を基礎にし、意図的に営まれるのではなく自然に生まれ、また営為や有為に価値を置くのではないある種の理想の共同体である（ナンシー2001）。

るかは、正誤の問題ではない。より良い生をどう意味付けるかという自己探究のプロセスである。Pさんは、他者との親密な関係を持てること、勉強ができて努力が報われることが自分にとって大切であると決断した。そのようにして、世界と関わっていきたいと願った。希望のメソッドは、不確実性の中で実践される「応答プロセス」でもある。つまり抑圧的な環境からすり抜けて、別の環境へ移動し、新たな他者との出会いと人生へ向かう生き方である。

日本に来る：未知の世界と異質な他者

Pさんは14歳になった1994年10月に父と妹と三人で、先に日本に定住していた母の元へ家族呼び寄せとして来た。日本政府による日本語学習や生活オリエンテーションの公的支援はすでに終了していたため、何の準備もないまま突然日本という異文化社会に入り、見たこともない人々に取り囲まれた。それは、まるで大海に投げ出された小さな魚のようだった。母の家に身を寄せて1ヶ月たった頃に、感染症（Pさんによるとカンボジアにいたときに感染したらしい）で入院することになった。そこで、独学で日本語学習を始めた。Pさんは日本で生きていくためにはまず日本語を習得しなくてはならないと考えたからだ。日本語の会話帳を親戚に頼んで購入してもらい、それを使って看護師の人たちに教えてもらった。ある日、病院から親戚に電話したつもりが間違っで見知らぬ日本人に電話がつながってしまった。

（間違い電話の相手の人に）『私はカンボジアから来ました、今、Y市で入院しています』
と言うと、いろいろとやさしい日本語でゆっくりとしゃべってくれて、私は会話帳を見ながら話して、……。今思えば日本語を全然知らないで、よく話したと思います。

Pさんにとって、見知らぬ他者がどのように応えるかという不安よりも、日本語を習得して前に進みたいという思いの方が優っていたのだろう。大人であれば必要のないリスクを負うよりもそのまま謝って電話を切って事なきを得るところ、Pさんはそうはしなかった。具体的な目標や願いがあるからだ。それを形にするために周囲の環境に働きかけた。そうして一歩目標に近づく。このような積極的で開放的な他者に対する態度は、その後に入學した中学校の日本人の友人や同じ団地の日系ブラジル人に対してもとられる。Pさんは、同級生たちとカラオケに行き、一生懸命覚えた日本語の歌詞で歌うと周囲が褒めてくれ、雰囲気盛り上がり、それは同時にPさんの日本語の練習になったという。また、団地のブラジル人の管理人はPさんを日本語教室に誘った。教室の子どもたちと一緒に勉強したり、遊んだりする中で、Pさんは居場所を確保し、無理なく学習³³ができた。これらは自分の異質性をうまく利用して、自分にとっても他者にとっても心地

³³地域のボランティアによる外国人の子どもへの日本語や学習支援の現場では、国籍、居住地域、

よい環境を作るという日常生活の戦略・知恵と言える。

Pさんの異質な他者との出会いは、次々とPさんのネットワークを広げ、新しい世界を開いていくことになる。Pさんは、中学を卒業し、夜間高校に入学した。半年くらいで日本語の日常会話は聞き取れるようになったが、概念を理解するために学習用語は難しく、中学の教科は理解困難で高校進学ハードルは高かった。また、家庭の経済的事情は厳しかったので、仕事と勉強の両立が可能な夜間高校を選んだ。夜間高校の選択は、自分の不利な条件ゆえの消極的選択ではなく、現実の中で自分にとってより良く生きるための積極的な判断による結果であった。入学の筆記試験はできなかったが、面接試験ではPさんのアピールが効を奏したという。

私は、日本にきて一年半ですが、これから4年間しっかり頑張りますから、入学させてください。

無事に合格した夜間高校は、多様な属性の生徒が在籍し、親密な人間関係が構築された場であった。

男も女も、先輩も後輩も、違う国の人も、皆仲が良くて、友達もたくさんできて、先生からも好かれて、(中略)カンボジアの人も10人くらいいて、その中でもよくできる方だったので、他の人の勉強をみたり、書類の書き方を教えてあげたり、世話をすることも多かったです。

カンボジア人のみならず移民1.5世の高校進学率は日本人に比べて非常に低い。しかし、Pさんにとって高校進学は当然のことであった。なぜなら勉強こそ日本でやりたいことであり、具体的な希望であったからだ。そのために、自分の実力や経済状況を的確に認識し、高校進学に向けて実現可能な環境を整えるために周囲に働きかけた。まず中学の担当教師に相談し、推薦と面接で受験できる夜間高校を選び、面接官に対して自分の思いをアピールしたのである。Pさんのこの積極的な働きかけが入学後も発揮され、周囲の同級生や教師との絡みあいの関係が形成され、異なる背景を持つ多様な人々がつながり合う環境（メッシュワーク）が作られた。

Pさんは、異質な他者との付き合い方の知恵は昼間働く職場でも発揮される。当初はパッキン

来歴などは異なる子どもたちは、共に学び、教え合い、情報を交換し、助け合うという繋がりが生まれる。そこでは実利を超えて、励まし合う関係やロールモデルの関係が生まれる。これらの関係は、永遠を約束するような確固たる結束でないかもしれないが、緩やかで無理のない繋がりが生まれる。一時的である場合が多いが、中にはその後も続く場合もある。大切なことは、子ども期のこのような多様な他者たちと自然につながる経験がその後の人間関係を豊かにしていく可能性である。このような事例は、他の1.5世の語りの中でも度々見られる。

グや組み立ての生産現場に配置され一生懸命に働いた。その P さんを、日本人の上司は評価し、また夜間高校に遅刻しそうになると車で送ってくれるなど気を配ってくれた。しかし、生産現場での単純作業の繰り返しの飽き足らない P さんは、事務職への移動を願い、そのために学校でパソコン操作を習得し、上司に配置転換を申し出て承諾された。そのような P さんを、先に入社した同僚の日系ブラジル人家族が煙たがり、嫌がらせをした。事務職に移った P さんは周囲に気を使った。

自分が OL みたいに見えるのが恥ずかしくて、昼休みに皆とごはん食べるときは、事務服のスカートから作業服のズボンに着替えていました。(中略) 何か部品が足りないとすぐに (困っているブラジル人の同僚へ) 持って行ったりしました。

ここで興味深いことは、ブラジル人への対応において直接的な交渉や接近だけではなく、服装や部品の配置に気を使っていることである。それは、周囲のさまざまな存在の関係のつながりの中で自分が存在し、自分とブラジル人との関係が構築されていることを直感的に気づいているからだろう。自分の存在や自分と他者との関係はそれだけで成り立つのではなく、周囲のさまざまな要素、それはモノだけでなく制度や文化も含めた全体との関係の中で成り立つことを意味している。そして、モノ自体の性質や機能はそのままであるが、他の存在に影響を及ぼす。これは絡み合いの関係とそこから生成するメッシュワークと言える。つまり、ここでも応答プロセスが実践されている。その結果として、P さんとブラジル人家族の絡み合いが実現し、お互いの世界が開かれていく。このブラジル人たちは、最後の別れの時には花束を贈ってくれたという。この出来事を P さんは淡々と次のように説明する。

自分は自分のありのままでやっていったら、向こうの気持ちが変わっていったんです。

P さんの行為は、気配りしよう、あるいは良く思われたいと意識したからではなく、自分の気持ちを素直に表現したに過ぎない。それは、意識以前の感情に基づいた純粋に身体的な反応という点で、情動（アフェクトウス）の理論とつながる。P さんは、こうして職場の配置転換の希望も、そして同僚と仲良く仕事をしたいという願いも、最後には叶った。自分を偽らず、他者に素直に接することが、他者からの信頼を得る何よりの手立てであることを学んだのである。P さんは、後日のインタビュー（2021 年）で、筆者の「人との関係で大切にしていることは何ですか」という質問に対して、躊躇することなく次のように答えた。

自然体で、本音で話すこと。みんなに対して裏表なく話す。たとえば、嫌なことも嫌って言うし、偽らないで話すこと。

自己を開き、自らが周囲に働きかけるという世界に開かれていく突破口は、Pさんにとって「ありのままに振る舞うこと³⁴」である。ありのままに振る舞うことは、自分を通すことではなく、自己を柔軟に保ち、他者と絡みあい、いつも状況を変化可能にしておくことである。ここに、Pさんの希望＝知の方向転換の鍵があるようだ。

親への抵抗：親密圏の中の他者

Pさんの異質な他者との関係は順調だったが、思いがけない人との間で衝突した。高校卒業後、躊躇することなく大学への進学を希望したPさんは、経済的問題については夜間高校時代に蓄えた貯金と奨学金、そしてアルバイトの収入で解決できると考えた。そして、自分の計画を親や親戚に伝えたところ、強く反対されたのである。

親戚の中には、女の子なのだから、進学なんて必要ないとか、お金がもったいないとか、借ったお金をどうやって返済していくのとか、カンボジア人の悪い癖で、形式的な事ばかり言ってきた。お金を返済できるかどうか、今はわからないじゃないですか。私は、今の自分が不十分だと思っているから、その先どうなるかわからないけれど、今の状態よりも良くしたいのだから、と言って反対を押し切りました。（中略）私は大人の言うことをはいはいと聞くよりも、なぜこうしたいかを説明して、自分の意志を伝える方が重要だと思います。

Pさんの価値観や規範は親のそれとの間で大きく違いが生じていた。同様のことは、在日韓国・朝鮮人2世の事例でも示される。成人として日本にきた1世は出身地の朝鮮の習慣や規範の中で生き続けるが、2世は日本や他からのさまざまな文化を取り込んで自己の価値観や準拠枠を形成し、親との間にギャップが生じる（橋本、2021）。14歳で来日したPさんは、思春期の敏感な時期を異質な他者や文化に触れ、新たな社会化を経て自己を形成した。Pさんは親たちの持つ伝統的なジェンダー規範や家父長制の権威といった古い体質に生き難さを感じ、抵抗した。田辺繁治は、人々は権力の支配的イデオロギーの中で生きているが、そこで困難な状況に直面した時、その生き難さを解決するために自ら動き出し、既存の規範や習慣を攪乱し、それまでとは異なる生

³⁴ 筆者がPさんに、「ありのままで付き合う」ということをどのように学んだのかと聞いたところ、少し考えた後に「お母さんがそうだった」と答えた（2020年の2回目のインタビュー）。母の姿を見て学んだ態度・生活文化の継承である。

活のあり方や人とのつながりを模索すると述べる（田辺、2008）。Pさんの抵抗は、このような抵抗の実践だった。この抵抗の実践は、親や親戚とのつながりによる環境（メッシュワーク）を変えようとする試みでもある。その時の方法は、対立を覚悟で「自分の意思を伝えること」を優先することであった。それはまた、自分の意思を伝えることの重要性という「知」を得たことであり、落胆の中から自己を探究することでもあった。

もう一点、ここで注目したいことは、親や親戚という最も身近で親密な人が、自分の人生の行く道を阻止する他者となるという経験である。それは、かつて難民キャンプから本国へ帰還したときに、同胞の隣人から敵対的な眼差しを受けた経験と重なる。異なる経験は異なる視点や立場を生み出し、それは民族や家族といった所与の属性以上に人間関係に影響を及ぼすのかもしれない。そのことを示唆する出来事は、Pさんが親の反対にあった時に相談をしたのは夜間高校の日本人の教師だったことである。同族ではないが、教師はPさんの状況を理解し、推薦入学できる短大を勧め、一緒に大学まで見学に行った。属性は異なるが、目標を分かち合える異質な他者の存在が、Pさんの未来を切り開いた。

社会からの差別：顔の见えない他者

短大卒業を目前にして就活を始めたPさんは、日本社会の外国人に対する偏見・差別に直面する。Pさんは、求人雑誌や新聞を見て、会社に次々と電話をするのだが、カンボジア名を名乗るとすぐさま拒否の返事をされる。その数は、持っていたテレホンカードが、束になるほどだったという。

もう、ノイローゼになりそうで、ショックで眠れない。（中略）短大卒業したら、自分のやりたい仕事につけると思っていたのに、思い通りにいかなくて、自信をなくした。それまで、前向きとか自信があったのに、もう肩を落として、顔も元氣なくなるし、うつ病みたいな感じになって、部屋を閉めて泣いたり。国籍がカンボジアというだけで面接さえも受けさせてもらえない。面接までいけば、今までの自分の頑張りとかをアピールできるのに、門前払いされて。日本語が日本人より出来ないから、日本人を使ったほうがいいのかと、向こうは思ったのだろうし。カンボジア語が出来たって、何の役にも立たないって思いました。何か、全然出番がないと、思いました。

「非－日本人」の識別の3大要素は、外見、氏名、日本語であるという。そのうちの一つでも当てはまれば即座に「外国人」と判断され、排除の対象となるのである。あからさまな日本社会の外国人排除や人種差別に直面し、Pさんの希望は一気に崩れていった。それはPさんが個人で

解決できる問題ではなく、社会構造（規範や制度）の問題である。そこでは、これまでの経験や知が役立たず、抵抗のすべもなく、部屋で泣くことしかなかった。そして、引きこもっている間にPさんは考えた。

（カンボジア名を名乗るだけでことごとく就職面接を拒否されて）前向きとかには自信があったのに、もう肩を落として部屋に閉じこもって泣いていました。なぜカンボジア人というだけで面接さえも受けさせてくれないのかと。（中略）カンボジアの国籍だから、カンボジア出身だから、ダメですと言われて、だったら、私が日本人だったら、面接受けさせるのって。カンボジア人ということだけで判断するのって、どうなのって。日本人は心が狭いと思いました。カンボジア人の出番はどこにあるの、活躍できる場所はどこって。（中略）日本語とカンボジア語をつかって、海外協力の仕事とかしたいと思ったのですが、日本語も中途半端で、カンボジア語も13歳で出てきたから、中途半端で、全部が中途半端で。何が一番得意なのかと聞かれても、答えられなくて。全部中途半端で、モヤモヤした感じでした。

私たちは大きな構造（社会、権力、歴史）の下で個人的な状況を抱えて生きている。このマクロとミクロの関係の中で起こる日常生活の危機をすり抜け抜けるための戦略をそれぞれが選ぶ。それは、個人の直感と過去の経験によるが、同時に時代や社会の影響を受ける。そして、常に新たな課題が浮上する。Pさんはこの時に人間の評価や価値について、人が生きる意味や居場所について、さらに自分は何をしたいのか、どのような能力を持っているのか、自分の現在の状態はどのようなものか、自分は何者かなど生きる上での根源的なことについて考えた。この引きこもりの期間は、無為の時間ではなく、深く自分を探り、生の意味を考え、新たな知を生み出す時間となった。宮崎は、希望のメソッドの重要な要素の一つに、「一時停止」をあげる。一時停止は世界に働きかけることを止め、その効果を静かに待つ瞬間である（宮崎、2009）。また鷺田は、待つことは時間との折り合いであると述べ、何かへの予感も徴候もない中で待つことは何事かを自らが招来する努力を解除するという（鷺田、2006）。Pさんの引きこもりは、主体性を一時手放して、今あるこの環境の中に浸ることだった。このような「待つ」あるいは「停止する」という行為もまた、希望の重要な側面である（宮崎、2009）。この引くこと、とどまること、待つことという行為は、前に進むための受動的な能動性であり、新たな世界を開く「応答プロセス」における大切な側面であるだろう。

引きこもっている間に、Pさんはどうしたらこの閉塞状況から抜け出せるか、そして未来に向かう次の一步を踏み出せるかを考えた。そして、カンボジア名で就職の面接を断られるのならば

日本名を使えばよいということを思いついた。日本名を用いなければならないことは、日本社会の外国人差別を象徴する問題であるが、目前に迫る課題解決に対して、その理不尽性を飲み込んで妥協・譲歩する外国人が多い。Pさんの日本名での名乗りは生き抜くための戦略であり、差別を容認したわけではない。Pさんはこの戦略を用いてある会社に入社することができた。しかし、その会社で次なる差別に出会う。

(社長が) 東南アジア人だから、お金を出せばなんとかなるではないかと、変なことを考えて、仕事が終わった後に食事に行こうとか、物を買ってくれたり、そういうのが嫌で止めました。

ある意味で典型的な日本人男性による性差別と人種差別である。Pさんは、このような事例を他の人から頻繁に聞いていたので、即座に退社を決めた。これもまたPさんの個人的問題ではなく、日本社会の問題である。しかし、日本では当たり前になっているこのような事件に対して、その時のPさんはこのことに無意味な時間とエネルギーを使う必要はないと考えたのだろう。さっさと退職という選択をした。このように身を引いてしまう外国人女性が多いのが現状であり³⁵、それに気が付かない差別者たちは同じ行為を繰り返すということは、私たち日本人が反省し、取り組むべき問題である。

Pさんの落胆や失望は、顔の见えない他者との関係から生じたと言える。この顔の见えないという意味は、人を対象化するということである。人に対して、その人の属する集合的カテゴリーによってある判断を下すということは、生きている人間としてではなくカテゴリーという対象として見るということである。Pさんのそれまでの人間関係は、生活の場での対面による身体的感覚を伴って構築されたものであった。その顔の見える生活の場を離れて、社会一般という領域に踏み込んだときに、降りかかってきたのが外国人排除という対象化される扱いだった。その根幹は、外国人の異質性そのものにあるのではなく、外国人を尊厳ある存在として捉えていない日本人の態度にある。Pさんは、このことを見抜いている。

(略) その人の価値や持っている価値観を見てほしい。カンボジアの人が犯罪を犯したからって、それでその国がすべて悪いとか考えないでほしい。(中略) 個人個人の良さを見てほしいし、逆に難民はいろいろな国を転々として日本に来ていることを、評価してほしい。日本は平和でも、明日戦争が起きたら、カンボジア人のように強く生きられるのか、

³⁵ この様なジェンダー・人種の複合的差別は、他の1.5世からも語られ、またカンボジア人1.5世から尊敬を集めているあるカンボジア女性も明確に述べている。

想像してほしい。今の平和が絶対に続くと誰も保障できないのだから、もし自分がそうなったときに、自分に何ができるか、乗り越えられるか、(中略)。日本人には、もうちょっと心を広く、グローバルに開いていってほしい感じです。

排他的な社会の態度は、当事者の落胆だけでなく、当事者自身の自己否定を生み出す。具体的な希望を持っている限り、自衛としての引きこもりは内省のチャンスを提供する知の方向転換へ向かう時間となる。自己否定から社会批判へ向かうことは、自己を解放することであり、社会を認識し理解すること、学ぶことでもある。

自分を名乗る：希望の予感

退職後、Pさんはある派遣会社に入り電話オペレーターの仕事をした。しかし、対面で日本語を使う接客の仕事がしたくて、新たに就職活動をはじめ、電気器具の大型販売店に転職した。Pさんは、新しい会社で念願の接客現場に配置された。店頭に立つ販売員は名札を胸につけさせられる。それは、日本名かカンボジア名か？

本当は、自分のカンボジアの名前が好きで、そうやって今まで自分は頑張ってきたので、ここで日本名を使うのは嫌で、どうしてもカンボジア名を使わして下さいと言いました。(中略) なぜ、(名前を)偽ってやるのって思ったんです。自分はカンボジアから来て、頑張ってきて、なぜ今になって日本人としてやるのって。どうして、堂々と私はカンボジア人ですと言わないで、日本人と偽ってやるのって、違和感がありました。(中略) でも、日本人にはなりきれないし。あなたはカンボジアからどうやって来たのって聞かれると、嬉しい。それをきっかけに、カンボジア人だけど、ここで頑張っていますということを、一人でもわかってくれる人がいたら嬉しいから。

Pさんは日本名を使うことで就職差別の第一関門を通り抜けたが、それは戦略であって、本心ではない。人は、危機的状況の中で自分にとって真にかけがえのないものを発見するという(クライマン、2011)。Pさんにとって、カンボジア名はそのかけがえのないものだった。名前は単なるモノとしての名前ではない。名前には、その人の全歴史、つまりその人間を作ってきた経験やかけがえのない出来事が刻み込まれている。カンボジア名はPさんそのものであって、他の誰かが勝手に名付けることは、人の心への侵入である。会社の規則や社会の規範によってなされるとしても同じである。Pさんがカンボジア名の使用を主張したことは、他者が自分の人生を勝手に表象することへの抵抗である。それまでのPさんの困難の多くが、大きな力(社会、権力、歴史)

によってもたらされ、それらは自分のコントロールの及ばないことだった。それに対して、この名前の一件は、勇気があれば自分から起こすことのできる会社の制度に対する変革行為である。Pさんのこの行為は、また日本社会の差別的常識に疑問を呈することでもある。自分が使う名前を自分が決めるという基本的な権利は、人間の尊厳に関わる事柄である。ここで想起されることが、かつて日本が植民地化した台湾や朝鮮の人々に対する創氏改名や最近まで行われていた帰化申請する時に日本名をつけることが強制された歴史である。ここにも人種主義を増長する日本の植民地主義は残存している。それは、日本に來たのだから日本の文化に同化しろ、あるいはよそ者は日本の「常識」に従えというマジョリティの態度である。Pさんは、カンボジア名を使うことを通して、自分にとってかけがえのないものを発見し、同時に理に適わない規範を維持している日本社会への向き合い方を学んだ。こうして、Pさんは店頭に立ち、接客の仕事が始まった。

お客さんは、(私が)日本人でないから怪しいんじゃないかと近寄ってこない人もいたけれど、私はカメラのこととかを一生懸命勉強して、誠意をもってやったら、お客さんに好かれて、リピーターも多くなって、名指しをしてくれたり、(中略)お年寄りのお客さんにDPE(現像・焼き付け)の説明したら、毎回来て、こういう写真撮ったよとか、カンボジアに行ってきたよとかいう人もいて・・・。

希望してカンボジア名の名札をつけたPさんであるが、顧客である日本人がどう反応するか確信はなかった。不特定多数の見知らぬ顧客の中には、外国人を嫌悪する人がいることも既に学んでいるからである。しかし、見知らぬ客と直に顔を合わせて話し、丁寧に接するとによって和やかな交流が生まれた。その関係を取り持ったのは、カメラや写真といったモノであるが、そこで無意識のうちに「外国人」という壁が取れたようだった。つまり、人と人はカテゴリーで関係を作るのではなく、直接的に関心のあるモノやコトなどを媒介にして人間らしい温かみのある繋がりが生まれることが示されている。少なくとも、人間が作った「カテゴリー」という抽象的な枠組みは、具体的に生きる現場では意味を持たない。Pさんは、カンボジアに旅行したという顧客の話に素直にともに喜ぶ。自分にとっての故郷であるカンボジアは、帰還した時にカンボジア人から差別や中傷を受けた経験があったとしても、Pさんにとって大切な自己の一部であることを認識したのではないだろうか。

新しい会社に移動して生きるPさんの姿を「応答プロセス」の視点から見た時、Pさんは会社の新しい環境の中にまず浸り、周囲の人やモノ(名札や商品)を対象化することなく、一つひとつに対して丁寧に接し、意味を持つ存在として向かい合う態度は絡みあいのつながりを取り結ぶ。そうして生じる出来事は思いがけない方向に展開し、周囲の快適な環境(メッシュワーク)を作

っていく。

Pさんの日本名からカンボジア名という転換は、まさしく具体的な知の方向転換であった。この知の方向転換は、そのまま他者との関係のあり方に反映される。それは、最初から保証されていたわけではなく、気がついた時には良い方向に向かっているという希望の瞬間であり、次へのステップの入り口となる「希望のメソッド」であり、「応答プロセス」でもある。

異質な他者と作る親密圏：新たな自己の探究

Pさんは、新しい会社で上司にもその実績や人柄をみとめられ、メーカーとの交渉なども担うようになった。このように職場はPさんにとって、ありのままの自分でいることのできる心地よい場所となった。その中で、同僚と結婚することになった。Pさんは夫に、なぜ自分を選んだかという質問をしたという。

(夫は)日本人だったら興味がなかったかもしれない(と言った)、(日本人でないPさんが)どういう生い立ちで、どうやって日本に来たのか、興味があってと。私(Pさん)と一緒にいると世界は広いということを教えてくれると。自分(夫)は日本しか知らないから、私(Pさん)が小さい時の難民キャンプでの写真を見せて、ここがお寺で、ここで水をもらってとか話すと、へえーとか、すごいとか言って、興味を持ってくれた。私を通して世界を知ると言っています。

Pさんの夫は、Pさんとの間にある差異に価値を見出し、その差異とともに生きることを選んだ。Pさんは、これまで異質な他者との付き合いの中で、自分のありのままで接することで、相手との信頼関係を作ってきた。それが、異質な他者と生きる知恵であった。Pさんのパートナーもまた、相手の異質性をありのままに受け取るという感受性を持つ人物だった。ありのままの誠意はありのままに受け止める受容器(能力)があって実体化していく。それは、色の発色と同じだ。ある物体に光が当たって青という波長を目の受容体が受け止めて青が認識され、そして存在する。Pさんの存在は、受け止めるパートナーがいて、意味ある存在となった。Pさんに、「これまで重要な他者は誰ですか」と聞いたところ、「夫です」と明快な答えが返ってきた。重要な他者とは、自分の存在をありのままに承認し、それによって存在を実体化させてくれる人なのだ。それは所与の属性によってではなく、自己と他者の差異の認識と尊重、そこから生まれる相互信頼によって構築される。

差異とともに生きるということは、差異を持つ異質な他者とつながるということであるが、それは差異を解消して同化するというのではなく、新たな個の生成によって新たな差異を生成す

ることである。Pさんと夫は、それぞれの差異を尊重しあって家族という新たな個を生み出し、新たな差異の下で家族というメッシュワークを形成している。

Pさんのメッシュワークには、夫の母や親族も含まれる。Pさんの特質をともに楽しんでいる母は、息子の結婚を機にカンボジアに関心を持ち始め、カンボジアのテレビ映像などを録画しているとのことだった。そして、Pさんは夫の親や親戚との関係を大切にしている。2021年のコロナ禍でのインタビューでは、夫の親や親戚への配慮が語られた。

叔母は一人暮らしでもう 70 歳くらいで、あまりお料理とかできなくてコンビニのものばかり買っていて、それだと飽きちゃうなと思って電話でコロナの間どう過ごしているのか聞いたら、コンビニもなかなか行けなくて、通販ばかりとか言っているんです。それで、直接何が好きとか聞かないけれど、会話の中から今ガスは使えなくて電子レンジしかないんだとか聞き取って、チンできるものをチョイスして送ってあげたらとても喜んでくれた。

Pさんは、叔母さんに直接に聞くと気を遣わせてしまうので、それとなく必要なものを探した。叔母さんは、送ってくれた食料以上に、Pさんの心遣いを嬉しく思ったことであろう。Pさんは、夫の母にもコロナ下で度々電話をかけていた。このような関わり方について、Pさんは次のように語る。

日本人は、私が思うには、なるべく人とは関わらないようにするとか、そういう癖がついていて、自分は自分、人は人っていうようで。でも私たちは、カンボジア人は人と接したいんですよね。たとえば、日本で親戚が少なくても、旦那の親戚と繋がりたいとか、バラバラじゃなくて、コミュニケーションとりたいたいんですよね。カンボジア人は親戚と親密で、すごく大事にしているから。その癖があって、日本に来て、日本のお嫁さんはよくわからないのですが、2、3ヶ月合わないと、お母さんどうですか、最近どうですか、とか。たとえば台風がおきた後とか、こっちは大丈夫だったけど、そっちはどうでしたか、とか何かと気にかけて連絡してあげるんです。

Pさんの人間関係の親密さを高く評価する価値観と、その価値観を持っているカンボジアの文化へ誇りが表現されている。Pさんは、カンボジア人との比較から現在の日本人は他者との関係が希薄であると感じている。しかし、そこにはカンボジアの文化を優位におくというような態度は見られない。ここで、注目したいことは、「カンボジア人的親密性」がPさんの人との付き合い

いの基層を成しているということである。Pさんが「家族・親戚」という時、それは血縁や家系を意味しているのではなく、その親密な関係性を言っているのである。お兄さんやお姉さんと呼ぶ時、それはいとこもはとも含まれる。「家族の集まり（メッシュワーク）」という時、そこには隣人や友人も含まれる大きく緩やかな関係の領域がある³⁶。

子どもに生き方を伝える：希望の継承

Pさんは結婚し、子どもを持った。第一回のインタビュー当時（2019年）、子どもは幼稚園に通っていた。日本とカンボジアという二つの文化のルーツを持つこどもへの思いを語った。

カンボジアの文字を少しづつ教えたいし、パパは日本人で、ママはカンボジア人で、あなたは両方はいっているんだよって、教えていきます。ハーフであることを恥ずかしがらないように、それは特典であることを、両方の文化を知ること、出来ることや得することがあることを教えていきます。

「両方の文化を知ることが得すること」、この言葉の中に込められた思いは、まさしく多文化共生のエッセンスだろう。それは、差異を承認させ権利を保障させるという政治性を超えて、その差異を生きることを文化的豊さとして捉え、積極的に評価している。実際に、その差異を利点として、Pさんは他者と関係を作り、自己を成長させている。高校の文化祭でカンボジアの衣装を堂々と着ることは、他者に対して自己の尊厳を示す一種のアイデンティティ・ポリティックスであるが、それは同時にPさんが「ありのまま」を生きる自身のアイデンティティであった。自分が生きてきた軌跡そのものがPさんの存在の証であり、それをPさんは子どもに伝えたいと願っている。

息子が理解できるようになったら、自分（Pさん）がどうやって日本に来たか、今までの（私の）生活体験を教えて、カンボジアという国を好きになってもらいたい。カンボジアの血が入っているのだから、息子もカンボジアのためになるような人間になってほしい。でも、押し付けはしないし、興味がなければそれでもいいし、本人の選択次第で、押し付けたくはないです。

³⁶ 筆者が参加したカンボジア人の集まり（2021年12月28日）では、それぞれが持ち寄ったおかず（特に担当を決めるのではなく）を車座になって皆で回して食べる。この形式は、突然の訪問客も遠慮なくその輪に加わることを可能にし、ホスト側も慌てることなく、他の客にとっても何の支障も及ぼさない。見知らぬ予定外の客が入っても、普通どおりの家族の集まりのようである。よそ者に対する壁が低いから見知らぬもの同士でも自然に会話が生まれる。これが、Pさんが言う「家族の集まり」の内実なのである。

「息子に押し付けはしない」という言葉は、子どもを自分の分身としてではなく独立した他者として捉え、その主体を尊重していることを示している。それは、Pさん自身が進学の際に親との葛藤の中で学んだ人生の知恵であろう。Pさんにとって、夫と子どもとともに営む日々の生活は、異質な他者と作るメッシュワークの構築でもある。一人一人が独立した主体であり、世界に同じ人間など一人もいない中で、全ての存在が異質な他者として、主体と主体が繋がりあっていくことをPさんは実践している。

できない事を楽しむ：希望を生きる条件

今はできないけれど、明日にはできる。赤ちゃん（が言葉を覚えるの）と同じで、少しずつ慌てずにやっていけば、ひとつ覚えれば一つ言える。二つになれば二つ言える。どんどん言えるようになって、どんどん楽しくなる。できないことを楽しみにできる。今できなくても、できないままでないということがわかっているから、挫折しない。自分に期待できる。

上記の言葉は、「困難な時に、どうやって乗り越えてきたのですか？」という筆者の質問に、Pさんが答えてくれたものである。まさしく、〈いまだ一ない〉ことへ向かう希望の生き方である。その希望は、具体的な願いにある。ただなんとなくああしたい、こうなりたいと願っているのではなく、あるいは技術や知識を単に知ることではなく、世界に働きかける行為、生活を営む行為から生まれる希望である。

ここで注目すべき点は、Pさんがそのプロセスを「楽しんでいる」点である。楽しむということは、主体的という意味的側面を持つと同時に心地よいという感覚的側面を持つ。その楽しむ感覚を通して、新たな行為へと挑戦する内的動機が生まれる。情動的行為と言ってよいだろう。ここで確認しておきたいことは、楽しむことは他者との関わりの中で生まれるということである。Pさんが日本語学習を楽しむことができたのは、その先にある他者との親密な交流という願いである。楽しむことは、環境との相互関係によるのであって、自己完結するものではない。だから、「楽しむ」ということは、絶えず反復される希望のメソッドの重要な条件となるのである。

3-4 「希望を生きる」ことについての考察

3-4-1 不確実性の中で生きる

A・シュッツによれば、人々は「日常の思考」によって生きているという。「日常の思考」とは、全てがある定式に基づき予定調和された世界である。その前提は、1) 生活はこれまで通りに続く 2) 親や教師によって教えられた知識や伝統や習慣による規範はその本来の意味が分からずともそのまま頼みとすることができる 3) 問題は一般的な処方箋を用いれば大体において解決する 4) 物事の解釈図式は、集団の仲間が一樣に受け入れ利用している（シュッツ 2015）。それぞれの共同体にはそれぞれの「日常の思考」がある。人が移住するということは自分の「日常の思考」から離れて、移住先の「日常の思考」の中に入っていくことである。それは、移住者にとっては「非日常の思考」の領域である。

来日したカンボジア人 1.5 世は、彼/彼女らにとって「非日常の思考」を持つ異質な他者に囲まれ、何が起きるか予想できない不確実性の世界に身を置く事になる。日々出会う出来事に対してどう対処するか、出会った人とどう交渉するか、そこには何も処方箋がない。全てを一から自分で考えなくてはならない。通常であれば、その不確実な危機的状況にある 1.5 世を支え、導いてくれる親もまた、同じ非日常の世界に身を置いているのだから、1.5 世は日本社会の中で孤独な小さな冒険者として直面する課題に挑戦していく。

P さんの人生は、不確実性の中から始まった。安住の場であるはずの故郷は混乱の中にあり、脱出した先の難民キャンプは一時的な滞在場所であり、意向に反して帰国した祖国では人々の様子が変わっていた。これらの状況は、P さんの個人的な選択の余地がない外部の状況によって生じたものである。しかし、日本への移住は P さんにとって、自ら選び取った道である。それは、大きな不確実性に満ちた世界であるが、同時に新たな可能性のある世界である。それは希望である。*〈日本に行くとき、自由に勉強できて、治安が良くて平和で、食べ物にも困らず、頑張れば結果がついてくると、いろいろと希望を抱いてきました。〉* 不確実性の世界のリスクを引き受ける鍵は、*〈いまだ一ない〉* 存在を追い求める力「希望」である。不確実性の中で生きることは、このリスクと希望のバランスである。

リスクが外的条件によってもたらされるとすれば、希望は当事者の内的な創発性によってもたらされる。当事者の行為は、間接的には周囲の環境によって影響されるのであるが、少なくとも当事者の意識においては自分の選択である。移民 1.5 世にとって、最も大きいリスクは異質な他者との関係であろう。P さんは、この異質な他者との関係をどのように構築していったのか。それは、P さんの日本社会で生きるためのリスクマネジメントとも言えるし、同時に新たな可能性へアクセスするための戦略とも言える。

3-4-2 異質な他者とメッシュワークを作る

日本で言われる「多文化共生」において、「共に生きる」とは一般的にマジョリティがマイノ

リティを受け入れて共に生きるというマジョリティ中心の視点が隠れている。そこでは、移住者はマジョリティが規定した「異質な他者³⁷」となる。また「社会的適応」という概念は、移住者がマジョリティの文化・社会に適応することを意味するのであって、マジョリティが移住者の文化に適応することは含意されていない。この一方通行の関係性に縛られている限り、移民 1.5 世は移住先の社会で自分の居場所を見つけることはできず、マジョリティと移住者が共に生きることは不可能である。このマジョリティ中心主義から脱して、移住者の視点で日本の社会を見ていくための一つ方法が、本論が採用した移住者の語りを聞くことである。語りを聞くこととは、語り手の言葉とその生活世界をありのままに受け止めることである。

P さんは、来日前に文化背景の異なる他者と出会っている。タイの難民キャンプにいたときに世界各国からの援助関係者やボランティアとの親密な交流があり、彼らが持ち込む多様な文化に触れ、世界に目が開かされたとその時の高揚感を語っている。この関わり合いがキャンプという閉鎖された社会の中で、P さんを解放し、明日を生きる糧となった。このような経験は、同じ 1.5 世の N さんも語っている。それは、当時 NGO（非政府組織）という形で難民支援活動に関わった人々が実践の中で生み出した国籍や人種を超えた人間同士の関わりという思想³⁸とその実践による（日本国際ボランティアセンター 1990）。一方で、キャンプから本国へ帰還した時に、P さんは同胞である隣人から差別され、社会から疎外された経験を持つ。この二つの経験は、「異質な他者」は単純に出自や文化の違いによって規定されないことを示唆している。P さんにとって、国籍や人種という属性の異なるボランティアたちが「親密な他者」となり、同じ文化を持つ隣人が「敵対的な他者」になった。つまり「異質な他者」は、出自やカテゴリーによってではなく、関係性に規定されるということである。しかし、この関係性の背景にはより大きな文脈・要因が関係する。例えば隣人の排他的な態度は、カンボジア国内に駐留する国連平和維持軍のために国民に分配された土地をめぐる利害が影響していた。もし状況が異なっていれば、隣人たちは P さんにとって普通の親密な仲間であったかもしれない。状況によって「敵対的な他者」と「親密な他者」は転換可能ということである。

³⁷ 他者は、自分以外は全て人間である。しかし、「他者化」というような使い方をする場合は、「われわれ」と「かれら」という境界を引いた集団の内集団と外集団という枠組みにおいての（内集団の）帰属意識と関係する。従って、そこには包摂と排除の機構が生じる。ここで「異質な他者」という場合には、自分が帰属する集団ではない集団の人という意味と、自分とは違う価値観や文化を持つ個人の両方を含む。つまり、カテゴリーに規定されて捉える他者と自分以外の人という意味も含む。あるいは、自分がたくさんの帰属集団を持っていて、その意味で違う集団（アイデンティティ）の個人という意味で捉える。

³⁸ 国際協力 NGO の海外ボランティアが行った難民支援活動は、単なる国連や政府支援の補完物でなく、独自の意味と効果を持った。実務者の集まりである NGO メンバーは、そのことを理論化するよりは実践に集中していったが、後に阪神大震災のボランティア活動にもつながり、さらに多文化共生の理念の構築にも大きな貢献をした。

では、異なる文化背景をもつ他者が「敵対的な他者」ではなく、「親密な他者」になるのはどのような状況か。Pさんの来日後の事例を見てみよう。団地の日系ブラジル人の自治会長は新入りのPさんを気にかけ、世話をして、日本語教室を開催してくれた。定時制高校では、国籍、年齢、ジェンダー、職業の異なる学友たちが相互に支え合って共に学んだ。職場の日本人上司は仕事と学校の両立に忙しいPさんを支えた。Pさんにとって、困難に直面した時や一人では問題を解決できない時に、共に考え、共に行動する人が「親密な他者」になった。このような相互関係は、偶発的に、内発的に生まれる。なぜなら、困難を抱えた人を目の前にしたときに、その人の属性は後景化して、文化や信念が異なるかどうかは意識の外にいつてしまうからだ。つまり、人間であるという一点において回路ができた時に「親密な他者」となり、その回路がつかない場合は「敵対的な他者」となる。この回路がつながる関係を「共同性」と呼ぶことができるだろう。

では、「共同性」とは何か。従来の閉鎖的な地域共同体においては、所与の同質な文化や規範がつながりの要であった。同じ集団に属していれば、個々の人同士もわかりあえるという前提がある。ここでは、「共同性」と「同質性」が同じ意味に捉えられている。しかし、一人ひとりの人間はそれぞれが異なる唯一無二の存在である。この前提にたてば、所与の「同質性」というものはない。小田はローカルな場では、同質性・同一性に基づいたつながりではなく、関係性から生じる隣人同士の相互関係に基づいた社会的連帯＝「共同性」が生まれると述べる（小田 2010）。インゴルドは、国籍や民族の異なる人々が作る「共同性・共同体」とは、出自によってではなく、関係性によってつくられると論じる（インゴルド 2017）。つまり、「共同性」は他者と初めから何かを共有することではなく、他者と何らかの回路・コミュニケーションを持つことによって、何かを共有することであろう。回路は、具体的なモノやコトを介して作られることが多い。Pさんの場合であれば、日本語学習や高校のスピーチコンテスト、職場での仕事を契機に他者とつながる回路が開かれた。「共同性」とは、このような個人のレベルの社会的関係の繋がりであり、それらの関係が絡みあい、多岐に広がり集合的凝集³⁹が起きると「共同体」となる。そこでは、共同体メンバーがそれぞれの異質性（差異）を保ちつつ、同時にある部分でつながるという分離と結合の両義性を持つことが可能である。これが、生の領域としてのメッシュワークの形である。

Pさんが異質な他者と結合するための回路・コミュニケーションには、二つの形が見られた。一つは、「自分のありのまま」で接する方法である。自分が自分と認めるアイデンティティを信じ、その自分を偽らずに他者に対する態度である。利害を除外した誠実な対処の仕方である。こ

³⁹ 個人のつながりをネットワークと称することが多いが、それは点と点が単線で結ばれたものである。人の関係は、そのような点と点ではなく、人々の生きた軌跡という線が絡み合った毛糸玉のようなものとインゴルドは述べる。（インゴルド 2020）

の方法においては、自分の行為に対して自覚的であり、ゆえに行動の結果に対して自ずと再起的・反省的になる。たとえば、Pさんは、日本名を使って入社した会社で念願の販売員として現場に立つことになった時、会社に日本名でなくカンボジア名の名札をつけたいと要求した。それは、カンボジア人として頑張ってきた矜持であり、日本人と偽ることは自分への裏切りになると考えたからだった。顧客が自分を遠ざけるようなこともあったが、誠意を持って接していったら名指しする人が出てきたり、カンボジアのことに関心を持つ人が現れたりした。ここでのPさんと顧客の関係は、異なる領域に属する人間の間に回路がつながった瞬間だ。Pさんは、このような出来事を自身の行為の結果として振り返り、他者との関係の方法として学んでいる。

もう一つの形は、目の前の障壁を乗り越えるためにうまく立ち回る戦略的方法である。この方法は、自分のありのままではなく、意識的に相手の状況に合わせて自分を振る舞うことで無意味な摩擦を回避し、生産的な回路を開くことである。結果として相手を自分の土俵に取り込むことを可能とする。例えば、自分を仲間外れにした職場のブラジル人の同僚に対して、敵対するのでも無視するのでもなく、相手の気持ちや立場を汲み取って不足の部品を持って行って助けたり、自分の事務服を相手に合わせて作業服に着替えたりなど相手に負担とならない気配りをすることで相手の気持ちを和らげ、結果として相手の態度が変わり、親密な関係が構築された。また就活の際、会社に電話するときに日本名を名乗ることで、面接の機会を獲得した。これらは、自分を偽ることではなく、また相手を騙したり蔑ろにしたりすることではない。マイノリティに対する障壁を越えるための生存上の戦略であり、理不尽な社会慣習への抵抗とも言える。

Pさんのこのような生活の知恵は、単にPさんのコミュニケーション能力を向上させるにとどまらず、社会にも波及していく可能性がある。たとえば、Pさんが対応した顧客は、Pさんとの親密な交流の経験を次に会う外国人に対して適用するかもしれない。また日本人同僚は、Pさんの顧客への対応を見て「異質性」が功を奏して生まれるサービスの価値を見だし、会社の人材方針を見直すかもしれない。同僚の日系ブラジル人は次に入社した新しい同僚に対して親しくアプローチしていくかもしれない。一人の行為の結果は微細であるが、その影響は当事者が思っている以上に大きい。Pさんの実践は、国籍や民族という境界を超えて人間が繋がるための種を社会に撒いていることになる。それは、メッシュワークの編成につながる。

次に、Pさんが異質な他者と共同性を構築した鍵を探る。それは、Pさんを取り巻くカンボジアの文化、特に家族や親族といった親密な関係と関連する。

3-4-3 親密性と開放性の中で生きる

親密性によって構築される集合体を親密圏と呼び、その代表格が家族とその地域集合体としての共同体である。「血」や「法律」、あるいは規範的な「イエ」を媒介として存在した家族という

制度は、相互扶助という経済的機能や安心や癒しといった情緒的機能を提供していた。しかし、グローバル化と共にそのような家族や共同体は崩壊し人々は繋がりを失ったと言われる（山田 2001）。東浩紀は、家族は「家族と家族でない者」を明確に分け、「家族員同士は助けあうが、そうでない者は助けない」という原理によって外との境界線を作る一方で、家族をメタファーとして会社を「大きな家族」と見做し社員が一丸となって働き生産性を高めるような効果もあると述べる（2022. 1. 8 朝日新聞朝刊）。家族というメタファーを利用して、戦前の帝国日本が天皇を親とし国民を子どもとして想像の共同体を作り上げ、アジア諸国の他者を抑圧した歴史もある。つまり、「家族」という言説を用いて、集合体内部を結束させることも、他者を排除し分断することも可能である。斎藤は、親密圏を「具体的な他者の生/生命に対する関心/配慮を媒体とする関係性」と定義する一方で、同質的な親密圏は異質な外の世界を断つこともあるので、外の世界との回路を担保することが必要であると述べる（斎藤 2000）。このような「家族」の言説を踏まえて、カンボジア人 1.5 世とその家族はどのような親密圏を持っているのかを考察する。

カンボジア人 1.5 世にとっての家族の概念は、単に血の繋がりというだけではなくもっと広い人間関係を含む。P さんの事例で見た通り、カンボジア人が家族や親戚の集まりというときに参加する人は、隣人や家族の友人や遠路からの客も入る。そこに厳格な境界はない。「家族や親戚の集まり」という名のもとに、さまざまな人が集い、共に食事し、おしゃべりをする楽しみの時間をもつことを目的としている。であるから、その会合には毎回参加する人もいれば、一回きりの人もいる。出入り自由で、事前の約束も必要ない。人々はそれぞれが適当に持ち寄ったおかずをゴザの上に置き、それらを囲むように自然と車座になって座る。椅子があるわけでないから、飛び入りの人が来ても適当に場所を開けて入るだけで済む。参加する人にとっても受け入れる人にとっても何の支障も来さない。このやり方は、カンボジアの国では当たり前の習慣、つまり一つの生活文化であったから、1 世はそれを日本でも実践し、会合に参加する 1.5 世や 2 世も特に教えられることなく自然と身につけていく。P さんは、筆者が参加したカンボジア人の集まりで、「こんなふうにかんボジア人は誰でも歓迎して、仲間に入れるのが好き」と説明し、隣にいた若い女性は見知らぬよそ者である筆者にいろいろなおかずを新しい皿に盛って自然に手渡してくれた。筆者の観察から、参加者たちは、このようなカンボジア風のやり方を好んで実践している様子がうかがえた。この様な実践が、日常の人間関係の構築のあり方にも影響を及ぼすだろう。それは、多様な他者とつなぐ回路を持ったカンボジア的親密性と言える。

カンボジア的親密性は閉鎖的でなく、開かれている。このような親密で開放的な関係を「家族の関係」として捉えている P さんにとって、夫のお母さんや叔母へのちょっとした心配りは、身体に染み付いた習慣なのだろう。カンボジア難民として来日した 1 世は、本国では教育を奪われ、家族を分離させられ、伝統的な共同体を破壊させられ、民族文化を奪われ、文化資産を何も持た

ずに来たように思われる。しかし、そのようなことはなく、家族関係のあり方は身体的習慣として1世に維持され、さらにその子どもである1.5世にうつがれている。それは、親が強制するような文化ではなく、人を心地良くさせ、人生を楽しくさせるものであるから、自然と移住した日本でも実践され、再生産される。1.5世や2世に聞くと、カンボジアの行事食のような料理を親のように作ることはできないという声を聞く。しかし、料理の内容や車座の形式が日本の状況によって変化したりもするだろうが、よそ者をもてなすカンボジア的親密性⁴⁰は受け継がれていくのではないだろうか。このような人間関係のあり方は直接に社会経済的な成功に導くツールにはならないかもしれないが、人と人がつながり調和する社会の維持と発展にとって重要な資源である。

近年のグローバル化に伴って近代社会は「個人化・原子化」され、伝統的家族や共同体が崩壊し、近代都市は見知らぬ者の集まりであると言われる。この状況は日本にも当てはまる。日本に来る移民の多くは、伝統的な社会から近代都市社会に参入する事になる。カンボジア人1.5世が、カンボジア的な親密で開かれた家族関係という生活文化を日本の土壌の中で、そしてグローバル化の中で、どのように活かしていくのか、新しい課題であろう。

3-4-4 生活の中で自己を探究する

先に「希望のメソッド」は、知識の方向転換であると述べた。その知識を方向づける羅針盤は、自己を知ることである。自己を知るとは、日々の生活の中で他者とどう関わるかということの中で行われる。社会学者のA・ギデンスは、後期近代におけるアイデンティティは、日々の出来事や他者との出会いの経験から再帰される自己の物語であると述べる（ギデンス 1991）。Pさんの語りから見えてくることは、次々と出会う多様な他者との様々な関わり合いを通して独自の知識や価値観を獲得していくプロセスである。これらの出会いの経験の積み重ねが、Pさんのアイデンティティを形成する。

Pさんのアイデンティティの特徴は、民族や国家などによる所与の帰属に基づいたアイデンティティによってではなく、生活経験に根ざしたものである。その核には、移民1.5世の子ども期の移動の経験がある。思春期というアイデンティティを形成する重要な時期に、異なる場所と文化への移動を経験する。二つの異なる地域文化の狭間にあって多様な他者に囲まれ、その不確実性の中でどのように振る舞い、どのように他者と交渉し、どのような価値判断をすべきかを自分

⁴⁰ Pさんが持つカンボジア的親密性は、Pさんの高校時代の態度にも現れている。Pさんは、日本語が不十分な学友を助けるという行為を通して、クラス内の「具体的な他者の生/生命に対する関心/配慮を媒体とする関係性」を作りあげ、異質な他者同士の親密圏を構築した。同時に、そこでは共に学びあう中で生まれてくる新しい知の生産があるという意味で公共圏とも重なる親密圏であった。

で学び取っていく「知」である。親に教えられた伝統的規範ではなく、移住先の学校で教えられる生活の仕方や社会規範ではなく、毎日の暮らしの中で直面する出来事や他者との出会いを通して喜びや悲しみや怒りや悔しさを感じ、自らの身体が学んでいく。そのようにして獲得した知が積み重なって、移民 1.5 世のアイデンティティが形成される。

3-5 小括：応答プロセス

P さんの語りを通して、その生き方が見えてくる。子ども期に未知の社会に参入する移民 1.5 世は、何の資源も持たず素手でその不確実な状況生き抜いていかなくてはならず、異文化社会の中で直面する困難や葛藤を乗り越えるために多様な他者との出会いを通して共同性が形成されていく。その共同性構築の根底には、親密で開放的なカンボジア的な絡みあいの関係があり、国籍や民族・人種を超えた多様な他者と協働する経験が積み重なって、生活に根ざした自己が形成され、新たな世界に向かって歩んでいく。このプロセスが、P さんの「応答プロセス」の実践である。

P さんは、常により良い未来を目指してきた。生まれた時から不確実な状況の中で困難に直面し、リスクをとってより良い生活への可能性を求めて移動し、そこで出会う多様な他者との交流の中で希望を予感し、その実現に向かって行動する。しかし、行動の結果は必ずしも思い通りになるとは限らず、失望や落胆という現実と直面し、一時停止の状態に陥るが、葛藤の中で自省し、同時に社会に対して異議申し立てをし、新しい知を獲得していく。ここで、知の方向転換が起こる。この希望のプロセスは、P さんの人生のターニングポイントにおいて場所をかせ、状況をかせ、繰り返され、その中で P さん自身が変化していく。

本論では P さんの希望が何か、それは実現したのかどうかを考察することはしない。それは、現在でもわかりようがないからだ。ただ、確実に言えることは、P さんは、未来に向かって歩き続けていることである。それは、一直線ではなく、過去の希望を修正したり、転換させたりしつつ、未来の〈いまだ一ない〉ものに向かって進む未完のプロジェクと言え。その一瞬一瞬が、P さんの自己探究のプロセスでもあり、生きることとなる。付け加えるならば、P さんが希望の歩みを継続できる理由は、そのプロセスを楽しんでいるからである。何かのためでなく、今、この時の一瞬一瞬を生きているからである。

移民 1.5 世について、いかに移住社会に適応するかという視点ではなく、いかに新しい知恵を獲得するかという視点へ、どこに帰属するかというアイデンティティではなく、どのような人とどのような関係を構築するかという関係性に基づいたアイデンティティへと光を当てることで、「困難な状況にある移民 1.5 世」から「希望という生き方を実践する 1.5 世」というイメージへ

変換できるのではないだろうか。これも、社会におけるひとつの知の方向転換と言える。

本論は、Pさんという個人の生き方を記述し、分析・考察した。しかし、それは単なるPさんの個人の歴史の紹介ではなく、またその生き方を賞賛することではなく、Pさんが実践している「応答プロセス」の実践から、日本人が学ぶ点が多いことを主張したい。特に、現代における個（孤）人化され、人々が分断される日本社会において、異質な文化を持つ人々同士がどのように繋がり、より良い未来を共に開いていくかということへの示唆となるのではないかと考える。

第4章 経験の継承を生きる在日カンボジア人 1.5 世

本章は、在日カンボジア人 1.5 世による「経験の継承」のライフストーリーとその考察である。ライフストーリーに入る前に、問題関心、目的、方法、そして本章で用いる「生の連続性・物語・歴史」の概念を紹介する。

4-1 問題関心、目的、方法

「継承」⁴¹ということに関心を持ったきっかけは、カンボジア人 1.5 世（以下、1.5 世）へのインタビューにおける彼/彼女らの語りからだった。幼少期に日本に来て成長し、現在は自身の家庭を持ち子どもを育てている 1.5 世たちが共通して語ったことは、カンボジアと日本という二つのルーツを持つ子どもたちへの思いと関心であった。子どもたちに二つのルーツを持つことの価値を伝えたい、カンボジアと日本の良い点を知ってほしいという願いはどこからきたのであろうか。それは、1.5 世の「経験」⁴²にあるのではないだろうかと考えた。

1.5 世の来日の背景は第2章で述べたとおりである。来日後は日本語の壁に直面し、「外国人」に対する偏見や差別にさらされ、進学や就職の困難、さらには「カンボジア」と「日本」という二つのルーツの間で揺らぐアイデンティティの葛藤などを経験している。これらの試練を周囲の多様な他者との関わりの中で乗り越え、その経験から生活の知恵⁴³を学び取ってきたことを前章で明らかにした（濱野 2022）。その 1.5 世の学びの源泉は、異文化社会における未知との遭遇にある。マジョリティであれば無意識のうちに難なくこなせる日常生活のことがらに対して、他所から来た 1.5 世は問題の処方箋（文化）を習得していないために、その対応方法を一から考え、実践するという試行錯誤を繰り返す。これには多くの時間とエネルギーを必要とし、生活上の大きな負担となり、それによって社会的に不利な状態に置かれることもある。一方でこれら試行錯

⁴¹ 「継承」という言葉について、英語では inheritance や succession と訳され、前者は遺伝的継承や遺産相続、後者は事業相続や皇位継承というように用いられる。世代の継承の場合には transmission が通常用いられる。しかし、本論では generativity = 「世代継承性あるいは生成継承性」として、「生成」に重点を置いた「継承」の意味を用いる。generativity という言葉は、generation（世代）と creativity（創造性）を組み合わせて作られた用語である（岡本他編、2018：3）。インゴルドは、生きものの形成プロセスを「継続する生成」とするが、これは上記の generativity と類似した意味である（インゴルド 2021：410）

⁴² A・シュッツは、「経験」を二つに分類し、一つは出来事に会うが意識せずにやり過ごす経験を「生きられた経験（lived experience）」（いわゆる体験）とし、もう一つは意識することで意味が付与された経験を「有意味な経験」とし、これは記憶となる（西原和久 2012：336）。実際には、これらの経験は明確に区別できるものではないだろうと考える。

⁴³ インゴルドは「知識」と「知恵」を区別し、前者は科学的に作られモノを説明するために用いられ、後者は経験と想像力によって生み出され世界に開いていくために用いられるとし、その両者の調和が必要であると述べる（インゴルド 2020：14）。場合によっては、「知恵」を「人々の知識」や「生きた知識」と記述することもある。

誤の繰り返しは、経験と知恵の宝庫ともなる。その知恵は、本から知ったり、誰かに言われたり、インターネットで検索するような外部からの知識や情報の注入とは異なり、自分の内部から獲得する知である。すぐに使える便利な道具ではないかもしれないが、身体に深くしみ込み、時間を経てその意味は醸成されていく。生活の知恵は一人の個人に留まらず、周囲の他者に共有され、次世代に継承され、共同体の知恵となる。これが「経験の継承」の意義であり、そして冒頭にあげた 1.5 世の子どもへの思いの源泉であろうと推察する。

この推察の上で、本章は以下の目的と方法を設定する。1.5 世の次世代への「経験の継承」に至る応答プロセスを具体的に描き、考察し、その意義と意味を明らかにする。そのための方法として、対話的インタビューを通したライフストーリーと、関連するイベントなどでの参与観察、文献・資料を用いる。

4-2 生の連続性、物語、歴史

本章が主題とする「経験の継承」を論じるために用いる概念として、「生の連続性と物語」と「歴史の構成」、並びに関連する先行研究を以下において検討する。なお、これらの概念は基本的に「応答プロセス」の枠組みの中に位置付けられる。

4-2-1 生の連続性と物語

人類学者の T・インゴルドは、生を線の流れとしてとらえる。線は常に進行し多様な軌跡を形成し、それは過去から現在へ、そして未来へといのちを繋ぐはじめも終わりもない物語であるという（インゴルド 2014）。

西洋の「系譜的(genealogy)モデル」において、祖先から子孫に至る生の道筋はその連続する生命を切り取り断片化し繋ぎ合わせ、一つの構造体として電気配線図のようなものとして捉えてきたと、インゴルドは述べる（インゴルド 2021）。このモデルは、ダーウィンの進化論的な思考と重なり、生命は個体から個体へと遺伝によって伝えられ、人間の場合は文化的情報の伝達を加えて二重の複製プロセスが人間の進化の前提となっている。このモデルでは、それぞれの個体は点として繋がっているのであって連続した線のつながりではない。個体はあたかも生まれた時に授かった仕様書（遺伝情報）に沿って進化するようである。このモデルではその時その場で、それぞれがそれぞれのやり方で生きているということが無視されている。このような進化は決して生命過程ではないとインゴルドは断言する（インゴルド 2014：178-181）。この機械的な系譜的モデルにおいては、過去にあった出来事や他者の経験を現在に引きつけて自分の生の中に取り込み、自身の経験とすることはない。また祖先の物語を子孫に伝えることもないから、祖先と子孫

が生命の流れの中で出会い交流することもない。

インゴルドが共鳴する哲学者のアンリ・ベルクソンは、進化を生物が環境の中を渦巻きのように回りながら流れていく終わりのない運動として捉えた。この視点から進化を見ると、それは単に生命という断片が連結し直線的に進む「点線の論理」⁴⁴ではなく、進化は生命という線が縮んだり伸びたり、曲がったり迂回したりしながら進む連続した「線の論理」である。

人間の進化は、異なる世代の人たちの生が絡みあい、撚り糸のようになって進む流れとして描かれる。インゴルドは、これを「生の組紐」⁴⁵と呼ぶ（インゴルド 2014:184）。その流れを促す力は、生の道筋で起こる多様な人やモノの出会いと交流である。ここに生きた知が生まれる。この生きた知は現在と過去の生をつなぎ合わせ、過去を辿りなおし現在を出現させる生の循環を生む。これは「応答プロセス」の一つの様式である。

生を促す力としての知は、何かを分類して理解するものではなく、物語ることによって形づくられるものであるとインゴルドは述べる（インゴルド 2021:376）。分類的知識を「輸送」にたとえ、物語的知識を「散歩」に喩えるなら、前者はある知識を正確に確実に目的地へ届けることでその役割は終了する。しかし後者は目的地が特にあるわけではなく、歩き回る道すがら、思いがけない人やモノに出会い、交流することによって新しい知の発見があり、それによって次に行く道が自ずと示されていく（インゴルド 2021:386）。過去の出来事は物語られることによって現在に引き込まれ、新たな知と物語がうまれる。物語にはあらかじめ意味・知識が備わっているわけではなく、状況の中で意味づけられる。散歩する者はガイドされた道をそのままなぞって進むのではなく、自分なりの道（経験＝物語）を切り開いていくのである。

発達心理学者のやまだようこは、「ものがたり（物語）」⁴⁶は生きものであると述べる。それは、ある人のある時の状況の中で生まれ、人が変わり状況が変わればその意味もまた変わる。同時に、物語は文化や社会や歴史を超えて、異なる文脈の中で語られ、異なる文化の他者に共有され、新たないのちを得て生き続けるともいう（やまだ 2021）。

物語は「二つ以上の出来事を結びつけて筋立てる行為」である（やまだ 2021:58）。一人の人間が体験できる現実には限りがあるため、いくつかの経験を結び合わせ、組織化して意味あるものにしていくという。その経験を編集し一つのストーリーとしたものが物語である。それは完結

⁴⁴ インゴルドは、同じ「連続性」を持つにしても、「線の論理」と「点線の論理」を対立的に捉えている。「点線の論理」においては、個々のライフサイクルは切断され、断片化し、全体との関連が見えない。

⁴⁵ 「生の組紐」とは、ベルクソンの用いた比喩的な進化の概念である。

⁴⁶ やまだは、ナラティブを「ものがたり」と訳し、フィクションや昔話の意味で使われる日本語の「物語」と区別し、より広い意味を持たせる。ナラティブは、ストーリーを語ること（telling story）である。本論では、「もの語り」を他の論考との整合上、「物語」という用語を用い、ナラティブを含んだ広い意味で用いる。

するものではなく、たえざる生成・変化のプロセスにある（やまだ 2021:56）。人は困難や葛藤に直面した時、あるいは人生の転機において、新しい自己を必要とする。人は語ることによって、過去の事実を変えることはできなくても出来事を再構成して、新しく生き直すことが可能となるという（やまだ 2021）。物語ることによって、新たなアイデンティティを形成し、危機的状況を生き抜いていくのである。

物語は今ここにはない出来事を言葉で表現することで、他者と経験を共有し、過去と未来を結びつけ、過去の出来事を再現し、再編することが可能となる。さらに物語は言葉を用いて現実にはないイメージを作ることができ、今ここにはない世界を構築し、現実を変え、未来を変えていく力がある（やまだ 2019）。個々の物語は当事者の主観によるものであるが、それは単なる架空の絵空事ではなく、当事者が生きたその時代の社会や文化という現実と密接に結びついている。個々の物語には固定された一つの正解があるのではなく、それぞれは多様な現実の一つひとつである（やまだ 2021）。

物語には、必ず語り手と聞き手がいる。物語は両者の対話を通したコミュニケーションである。語り手は、自分の物語を語り伝え、聞き手は語り手の物語を自分の中に取り込み、新しいいのちを吹き込む（やまだ 2021）。物語は個人を超えて周囲の他者に、そして次世代に語られ、生きもののように増殖し成長する。このような性質を持つ物語は、アイデンティティ形成や世代継承性という発達プロセスと密接に関連するという（やまだ 2021: 56）。

以上において、生の連続性が物語となり、私たちに生きる知識を与えることを確認した。このことを事例によって描き、考察した研究が橋本みゆきらによる『二世に聴く 在日コリアンの生活文化—継承の語り』である。生活文化とは、「生命の持続を支える活動から生まれた非形象的所産、継承的所産、制度的所産」と定義され、その概念には「生命維持の手段」とより良く生きるという「生命の質」の両面が含まれる（石川 1998:8）。橋本はこの「生命の質」という視点から在日コリアン2世の生活文化の継承について検討する。具体的には親からどのように母国の衣食住、祖先祭祀、継承言語、人間関係や習慣、社会規範を継承したかについて、彼/彼女らのライフストーリーを通して考察する（橋本 2021:16）。

生活文化、すなわち料理や衣服など目に見えるものや儀式や習慣などの制度的なことが一般的に思い浮かべられる。しかし橋本らの調査によると、在日2世の生活文化の継承の実態から見えてきたことは、そのようなモノやコトを通して、目には見えない親の生き方（価値観や世界観）が継承されていることであった。それらは生活の中での親のちょっとした言葉や仕草、問題が起こった時の態度から、2世自身が学んでいったことである。例えば、朝鮮人ということで2世がいじめられて帰宅した時、「差別するのは、こっちに何か問題があるんじゃないくて、その子のどこかにダメなところがあるんだ」と諭した上で相手の家に行ってカタコト日本語で抗議した母の

姿、あるいは出自を隠していた 2 世に「朝鮮人が嫌なら死んだらいい」と叱った母、これらの言葉や態度は母親自身が在日コリアンとして直面した困難と社会の不条理を乗り越えてきた生きる姿勢であり、知恵である。当時はこれらの知恵をそのまま素直に受け取ることはできなかった 2 世も自分が親になったときに、「私のような子どもに育てたら駄目だ」と反省し、自ら子どもたちのための民族学級を立ち上げた事例などが紹介される。国籍や民族に関係なく人間として堂々と生きることの大切さを親から学んだという 2 世たちの言葉も紹介されている。これらの事例は、生活文化の継承の質的側面、つまり経験に根ざした世界観・価値観の継承である。

上記のようなエピソードは、出来事に遭遇したその時には意識されずにやり過ごされた体験である。しかしインタビューという場を通して、過去の出来事が走馬灯のように思い出され、身体に埋め込まれていた体験が意識に上り、意味づけされ語られる。上記の事例では、当時は理解できなかった母の言葉や行動を在日コリアンとしての苦難を乗り越えるために身につけた知の力として意味づけられるのである。語りは、現在にあって過去の体験を想起し意味づけた物語である。インタビューの場での語りは自然に容易く行われているように見えるが、その背後には当事者の深い省察とそれに基づいて組み立てられた経験の物語がある。

物語においては、語り直しも行われる。例えば自分を全く顧みなかった冷たい母親という否定的なイメージが、大人になって当時の母の苦しい状況を理解することで肯定的なイメージへと転換する 2 世の事例が紹介される。この女性は物語の語り直しによって、母親と良い関係を結び直していく。物語は時とともに、状況とともに変化する生き物のようである。

生活文化の継承の内容や意味の変化は、そのモノやコトの背後にそれぞれの人の経験や思いがあるからである。それは生活文化に限らず、技術や芸能の継承にも当てはまる核心ではないだろうか。語りが伝達の手仕事の様式（ベンヤミン、1996）であるように、生活文化の伝達も手仕事の形式であるからこそ思いや経験の継承が可能であって、現代の AI 技術でいくら正確性や効率性を高めてもできないことであろう。生活文化は長い生活史の中で継承され、現代の生活に合わせて変化し続けるものである。ここに「生活文化の継承」として語り継がれる「経験の継承」の意味が見える。

橋本の研究対象は、在日韓国・朝鮮人 2 世あるいは 3 世であり、また親はオールドカマーという日本の植民地支配を背景にもつという点で、本章のカンボジア 1.5 世とはその文脈に違いがある。しかし、生活文化の継承の内実は人々の経験や思いにあるという論考は、カンボジア人 1.5 世の経験の継承を考察する上で大変に参考になる。

4-2-2 歴史の構成

歴史哲学者のベンヤミンは、人類はこれまで物語の形で絶えず年上の世代から年下の世代へと

経験を語り継いできたと述べる（ベンヤミン 1996：372）。それは歴史の実践であり、その経験の語りは歴史を構成する。

物語は聴き手と語り手の相互作用である。聴き手は語り手の声やリズムを感じつつ、物語が目の前に存在するように聴く。語りは「陶器の皿に陶工の手痕が残っているように、語り手の痕跡をとどめている」と述べられるように（ベンヤミン、1996：301）、それは手仕事の、情動的な伝達形式なのである。語り手が自分の経験を語るとき、聞き手はそれをじっと聞く。そのようにして〈語る－聞く〉という能力が育まれ、経験は継承されていく。

しかし、その経験を交換する能力が衰退しているとベンヤミンは指摘する（ベンヤミン 1996：301）。ベンヤミンは第一次世界大戦の戦場から帰ってきた兵士が何も語らずにいることを目にし、人間を豊かにするはずの経験が貧しくなったと感じた。ベンヤミンは経験の虚偽が暴かれたと嘆き、そして「真の経験」を模索する。ベンヤミンは経験を緊張のみなざる状況を生き抜く技術と捉えた（柿木 2021）。ドイツ語の「経験」の語源は「危険をくぐり抜ける」ことであり、ここから「経験」を異なるもの（自己とは明確な境界線を持つもの）と出会う緊張関係の中で自己が変貌させられ再生する出来事として、ベンヤミンはとらえた（柿木 2021）。戦場の経験は兵士の精神を生きるための希望に向かわせるのではなく、死に追い詰める絶望に向かわせ、沈黙を強いた。

「経験と貧困」というエッセーで、ベンヤミンは「経験の相場がすっかり下落してしまった」と述べる（ベンヤミン 1996:373）。その意味は経験としての本来の役割、つまり他者に語り伝えるという機能が衰えたということである。自らが共同体の外の世界で遭遇した出来事を他者に語り伝えることで、帰属する共同体へ新たな視点を吹き込み、その再生に寄与するという機能である。その伝えることは生きる手引きとなるような助言や教訓のようなもので、それは不確実な状況の中で発せられる問いに対する答えではなく、出来事の見通しである。しかし、「今や人々は自分自身に対しても、他の人に対しても、助言を与えることができなくなっている」とベンヤミンは述べる（ベンヤミン 1996:290）。その原因はマスメディアの発達（ベンヤミンの生きていた当時は主に新聞）によって「情報」が物語に代わり、なんでも教えるようになったことにあるという（ベンヤミン 1996）。情報は他者の解釈とともに与えられ、聞き手はその説明を問いの答えとして受けとるのである。ここには自分の経験というものはない。こうした状況の中で、経験を語る伝統は衰退していった。

経験は自分が直接に体験したことに限らず、他者の語りを自分の中に落とし込んで自分の経験とすることもできる。異なるものとの緊張をはらんだ出会いと交渉を通じて新しい自己へ移行することを「越境の経験」と呼び、これがベンヤミンにとっての「真の経験」であったと、柿木は論じる（柿木 2006:37）。柿木によれば、そのような「越境の経験」は自由な経験であり、飛

躍するための通過儀礼⁴⁷のような経験であるという（柿木 2006：40）。

経験を語り継ぐことは、過去の出来事を危機の最中にある現在において新たな経験として蘇らせることであり、経験を語る場は「歴史」を構成する場となる（柿木 2021）。

歴史の構成を自ら実践し、新たな地平を見出した人物にエヴァ・ホフマンがいる。ホフマンは1945年にユダヤ人両親のもとポーランドで生まれ、12歳のときにカナダへ移住し、その後アメリカでジャーナリストとして活躍したホロコースト第二世代である。ホフマンは歴史に刻まれた悲劇の物語を和解の物語へと転換するために、自身の経験をもとにして『記憶を和解のために第二世代に託されたホロコーストの遺産』（ホフマン 2011）という論考書を執筆した。以下にその論考書を検討する。

ホフマンの人生の原点は、移住の経験とその背景にあるホロコーストという出来事である。ホフマンにとって、移住は二つの言語と二つの文化の間にあって引き裂かれる葛藤の原因であった。しかし葛藤そのものが生きている証であり、世界の多様さを知る窓口であると考え、ホフマンは新しい自己とともに生き始める。そして直接に体験していないが重要な影響を受けているホロコーストという歴史的出来事を、当事者である親からの記憶の継承だけでなく、第二世代である自分自身の視点に立って捉え直そうと試みる。ホフマンは、「自分が歴史的遺産の申し子であり、負ってきた荷は重大な意味を帯びていて、それは詳らかにされなければならない」として、ポーランドの親の故郷を訪ねることにした。そこで、親の子ども時代の暮らしや異なる民族が共存していた様子を聞いたり、隣人であったポーランド人が親をナチスから匿ったという納屋に連れて行ってもらったり、また叔母や叔父が虐殺された場所も訪れた。生身のポーランドの人々から聞く話は、ホフマンが抱いていた残酷で非情なイメージだけではない人間の弱さと複雑さを持ち合わせたポーランド人の姿を浮き上がらせた。そして、人間が恐怖から自分を守るために他者に対する恐怖を煽り、残酷な行為に発展することを学んだ。このような新たな認識を持つことで、親から伝え聞く怒りや憎しみだけでなく、もう一つの別の視点にたつ理解ができるようになった。それは、当事者ではない第二世代であるからこそ可能なことだと気づくのである。

ホフマンは旅から帰って、自分のこれまでの経験を振り返った。子ども時代に親から常に聞かされた物語は、「迫害された者（ユダヤ人）」と「迫害する者（ドイツ人やポーランド人）」という二極化した人間像であった。しかし旅で出会った「迫害者」の子どもは、親が行った罪を恥じ、怒りの感情さえも持っていた。そして、親に対してどのような態度を取ればいいのかかわからず親から逃げたがっていた。「迫害された者」の子どもも「迫害者」の子どもも、形は違うがホロコ

⁴⁷ 民俗学・民族学者のヴァン・ジェネップは、通過儀礼の特徴として1)現在の状態からの「分離」2)どの状態でもない「過渡」3)新しい状態に向けた「統合」の3局面をあげる。「過渡」においては、どっちつかずの宙ぶらりんな状態であると同時に、どこにも属さない自由領域とも言える。

ーストという出来事によって苦しみの中にあるという点において共通であることに気づいた。ホフマンはこの新たな気づきから親から受け継いだ物語に固執するだけでなく、もう一つの物語の可能性を探ることが必要だと考え始めた。

アウシュビッツで目にしたある少女の詩は、ホフマンを記憶の継承に導いた。その詩から、少女が自分の試練を世界に知らせてほしいという声を聞き取ったのである。ホフマンは、その呼びかけに答えることが自分の使命であると考えた。また、この旅の最中にポーランドで催されたユダヤ人虐殺を記念した式典に参加したとき、ポーランドの大統領の謝罪に対する真摯な態度に心を動かされた。その式典に参加して 3 ヶ月後にアメリカで世界貿易センターへの攻撃があった(9.11 事件)。直接にはつながりのないこれらの出来事であるが、ホフマンはそれらをつなぎ合わせ、悲劇の記憶を和解への道へと転換させ伝えていくことが必要だと考えた。ここには、悲劇の記憶を世界の分断ではなく連帯の道へ導いていくという願いが込められている。

上記のプロセスは、ホフマンが「記憶の継承」を模索する中で様々な他者と出会い、交流し、過去の経験を新しい視点に立って再定義し、新しい認識を手に入れて世界と繋がっていく過程が示されている。ホフマンの事例は、経験するとは世界との関わりを通して自己を変革し、新しい世界を発見し、他者に伝え、新たな歴史を構成することを示している。このホフマンの歴史と自己の探究の過程は、歴史の構成であると同時に、「応答プロセス」の実践とも言えるであろう。

本章で紹介するカンボジア 1.5 世の親は、ホフマンの親と同じように本国で大量虐殺という出来事に遭遇し、大きなトラウマを負っている。親たちの多くは、その体験について沈黙する（せざるを得ない）か、あるいは悔しさや怒りの感情を伝えるか、いずれにしても親子のあいだでその歴史的出来事についての相互理解は希薄で、また公的な教育としても子どもに教えられることはない。そうした中で 1.5 世は母国の歴史について無関心になったり、無知が生じたりするが、実際には日常的に、あるいは潜在的に、母国の出来事は 1.5 世の自己形成や生活経験にさまざまな影響を与えている。カンボジア人 1.5 世の経験の継承を論じるにあたって、さけては通れない側面であり、かつ彼/彼女らの経験の継承において特異な面となろう。

4-3 在日カンボジア人 1.5 世のライフストーリー

N さんと M さんの二人の在日カンボジア人 1.5 世のライフストーリーを紹介する。N さんへのインタビューは 2018 年 7 月と同年 12 月にあるカフェで、2021 年 3 月に N さんの自宅において計 3 回行われた。M さんへのインタビューは、2018 年 8 月と 2022 年 12 月に M さんの自宅において計 2 回行った。使用言語は、日本語である。

4-3-1 Nさんのライフストーリー：二つの国の良さを伝えたい

難民キャンプでの子ども時代

Nさんは1981年に難民キャンプで生まれ、8年間をキャンプで過ごした。本国のカンボジアには住んだことがない。キャンプは難民のために人工的に作られた避難と保護の特別な場所であるが、カンボジア人16万人が日々を生きて暮らすという意味で一つのカンボジア社会を形成した。そのキャンプでNさんはカンボジア語を母語とし、カンボジアの文化や習慣を身につけ成長した。大人達にとっては不安で過酷な状況であるキャンプの暮らしであるが、子どもたちにとっては少し様子が違っていた。ある1.5世は、「学校ではみんなが平等で、勉強もできたし、友達も沢山いたし、楽しかった」と語る（濱野 2023）。Nさんは、当時のことを次のように語る⁴⁸。

夜になって銃声の音が聞こえてきたことを鮮明に覚えています。すると大人たちはその度に自分達の財産を持ち、逃げ隠れします。けれども、お父さん、お母さんは、一生懸命に私たちのことを守ってくれました。

Nさんにとってキャンプは、周囲の大人達によって保護され、愛情を与えられた安心の場所だった。〈自分はカンボジア人なのに、どうしてタイ（のキャンプ）に住んでいるのかも不思議に思わないくらい、タイでの8年間の生活はかけがえのないものでした〉とキャンプでの暮らしを振り返っている。Nさんは、ここでの経験から「自分は大切にされる存在」であり、「他者は信頼」でき、そして「自分は生きていける」という実感を持つことができたのであろう。

希望とともに日本へ移動

1989年8歳の時、両親と一歳年下の弟とともに来日した。その時に難民として他国に移住することの意味を十分に理解していたわけでない。しかし、キャンプを出て日本に行くことが何か「良いこと」であり、「幸せをもたらす」ことであるという漠としたイメージを持っていた。というのは、それまでに親はアメリカへの定住申請をしていたが受け付けられず、やっとカナダへの定住許可がおりた時には父親が不在のために、母親は散々迷った末に諦めたという経過をNさんは見ているので、いかに第三国への移住ということが重要なことかを感じ取っていたからだ。〈キャンプから沢山の人が外国へ夢と希望を抱き出発していきました。私の家族もその中の一つでした〉と語るように、日本への出発は希望と共にあった。来日の際のNさんのかつこいいジ

⁴⁸ この語りは、Nさんが専門学校時代に発表したスピーチからの引用である（アジア福祉教育財団 2021）。

ーンズ姿は、それを物語っている。ピカピカのジーンズに込められた想いは、単に新品の衣服を着る嬉しさととどまらず、新しい世界への期待と旅立ちの喜びを表している。これが、N さんにとっての「移動」の意味であった。

地域の人々に助けられる

N さん一家は、神奈川県にある難民定住センターで 6 ヶ月間の日本語学習と生活のオリエンテーションを受けた。この間に、N さんは近隣の小学校に体験入学をした（後述）。センターを出所後、父親の就職先がある K 市へ移動し、会社が用意したアパートに入居した。この時にはもう一人の弟（8 歳年下）が誕生し五人家族となっていた。そして、引越しして 10 日も経たずに父親が突然の腹痛で倒れるという緊急事態が起こったのである。誰も知っている人や頼りにする人はいなく、家には電話も引かれていない状態で、家族は慌てふためいた。

お母さんに「上のおばあちゃんのところに行って、電話を借りて救急車を呼んでもらって」と言われて、弟と一緒に行って、片言で「お父さん、お腹イタイ、イタイ」と伝えました。そしたら、おばあちゃんが電話してくれたのです。

小さな弟を連れて必死に助けを求める健気な N さんの姿は、おばあちゃんの心を打ったであろう。すぐに救急車を読んで、親切に対応してくれた。

定住センターを出た時には突然にポーンと外に投げ出された感じでした。そしてこの事件があって、これからは家族五人でやっていかななくてはならないんだとあらためて思いました。

定住センターでも慣れない食事など大変なことは沢山あったが、それでも職員に守られて生活ができた。しかし、それは一時的な仮の生活であって、本格的な生活を始めた途端のこの事件は、今後の家族の厳しい道のりを示唆するようであり、家族の力量が試されることになった。これまで親に守られて頼ってきた N さんもただ黙っているわけにはいかなかった。父を助けるために必死に行動した。N さんにとってこの大仕事をやり遂げたことは、父親が助かったという安堵感とともに、危機をなんとか乗り切ったという自信にもつながったのではないだろうか。

この出来事の際に助けてくれたおばあちゃんは、命の恩人として N さんと家族の記憶に現在でもしっかりと刻まれている。何も持たず何も知らない難民家族にとって、異国の未知らぬ他者がすぐに助けてくれたことは、家族の安心につながったであろう。困った時には誰かが助けてくれ

るという文化は、民族や地域を超えて人間が生存するための基本的条件である。その文化に接したことは、新しい生活を始める際の心強い初期設定となったであろう。Nさんは、このおばあちゃん以外にも、K市の近隣の人たちはみんな親切だったと語る。〈近所の人たちが本当に良くしてくれました。近くのお姉さんは、アニメを何回も貸してくれたり、そういう人が沢山いました〉温かな地域の人間関係、近隣の親密な他者たちとの絡みあいの交流が目に見えようである。Nさんにとってこの小さな地域環境は貴重なメッシュワークであった。

現実の厳しさに直面する学校生活

Nさんは難民定住センターにいる時に近くの小学校に体験入学し、2年生のクラスに入った。

有無を言わず、突然日本人の中に放り込まれた状況でした。(中略) 日本語はわからず、誰も知っている人はいません。クラスに馴染めなくて、クラスの中にポツンと一人でいて、すごく孤独でした。

まるで大海に投げ入れられた小魚のようだったであろう。8歳の少女にとって、見知らぬ児童に囲まれ、教室の中でただ黙って座っているだけの時間がどれほど絶望的かを想像する。この危機を救ったのは「国際教室」という場であった。当時、外国人の子どもの増加とともに、国際教室が設置され、担当教師が派遣された。ここでNさんは、Nさんの背景を理解するカンボジア人教師に出会い、心を開き、自由に話すことができた。国際教室は、孤立という牢獄から逃れて自分を取り戻し、生きる世界に繋ぎ止めておくための避難所となった。しかし、ここからまた普通クラスに戻らなくてはならない。

(国際教室の先生に) 普通クラスにも馴染むようにと、連れ戻されるのがすごく嫌で、行きたくないって言ったら、ダメだって怒られて、(中略) 今になってその厳しさ(の意味)がわかるのですが、その時は、すごくショックだったですね。

Nさんは、厳しい現実から逃れられない自分の立場を知った。当時は唯一の味方であったカンボジア人教師も自分を見捨てるのかと思った。その教師の行為の意味を理解するのは大人になってからのことだった。

Nさんは、その後父親の就職に伴って移動した先のK市の小学校3年生に編入した。新しい学校に移っても、Nさんの厳しい状況が大きく変わることはなかった。

言葉が通じないから、友達もできない、みんなのいうこともわからない。(難民) キャンプでは好奇心旺盛だった私が、徐々に自信をなくしていきました。

クラスの中で孤立し、日本語の壁で授業にもついていけず、同級生からは耳につけたピアスを揶揄され、いじめにもあった。日本語がわからない自分、ピアスをしている自分、肌の色が違う自分、名前が違う自分が、周囲の多数の日本人とは「異なること」を否応なしに突きつけられる日々だった。人種差別を喚起する3要素（外見、名前、言語）が勢揃いした状態である。Nさんは学校の門をくぐることができず、そばの神社で弟と一緒に過ごしたこともあった。ある日、学校からの運動会のお知らせを家に持って帰り親に見せたが、親はその意味がわからず、当日姿を見せず、用意すべきお弁当もなく居たたまれない思いをした。自分が「異質であること」は自明であったが、それが何を意味するのかは理解できなかった。

一連の不快な出来事を理解できず意味づけができないことが、Nさんを一層不安にさせた。そして、この不安はNさんを自己の存在否定という方向に向かわせた。〈鏡を見てなぜこんな顔をしているのだろう、なぜ自分は日本人に生まれなかったのだろう〉と思ったという。自分は「ここに居てはならない存在」と日本社会の偏見を内面化してしまったのである。Nさんがこの危機的状況の中でとった生存戦略は、透明化だった。

私も日本人の中に入りたい。大勢の人とは違う自分を消して、自分の存在を無くしたいと思いました。大勢の人の中で、色の違う人種が一人いるみたいで嫌だったのです。

クラスの中では沈黙し、ひたすら目立たないようにした。殻の中に閉じこもって自分を守った。そのNさんの生存戦略は、キャンプ時代の好奇心旺盛な自画像を作り変えた。自画像を塗り変えたのはNさん自身であり、他者に強制されたわけではないが、それはNさんが望んだ選択ではない。周囲の眼差しによって、選択せざるを得なかったのである。Nさんの透明人間という新しい自己は、周囲が押し付けたNさんの自己像だった。

透明人間となったNさんに対して執拗にいじめを続ける生徒がいた。耐えてきたNさんであるが、ある日この児童をめぐって事件を起こった。宿題状況の回覧板が回って来た時に、宿題未提出だったこの生徒の名前の横に、Nさんは“バカ”と書いたのである。それは意図したものではなかったので、誰の仕業かとクラスは混乱した。その時ある生徒が、自分がしたと言ってNさんの身代わりに立った。それを見てNさんは悪いと思い、自ら教師のところに行き、自分の仕業であることを告白した。教師は事情を理解し、その後いじめは止まった。この時の事件を振り返って、Nさんは次のように語った。

その時、「私って、大胆なことをやるな」と思いました。でもこんなふうに自分を押し出していくやり方とか必要かなと思いました。ちゃんと伝えないと伝わらないということを生活の中で学んでいきました。

Nさんのこの思いがけない行為は、直感的に反応したのであって意図したものではない。それは意識以前、言葉以前の情動的なものだったのだろう。情動は周囲の環境によって引き起こされ、そして周囲の環境を揺さぶる機能を持つ。また情動は生の潜在性とも言われるように、個体が生存するための直感的な反応である。Nさんはこの大胆な行為に自分で驚いているが、それは潜在的にあった生の力なのではないだろうか。Nさんはこの事件を通して自分の中にあるもう一人の自分を発見し、できないと思っていたことができることを知った。そして、この経験からマイノリティである自分は多数派の人たちに対して、ただ黙っているのではなくて、自分の考えや気持ちをきちんと伝えていくことが重要であり、そして行動することで周囲の環境(メッシュワーク)が変わるということを学んだのである。これは、生活の知恵となり、その後のNさんの人生における一つの指針となっていく。

Nさんにとって、もう一つの大きな事件があった。ある日、Nさんが年上のカンボジアの少女と歩いていると、ある男子児童が「難民が来た」とはやし立てた。その時、Nさんは「難民」の言葉の意味がわからなかったので、カンボジアの少女に尋ねた。

お姉さんは、『知らなくていいよ』と言って、説明してくれなかった。後で、“私って難民なんだ、カンボジア人なんだ、なぜ日本に来たんだろう”って。その時まで意識しないであっていいけれど、難民はカンボジアで戦争があつて来たっていうことが、だんだん周りの情報からわかってきて、(中略)お姉さんが、その説明をしなくなかった理由もわかってきて、(中略)。それがいじめや差別なんだって。(お姉さんは)傷ついたんでしょね、難民という言葉の意味を知っているから、きっと。(その少女は)クラスでその男の子の顔を見るだけで嫌だろなって。私は知らないから幸せだったのかもしれない。もし私がそう言われたら、傷ついてたかもしれない。

このエピソードには幾つもの意味が含意されている。まず、男子児童がNさんと少女を「難民」と勝手に表象したことである。当事者が自らを「難民」と名乗っていなかったにもかかわらず、本人の了解もなしに他者が名指しすることの暴力性である。次に男子児童は「難民」という言葉を、Nさんと少女を貶める言葉として用いたことである。それは、難民という中立的な政治的地

位を序列化することの暴力性である。ここに2重の暴力性がある。Nさんはこの事件を単なる個人的な感情に落とし込んで終わらせるのではなく、それを差別という社会制度として後になって意味付け、客観化し自分の知としている。このことは世界に対する認識の変化であり、同時に世界に開かれていくことである。

このエピソードから引き出されるもう一つ大切な意味は、Nさんのお姉さんに対する心遣いである。ここに二つの意味がある。ひとつ目の意味は、はお姉さんが示した謙虚な優しさを高く価値づけていることである。Nさんを傷つけないために言った「知らなくていいよ」という言葉に込められた思いをNさんは理解し、感謝している。もう一つの意味は、男子児童の暴言に対して沈黙しているお姉さんの悲しみや悔しさを想像し、他者の痛みを自分の痛みとして感じ取っていることである。この経験をNさんは他者への共感という形で自身の精神的な成長の糧としている。ここには他者との「絡みあい」という繋がり方の本質がある。それは他者の内側に入って、他者の経験を自分の経験とすることで自己を変革することである。それは他者と同じ経験をするのではなく、自分独自の意味づけによって世界とつながるということである。

安心の場所を離れて新しい世界を模索する

Nさんは小学校から中学校にかけて親友と呼べる友人がいた。その友人は、Nさんと同じ境遇にあるカンボジア難民だった。その少女の存在は、Nさんにとって安心の居場所となった。しかし、親密性は両刃の剣である。近すぎる親密性は副作用を伴うことにNさんは気がついて、ある行動をとった。

なんでも一緒によかったのだけれど、自分は彼女に頼っているところがあると思った。(中略) 中学3年になる時、もし彼女とクラスが別になったら新しい友達ができるのではないかと思って、自分で行動を起こして、先生のところに行って、その友人とクラスを別にしてほしいと言った。(中略) お互いが、頼りあっている関係だったので、離れるのは心配だったけれど、でもそのおかげで林間学校では別の友達ができ、(新しい友人に) 本音は言えなかったけれど。(中略) 人生の中で本当の親友は一人か二人でいいけれどいろいろな人と付き合うのもいいと、それが自分で習得したことでした。彼女(カンボジア人の親友)に他の友達ができ嫉妬したり、あとで後悔や葛藤も少しはあったけれど、私には挑戦したいという気持ちがあったのです。

自ら行動を起こし挑戦する態度は、小学校時代の大事件から学んだ知恵である。Nさんは、自分のことを自分で決めて行動する人間と表象する。Nさんは、行動後にその結果から何を得たか、

何を失ったか、全体としてどうだったのかを評価し、学んだことを意識化して人生を生き抜く知恵としている。そのやり方は理にかなっており（本当の意味で合理的）、過去の経験と知恵を着実に次の出来事に応用し、新しい自己を生み出している。

自ら行動を起こすというやり方は、学習面でも発揮された。Nさんは中学時代に自分の成績では高校進学は危ういと感じ、通っていたクメール語教室に来ていた小学校教師のSさんに自ら教科書を持って行って「教えてくださいませんか」と頼んだ。そして、Sさんは自宅で開いている学習塾にNさんを誘った。しかし、Nさんの親は躊躇したため、Sさんが家に来て親を説得し、Nさんと弟は塾に通うことができるようになった。

無料の塾で、すごく助かりました。そこで高校の進学の相談もできました。進学のことって、両親に相談できなかったのも、すっかり先生を頼っていました。（中略）外国人とか言われて悩んでいる時に、先生はそんなこと気にしないで、言わせておきなさいとか、勇気づけてくれました。何もわからない中で、生活面でも力になってくれました。

Nさんの親は日本の受験事情を知らないのも、子どもに適切な助言を与えることができなかった。しかし、子どもを見ず知らずの人の家に夜通わせることを心配し、Nさんも親の意向に背くことはできなかった。この矛盾の中で、Sさんの介入はNさんにとって大きな助けだった。そして、親以外の大人からの助言が大きな力になることを実感する。

塾では外国にルーツを持つ子どもたちが集まり、一緒に勉強した。ともに努力する仲間の中には高校進学を果たしたロールモデルとなる生徒もいて、教師の助言もあり、高校入学の希望を果たした。その力の源泉は高校に行きたいというNさんの強い願いであるが、同時に周囲の励ましと支援が非常に大きな力となったことをNさんは自覚している。Nさんは親以外の人からの助言や励ましを受け、親という安心の居場所から距離を置いて行動することを経験し、徐々に自分の世界を構築していくのである。

上記で「自ら行動を起こす」という能動性を強調したが、実は「行動が引き起こされた」という方が適切かもしれない。中学校でクラス担任の教師に親友のカンボジアの少女と別のクラスにしてほしいと自分で言いに行ったこと、通っていたクメール語教室で出会った教師に自分から勉強を教えてほしいと願い出たこと、それはNさんの自発的な行為であり、誰かに指示されたり、強制されたりしたわけでない。しかし、これらの行為は周囲の環境（メッシュワーク）にそのような行為を引き出す要素が埋め込まれていて、それをNさんが直感的に掴み取ったことによるのではない。そのように捉えると、エージェンシー（行為能力）あるいはエージェント（行為主体）はある個人（個体）に属するものではなく、その個体が関係付けられているメッシュワーク

にあると言える。

壁を取り去り飛躍する高校時代

Nさんにとって高校への進学は、勉強を続けることや就職への利点ということだけではなく、新たな世界への挑戦という意味があった。

その高校だったら、来る人たちは同じ小中学校の人だけでなく、いろいろな地区から来るので新しい友人もできるし、新しい環境になるし、どうなるかわからないけれど。でも、だから選んだのです。挑戦したかったのです。

Nさんは、自分らしく生きるために「新しい環境」を望んだ。それは、既存の環境（メッシュワーク）を編成し直すことではなく、環境を丸ごと変えること、異なる環境への移動である。それは、ドゥルーズの言う肯定的な逃走であり、インゴルドのいう危機のすり抜けである。Nさんは、他者を遠ざける自分から他者に働きかける自分へ、そして世界に閉じこもる自分から世界へ開いていく自分への変化を望んだのである。しかし、環境を変えるということは可能性と同時にリスクもついてくる。その意味で、高校入学は更なる自分への挑戦でもあった。

同級生は、外国人の私に興味を持ってくれて『何語が話せるの』『カンボジア語、すごいいね』とか言われて、『2か国語ができるって、すごいことなんだ。頑張らなくちゃ』って思いました。わたしと同じ名前のブラジル人のSさんがいて、みんなが私といとこ同士とか言って面白がっていました。（中略）環境が一気に変わって、高校生活は、小中学校とは違って、本当に楽しかった。それで、私の中にあった壁がとれました。

高校では、同級生による好意的な関心と承認によって、自分の中の壁が取り除かれていったと語る。しかし、その土壌はすでにNさんの中で準備されていたのだろう。自己の変化は条件が揃えば必然的に起こるものである。その条件とは、ある特定の理由や原因によって起こるのではなくて、自己のそれまでの経験の総体であり、自己と他者の関係であろう。しかし、本人が意識できるのは表面に出た現象として可視化された瞬間である。その瞬間は、それ以前の経験の積み重ねの結果であるが、その多くは意識されずにやり過ごされてきたことで、カウントされない。しかし、それらは確実に影響しているし、異なる機会に別の形で想起されることもある。このことはまた、メッシュワークの特質をよく表している。つまり出来事が起きることは、それが個人的な経験のように見えて、実はさまざまな周囲の他者との関係によるものであるということである。

過去の経験と現時点での同級生たちとの関係によって形成されたメッシュワークの中で、Nさんの壁が取り除かれていったと言える。そして、Nさんは大きな飛躍の瞬間を迎えるのである。

仲がいい友達と家で一緒にカンボジア料理を食べたら、『すごい、美味しい、美味しい』と言ってきて。そのとき、カンボジア料理は日本人にも受けるんだと思いました。それで、文化祭で何をやるかという時に、皆から押されてカンボジア料理を提案したら、それをやるということになって(中略)生春巻きで、タレはお母さんに手伝ってもらって、カンボジア衣装も着たい人たちには着てもらって、そしたらブラジル人の友人と一緒に着てくれて(略)。

Nさんはクラスの文化祭の出し物としてカンボジア料理の出店を提案し、クラスの同意を得て、大成功を収めた。お母さんが作ったタレが好評で、Nさんはあらためてお母さんの料理の腕を見直し、その協力に感謝した。Nさんは、これまでカンボジアにルーツを持つ自分を受け入れることができずにいた。しかし、高校ではそれまで無くそう、隠そうとしてきた自分の出自や異質性の中に可能性があることを発見し、カンボジア人であることを素直に受け入れていくのである。

成長の糧となる言葉

Nさんは高校を卒業して航空関係の専門学校に進学した。ある時、飛行機を見て、日本に飛行機で来たことを思い出し、日本とカンボジアという二つの国を結びつけるような仕事につきたいと思ったことがきっかけだったという。そして、Nさんはここで出会った専門学校教師の言葉に深く心を動かされた。

先生に、「あなたは日本人にない良いものを持っている。辛いこともあるだろうけれど、その辛さを経験したからこそわかったことを大切にして、外国人であること、難民であることをアピールしなさい。それは長所だから」と言われて、そう思っていたんだって気がつきました。先生の言葉が響きました。外国人であること、難民であることを自慢していいのだと。それから、自分が難民であること、外国人であること、日本人に憧れていたことを、受け入れられるようになりました。

Nさんは先生の言葉に勇気づけられたと語るが、それはすでにNさんの中で醸成してきた知を、先生が言語化してくれてからだろう。Nさんはかつて、自分が外国人であること、カンボジア人であること、難民であることによって理不尽な扱いをした。しかし、その辛い経験は、「難民」

と揶揄されたカンボジアの少女の痛みへの共感を生んだように、Nさんの精神を高める栄養となった。先生は、そのようなNさんの貴重な経験の積み重ねを、言葉にして表現してくれたのである。

先生が用いた「難民」という言葉と、前述したNさんを貶めるために用いられた「難民」という言葉は、同じ言葉でもその機能は対照的である。前述した「難民」という言葉は他者を否定し世界を閉じさせるための機能として働き、上記の教師が用いた「難民」は異他なるものを肯定し、世界を開いていく効果を生んだ。つまり、言葉は単独で意味を生むのではなく、他の言語との関係の中で意味が生じることを示す。それはまた、メッシュワークという文脈の中で個人の行為が他者との関係の中で意味を持つことに通じる。つまり、個人に起こった出来事は他の要素との関係の中で引き起こされ、その関係の中で意味を持つということである。

言語は単に他者とのコミュニケーションのためだけではなく、世界と自己を知るための大切な媒体である。Nさんは日常的な生活用語としての日本語は習得したが、概念化のための日本語を習得する特別の訓練は受けてこなかった。このことはNさんだけでなく多くの1.5世にとって未だに大きな障壁である。出来事は意味づけられて経験となるが、その意味づけにおいて、また他者に伝えるために概念化する言葉が必要だ。Nさんは成長する植物が水を必要としているように、この時に自分の考えや気持ちにピッタリあって、胸にストンと落ちる言葉を必要としていたのであろう。

Nさんの生き方とその継承

専門学校を卒業し航空関連会社に就職が決まったNさんは、両親から離れ自活を始めた。Nさんは「普通のOLの生活」を存分に楽しみ、新しい世界を経験したという。会社でのNさんは、自分がカンボジア人であることや難民であることを隠すこともなく、また特に主張することもなく自然に振る舞った。そのようなNさんの態度によって周囲の人々から「Nさん、外人だったの、話していると忘れちゃう」と言われるようになる。しかし、この言葉もまたNさんにとって違和感があった。

インドシナ難民といってもピンとこない人が沢山いるんだなと思う。日本語も流暢で、日本人と同じようにできると思われているけれど、でも同じようにできないことも沢山あるし・・・。

日本語ができず、日本風の名前でなく、ピアスをつけているNさんが、「外国人」という基準によって差別を受けた来日当初とは違って、「日本人らしく」なつたと表象されるのであるが、N

さんは自分を日本人と同じになったとは思っていないし、またそうなりたいとも思っていない。カンボジア人としてのルーツをもち、難民として日本に来て、今こうして日本で生きていることを自覚しているNさんにとって、日本語を流暢に話すことは多数派である日本人と同じになることを意味しない。このことは何を意味するのだろうか。社会の中でルーツを意識する必要がないマジョリティは、他者の眼差しにさらされることなくどこにでも居ても自然に振る舞える特権を享受している。その裏返しとして、マジョリティはマイノリティの苦痛に思いが及ばない。そのような「日本人」になることをNさんは望んでいるのではなく、マジョリティとマイノリティの壁をなくすことが本当の望みではないのか。かつてNさんは、自分の出自や背景を常に意識させられ、自分は他と違うことに葛藤することもあった。しかし成長とともにそれを自分の特性の一つとして素直に受け止め、異質であることの可能性への認識を深めて行った。

Nさんは、結婚して二人の子どもが生まれ、現在は四人家族で暮らしている。Nさんの結婚に関して、親はカンボジア人と結婚して欲しかったが、Nさんは自分で決めた。相手は日本人であったが、特にそのことを意識したわけではない。子どもはNさんの両親の家のそばの保育所に通っていることもあり、毎日のように祖父母と過ごす時間を持つ。そのなかで自然とカンボジアの言葉やカンボジアの文化に接している。

Nさんは、大人になってからクメール舞踊を習い始め、今では舞台にたつほどに上達した。友人と一緒に子どもたちにも教えている。幼いときに難民キャンプでクメール舞踊を見て、習いたかったが、親の許可が得られずあきらめたことがあった。その経験があつて日本で始めたのであるが、現在はクメール舞踊の高い芸術性を認識し、その文化を日本でも広めたいと思っている。かつてのカンボジアのイメージはメディアなどで報道される戦争や貧困といった一種ネガティブなものが多かったが、クメール舞踊の優雅な美しさを通してカンボジアの別の面を日本の人にもっと知ってほしいし、また子どもたちにも伝えて自分のルーツに誇りに思ってもらいたいと語る。筆者の「子どもたちに、自分が難民として来たことを話しますか？」という質問に対して、Nさんの以下のように答えた。

話していきます。どういう風に受け止めるか楽しみです。当時の私が感じていたように、特別なこととして受け止めるのかどうか。(中略)日本人であり、カンボジア人であることを良い意味で受け止めてくれることを期待しています。私はちょうどその挟間にいたので……。

多数派の日本人と違う自分は「普通でない」として、自己否定する自分がかつてはいた。しかし、今は外国人であること、カンボジアにルーツを持つこと、難民として来たことを素直に受け

止め、その特性と可能性を自分の宝だと考えている。宝である自分の経験と知恵を愛する子どもたちに伝えていきたいということは、とても自然である。子どもたちが、どのように受け止め、そしてどのように人生に活かしていくかはわからないが、そのことも当然なこととして受け止めている。Nさんが、日本社会で生き抜くために辿ってきた自己の変化の道筋（応答プロセス）を子どもたちに伝えていくことは、子ども達が新たな経験と知恵を生み出す源泉となり、物語は続いていくのだろう。

4-3-2 Mさんのライフストーリー：カンボジア人であることを忘れてほしくない

カンボジアでの子ども時代

Mさんは1982年にカンボジアで生まれ、13歳まで暮らした。3歳の時に父親が政治的な理由から、家族に迷惑をかけたくないと黙って国外へ出た。その後は、母親と妹弟、そして母親の祖父母や兄弟をはじめとする大家族の中で育った。1995年、日本に定住難民として暮らしていた父親の呼び寄せにより、母親と妹弟と共に来日した。

Mさんの母親は小学校の教師、祖父（母方）は校長、祖母（母方）は食料品店を営んでいた。Mさんが幼少期のカンボジアは、社会主義国家というその政治的立場により国際社会、特に西側の資本主義陣営から孤立させられ、経済的に大変に厳しい状況にあった。しかし、人々は家庭菜園で野菜を作り、川で魚をとり、それぞれが生きる工夫をし、穏やかに暮らしていた。Mさん家族は、相対的な意味で経済的に困ることなく暮らしていた。母は教育熱心で、Mさんの成績が下がると厳しく叱咤したという。父親はいなかったが、祖父をお父さんと呼び、また母親の兄弟もいて、〈誰かがいなくても、いつもその代わりの人がいた〉と語るように、Mさんは寂しいと思ったことは一度もなかった。多様で親密な人間関係の中で、伸び伸びと素直に育った様子が伺える。Mさんの友人たちは、Mさんがカンボジアを離れて、もう戻ってこないことを知って泣きはらしたという。このようなエピソードから、Mさんは情感豊かなカンボジアの共同体の中で平穏に暮らしていたことが想像できる。このような環境の中で、Mさんは「自己の尊重」や「他者への信頼」という人格形成、そして「カンボジア人としてのアイデンティティ」の基礎が形成されたのであろう。

日本での新しい生活

Mさんの来日の契機は、日本に定住難民として暮らしていた父の呼び寄せによる。Mさんと母、妹弟は、日本に行くにあたって周囲に黙って準備を始めた。それは、当時のカンボジア当局は海外移住を厳しく管理していたために、知られると問題が生じるからだった。Mさんは、自分がど

のような立場で日本に行くのか、そしてカンボジアには戻ってこないこと、その意味を理解していた。日本に移住することは、カンボジア人の多くが海外に行きたくても行くことができない状況にある中で、幸運なことだと感じたという。

Mさんは成田に着くとすぐに出迎えた父親と父親の会社が用意した寮へ直行した。ここで家族全員が揃っての新しい生活が始まった。

日本に来て、初めて家族という感情が生まれた。それまでは、(カンボジアで)「お父さんが来るよ」と言われても、「誰、それ」という感じで、お父さんに特別な感情も持っていなかったの・・・。

Mさんは、難民の資格で来たのではないので難民定住センターでの日本語学習や生活のオリエンテーションなどの支援を受けていない。しかし、父親がすでに日本に5年間住んでいたの、生活事情については、父を頼りにできた。

ゴミ捨て場に行くと、すごくきれいなお皿とかあって、それを拾ってくるのが楽しくて。カンボジアではなんでも売れるから、缶とか拾っていっぱい家に持って帰ってきたら、お父さんにそれはゴミだから捨てて来てと言われて、また返しに行ったり。日本人はこんな良いものをなぜ捨てるだろうって、わからなかったです。

Mさんは、この異文化体験を笑って語った。カンボジアの文化とのギャップであると同時に、日本の事情がすでにわかっている父親とのギャップも垣間見えるが、Mさんにとってはミラクルワールドだったのだろう。

学校生活が始まる

Mさんは、本来ならば中学3年に編入するところであるが、日本語の壁があり小学校6年に編入した。学校に行くと、外国人の子どもの日本語支援をボランティアで行っている教師がいて、Mさんの支援を申し出てくれた。この教師の紹介で主婦や学生ボランティアたちが次々と家に来た。

ボランティアが代りばんこで来てくれて、そのおかげで、夏休みが終わったときには、ほとんど会話はできるようになっていました。(中略)目の前に学校のプールがあって、カンボジアにはプールとなくて、川とかしかないから、こんなきれいな水で遊ぶことが嬉

しくて、でも勉強しなくてははいけないし。（中略）先生が来るのが見えたら、その前に家をでて、（中略）そこでズーと隠れて、プールが開くのを待つて。でも、先生も、遊びたいということがわかっているので、わざと時間をずらしたりしてくれて。（中略）その先生が日本語だけでなく、家には何もなくて、部屋だけという感じだったから（中略）いろいろなものをくれました。食器から、洋服から、ランドセルや裁縫設置や絵の具も、持ってきてくれて（略）。

ボランティアとの温かい交流が目に見え、そのおかげで順調に滑り出した新しい生活は、驚きと楽しさに満ちていたようだ。このボランティア達との関係を「絡みあい」という視点から見ると、どのような意味を見出すことができるだろうか。花崎はボランティアの意味について、「困難な状況に立たされた人に遭遇したときに、自分とその人の問題を切り離して考えるのではなく、相互依存性のタペストリーを通じて、自分自身も広い意味でその一部として存在しているのだという、相手への関わり方を自ら選択する人」と述べ、比喻されるタペストリーは「世界中のさまざまな要素が互いに絡みあって縦糸と横糸が密接に絡み合って、密接に入り込むことで織りなされる関係性の集合」と説明する。さらにこの相互依存性を前提とした物事の成立は、コントロールできないし、結果が保証されないものでひ弱であるとみなされる」と述べる（花崎 2001）。これらの説明は、まさしく「応答プロセス」の本質的な考え方である。

ボランティアとの交流で順調にすすんだMさんの小学校時代であったが、中学に進学し初めて受け取った成績表を見て愕然とした。

中学校で、一学期の成績表をもらったとき、ショックだった。ほとんど2で、国語は1、唯一3をもらったのは、数学と英語だけだった。（中略）中国人の友達に、すごく成績が悪いのだけど、どうすればいいだろうと相談したら、知り合いの先生を紹介してくれて、会ったら先生が、「じゃあ、家に勉強しに来る」と言ってくれて、（中略）その先生のところに行かせてもらって、（夜中の）1時、2時まで勉強しました。今、考えると、その先生もすごくよく教えてくれたなど。そのとき、5人で先生の家で一緒に勉強して、先生がプリンターを買って、テキストをみんなにプリントしてくれて、塾には行っていなかったけれど、（他の）皆と同じように塾へ行っているようでした。

カンボジアでは飛び級するほど優秀だったMさんにとって、この事態は自己を否定されたようにも感じる体験であったろう。この時に、問題に対処する手立てを持ち合わせていないMさんは、まず誰かに相談しようと思い立った。その相談相手は、自分と同じ問題を抱えているだろうと想

定される外国人児童であった。そして、手がかりを得て自ら動き出し、この教師と出会う。この一連のプロセスは、異文化社会を生き抜くための生活の技を示している。何の情報も資源も持たない中で、まず誰か、それも助けてくれそうな誰かにアプローチする認識眼（人を見る眼であり、利得を見るのではない）と行動力である。Mさんのこの才覚は、子ども時代に養われた「自己への尊重」と「他者への信頼」という基本姿勢が土台になっているのだろう。そして、塾では持ち前の頑張りを発揮して危機的状況を乗り切るのであるが、その時にMさんは、自分の努力だけではなく、塾の教師や一緒に勉強した仲間の支えと励ましがあったことを深く自覚している。この学習塾はMさんにとっての新たなメッシュワークとなり、相互の行動を引き出し合う力（相互引力）を生み出していたのだろう。そして、ここでの経験が異文化社会で生き抜くための生活の知恵となる。

カンボジア人としての誇り

Mさんの父親はカンボジアの大学に進学し中学の教師となったが、当時の体制に批判的だったため身の危険を感じて国を出た。その後、難民キャンプに滞在し、1990年に日本へ定住難民として来た。工場で働きながら夜間中学を卒業し、さらに通信教育で高校も卒業し、リーマンショックで解雇された時には、雇用保険を利用して自動車整備2級の資格を取得したという勤勉で向学心の旺盛な人である。その父親は、毎日のように子どもたちに自分がこれまで生きてきた試練や苦勞、そこから得た教訓などを語ったという。

お父さんは、いつもご飯を食べる時に、またと思うくらい、（中略）自分がどれだけ命がけで日本に来たか、（中略）自分は若い頃勉強したくて、爆弾が落ちたりする中でも学校に通っていた。だから、君たちはこんなに安全で立派な学校がある所にいるのだから、勉強しないともったいないとか、そういう話を何度も聞かされました。

本国での過酷な経験を話しながらないカンボジア人1世が多い中で、Mさんの父親は本国での厳しい暮らしを貴重な経験として意味づけ、どこの地でもカンボジア人としてしっかり生きていくことを信条としている⁴⁹。一方で、Mさんはカンボジア人であることを恥ずかしがるようにして日本で暮らす人に出会う。

⁴⁹ 筆者はMさんの父親にもインタビュー（2018年5月）をして、カンボジアにいた時の彼の状況や思想統制する国家の体制について聞いた。そして、〈日本は安全な国なので頑張ればなんとかなる、日本で社会貢献していきたい〉と彼は語った。

私がまだカンボジア語しか話せない時、カンボジアの友人にカンボジア語で話しかけたら、嫌がるのです。『来ないで』って。なぜカンボジア語で話しかけたら逃げるのがわからなくて・・・(中略)でも、Nさんはそうではなく、カンボジア語で話しかけたら、カンボジア語で返してくれたのです。わからないことがあったら教えてあげるね、と言ってくれました。自分もこういう人になればいいんだって思いました。

Mさんは、このカンボジア語を話したがない人を反面教師として、一方でカンボジア人として堂々と振る舞うNさんをロールモデルとして、日本で生きていこうと思った。ちなみに、このNさんとは前述のNさんのことであり、「みんなと違う」という自分の中の異質性の壁を取り払った後の新しいNさんである。Mさんは、カンボジア人であることを嫌がるような人の子どもは、カンボジア語を話すことを恥ずかしく思い、日本人とばかり付き合っ、結局カンボジア語を話せなくなると批判を込めて語る。この思いは、その後にMさんの信念にもなり、子ども達にカンボジア語を伝えていくことの根拠となる。Mさんにとって、カンボジア人であることは、決してその優位性を誇示することや日本人であることを否定することではなく、人間としての尊厳の問題なのである。

落胆と巻き返し、そして新しい自己へ

Mさんは高校、大学と進学し、そして就職活動を迎えた時、ある事件に遭遇する。市役所へ就職の応募書類を持って行き、対応した職員と面接をした時のことである。

市役所に外国人課というのがあって、そこに就職できれば外国人の人に役立つことができると思って、応募しました。応募書類を出す時に面接をするのですが、(中略)その時すでに帰化していたのです。「もし、採用されたらどこの部署に行きたいか」と聞かれたので、カンボジア語が話せるから外国人課か、大学時代に県税事務所でアルバイトしていたので税務課に行きたいです、と答えました。そしたら、面接した人に、「帰化した人には、税務関係と外国人関係と保険関係には配属できない」と言われたのです。「えっ、他の部署になってしまう、(希望の課へ行くこと)それが出来ないなら、何のために役所にはいるのかわからない」これはひどい、帰化してもだめなんだ、と思いました。

Mさんは市役所の対応に納得できず、後日電話をして異議を申し立てた。市役所の対応は曖昧で納得できなかったが、その後Mさんの要望は取り入れられ、市役所の応募要項は更新された⁵⁰。

⁵⁰ 筆者は、その改定後の要項内容を実際に確認した。

その当時のことを、Mさんは以下のように語る。

役所に電話したら、確かにそのような人に面接をしたのを覚えているけれど、そのようなことは言っていないと言い張るのです。役所だから、そういうのを認めたくないんじゃないですか。自分は、そこで諦めてしまったわけですが、若い世代の人にそういうことは経験してほしいと思って、（中略）応募要項のところに、帰化した人にも制限なしと記載するように要求しました。（中略）そのことがあって、私は職（の可能性）をひとつ失うことになったのですが（略）。

Mさんは、自分の可能性を奪われ、悔しく思い、怒りも感じた。しかし、この事件を通して日本社会の理不尽な制度を知り、同じ苦難を次世代には経験させたくないと思った。Mさんは、この危機的状況の中で自分の利益を超えて他者の利益のために考え、行動した。それは新しい自己になり、人間的に成長することであった。そうすることで、Mさんは自己を世界に開いていった。

その後、Mさんは民間会社へ就職し、その勤勉な働きぶりと能力を評価され、重要なポジションに配属され、社内でも活躍した。そして、カンボジア人コミュニティの中でも、若手のリーダーとして成長していく。

日本に根づき世代を紡ぐカンボジア人として

Mさんは2023年現在、夫と4人の子ども（14歳から2歳）と暮らしている。子どもたちは、近くに住む祖父母とも頻繁に交流し、カンボジアの言葉も理解し、カンボジアの文化にも馴染んでいる。しかし、日本で生まれ育っているのも自然と自分は日本人であると感じているという。その上で、Mさんは子どもたちにはカンボジア人であることを忘れてほしくないとする。

（子どもたちは）日本で生きていくのですから、日本のことを理解していくのは大事ですが、カンボジア人であることを忘れないで、自覚して、日本の社会に溶け込んでいってほしい。そして自分はどうすればいいか、自分の役割を考えていってほしい。だから、あなたたちはカンボジア人だということをうるさがられても言い続けています。それが私の役割と思うから・・・。

Mさんが、このように語る背景にはこれまでカンボジア人として誇りを持って生きてきた自負と経験がある。Mさんは自分の助言が、すぐには子どもたちに理解してもらえないことをわかっている。

（両親が食事の度に話す）その時は、また説教が始まったと妹と一緒に思ったのですが、それが大きくなって、あの時に聞いておいて良かったなと思う時期が来るんです。お父さんの話を思い出して、私たちも頑張らなくちゃねと。だから、私たちの子どもも同じだと思うのです。今は、うるさいと感じるだろうけど、大きくなった時に、あの時お母さんが勉強しろ、カンボジア人であること忘れるなって言っていたことを。そして、子どもたちも自分がカンボジア人だなってわかってくれる時が来ると思います。自分がそうだったから・・・。

子ども達がカンボジア人であることを忘れないために、Mさんは言い続けていくという。またカンボジア語を話せ、文化に触れる環境を用意することも必要だと考えている。実際の生活においてはカンボジア人であることを忘れた方が都合の良いこともあるかもしれないが、Mさんは自分の経験から自己の尊厳を守って生きていく上で、カンボジア人であることの自覚は一つの確かな生の証となり得ると考えたのであろう。

生活の拠点を日本に定めこれからも日本で暮らすつもりでMさんにとって、カンボジア人という自覚は自分がどこから来たのか、そしてどこに向かって生きていくのかの起点/原点となることなのだ。人は過去と断絶しては生きられない。Mさんの大切な記憶の中にカンボジアにいたときに祖母が語ったという印象深い話がある。それはポルポト時代に食べるものもなく、下痢になった小さな息子（Mさんの叔父）に、当時は下痢の時には水を飲ませるという知識がなかったので何も飲ませず食べさせずに死なせてしまったことである。そのことをいつも後悔し、正しい知識がどれほど重要かと何度もMさんたちに語ったという。当時はわかったふりして聞いていただけであったが、子どもを持った今祖母の気持ちが痛いほど心に沁み、その教えがよくわかるという。〈その時は、面倒臭いと感じても、後になってわかる時や聞いていてよかったと思う時がきます〉と語る。祖先から子孫へと語り継がれる経験と知恵の継承は、まさにいのちのつながり、生の連続性である。

4-4 「経験の継承を生きる」ことについての考察

ここまでカンボジア人 1.5 世が自分の経験と知恵を子どもに継承していきたいという思いに至るプロセスを追ってきた。Nさんは「カンボジアと日本の良さを伝えていきたい」と語り、Mさんは「カンボジア人であることを忘れないでほしい」と語った。そこには、同年齢の 1.5 世であるが、来日背景や日本での経験は異なり、何を子どもに伝えていきたいかについても微かな違い

がある。一方で、子ども時代に日本に来て、異文化社会における緊張状況を生き抜き、新たな地平に立つということに両者における共通点が見えた。

4-4-1 経験の違いと共通点

NさんとMさんは、来日までの生活の場に大きな違いがある。Nさんは生まれてから8歳までタイにある難民キャンプで過ごし、Mさんは13歳までカンボジア国内で暮らした。一般的に難民キャンプは危険に満ち、また当時のカンボジアは経済的に困窮し、生育環境としては適切でないと思われがちであるが、一概にそうとは言えない。物理的な厳しい条件の中にあっても、豊かな人間関係は存在し、その中で両者は周囲の大人たちから十分なケアと愛情を注がれて育った。それによって両者ともに「自分が大切にされる存在」であり、「他者は信頼でき」、「自分はこの世界で生きていくことができる」という生きる上での土台が形成された。

来日時の年齢と背景もNさんとMさんは異なる。Nさんは8歳の時に難民という資格で来日したが、実のところ難民とはどのような人なのか、難民として他国へ移動することはどういうことなのか、自分の立場をよく理解できていなかった。一方で、Mさんは、来日時に13歳になっていて、すでにカンボジア人としての自覚はあり、また父親の呼び寄せという来日の経緯も理解できる年齢に達していた。このような違いが、来日後の異文化接触における経験の違いとしても現れる。Nさんは、期待して来た日本で言語と文化の壁に直面し、学校では孤立し、自らを閉じていく。Mさんは、来日してすぐに父親の会社が用意した寮に入り、ゴミ捨て場に捨ててある缶を異文化の面白さとして楽しみ、親切なボランティアに助けられて日本語を半年で習得するなど、順調な新生活を始めることができた。

異文化接触によって生じる緊張の度合いはNさんの方が厳しいようにみえるが、その後Nさんは孤立の原因となった自分の異質性の中に新たな可能性を見出し、自ら行動することを学び、飛躍する。そして、自己の変革とともに、他者の痛みに共感する能力を身につけ、精神的にも大きく成長する。Mさんは、はじめは順調だったが中学に入って学業成績の落ち込みに衝撃を受ける。しかし、全く手探りの状態から解決の手立てを見つけてそのハードルを超えて挽回する。また就活時には日本社会の外国人差別に直面し大きな挫折を経験するが、そこから自分の辛い経験を他者のために役立てようと考え、実践するという大きな成長を見せる。このように、異文化社会で経験する他者との摩擦や対立、それによって生じる葛藤を一つのイニシエーションとして自己変革につなげていくプロセスは、類似している。また、もう一点両者の大切な共通点は、危機的状況にある時に会った「重要な他者」⁵¹の存在である。国籍や民族を超えた他者との真摯な出会

⁵¹ 「重要な他者」とは、社会心理学者のミード・G.Hが用いた概念で、個人の自我が社会化する上で大きな影響を持つ人物のことである（浅野智彦 2021：505）。一般に、親や教師などがあげ

いによって、励まされ、支えられ、危機をともに乗り越えるという経験が、新たな世界へ開かれる窓口となっている。また、この経験は一人で問題を解決することはできないが、他者と助け合うことで困難を乗り越えるという協働の知恵を獲得する契機となった。それは後述する他者との経験の共有につながる。それぞれが唯一無二の異他なるものとの出会いによって生じる摩擦や葛藤が新たな自己を創出する契機となることを、ベンヤミンは「経験」の重要な特質として捉えている（ベンヤミン 1996）。

4-4-2 経験の総体性と連続性

NさんとMさんの物語は、本論で紹介しきれなかった幾多の経験から構成されている。それらは、雑談などから聞いた話であったり、テーマとは関係なく語った小さなエピソードであったり、また本人からは語られなかった出来事などである。物語とは、複数の経験の中から関連する経験を選び出し、それらを編集してストーリーとしたものであるとされる（やまだ 2021、桜井 2021）。しかし、本論の事例を見ていくと、それは断片化した経験のつなぎ合わせではなく、経験の総体であると考えられる。そこには、意識化されたものだけでなく、意識されないでやり過ぎしてきた「生きられた経験（体験）」も含まれる。さらには、言語化できないが身体の中にはしっかり刻まれている経験も含まれる。もちろん、個々の経験に濃淡はあり、意識的に記憶として刻まれた経験は、物語の中で重要な位置をしめる。その意味では語られる経験は、言語化され選択された断片的経験であるだろう。しかし、大きな意味での経験＝自己の物語は、その人の全体を形成するもの、自己そのもの＝Who⁵²である。その意味において、意識されない潜在的な経験、これは情動の理論における「生の潜在性」としての意味を持つものでもあり、それらも含めた経験の総体が物語を作るのである。インゴルドは、生きていることを「線の流れ」として捉え、それは点と点のつながりではなく、連続し、連動する出来事のひとつなぎであるとする（インゴルド、2014）。このように生を総体として見るとき、意識化されず、あるいは言語化されず語られなかった潜在的な経験を排除することなく、全ての経験を物語を構成する要素として尊重すべきであろう。

経験は出来事に遅れて生じ、時間的ギャップがある。そして出来事の意味づけは、時間の経過の中で、何度でも更新され新しい経験を生み出す。この経験の更新こそが、自己の変革を促す鍵である。Nさんは小学校で孤立した時に国際教室のカンボジア教師に救われたが、当時は普通クラスに連れ戻す教師に対してNさんは大きな失望を感じた。しかし、大人になってこの教師の行

られる。

⁵² ハンナ・アーレントは、「Who」と「What」を区別して、前者を正体、つまりその人そのものとしての人間アイデンティティ、後者を社会的役割や集団への帰属に根差した社会的アイデンティティとしている（アーレント 1994:292—294）。

為がNさんのためを思っただけの厳しい訓練であったことを理解するのである。また、Mさんは父親が毎日のように語る亡命や移住の話、自己研磨の大切さを聞き流していたが、後になって危機的状况に直面した時にそれらの話の意味がわかり励まされたと語る。このように、その時には理解できずにいた経験が無意識のうちに身体に埋め込まれ、異なる出来事との出会いや新しい視点を得ることで蘇ってくることもある。これは経験の再現ではなく、再生である。その意味で、どの経験も人生において無駄なものや、無関係なものはない。経験とは、時間的ギャップを伴うものであり、したがって醸成される時間を必要とする。インゴルドが述べるように生の流れは一直線ではなく、生を構成する経験がある文脈から離れたたり、新しい文脈の中で異なる経験と合流したりというように曲がりくねりながら、しなやかなラインを描いていくのであろう（インゴルド、2021）。

経験の総体というとは、経験が時間的に積み重なり堆積のように階層化される堅牢なイメージを持たれるかもしれない。しかしそうではなくて、全ての経験は蜘蛛の網のように出来事の糸が縦横に絡みあい、環境変化と共に柔軟に形を変えながら広がっていくのであろう（インゴルド、2014）。したがって、過去の出来事は時間の経過とともに色褪せていくわけでも、退化していくわけでもなく、また重要性を減じるわけでもなく、現在を活性化させ、生きている。

経験が連続するというとは、経験が経験を規定するという、経験が経験を呼び込み、新しい経験を生む（反復の中での差異）ということである。例えば、Nさんが小学校で起こした大事件で、いじめた相手への反撃という出来事を通して、ただ黙っているだけでなく行動する自分を発見し、その時に学んだ行動力は新たな自己や新たな他者との出会いを導く。Mさんは、中学で学業成績を落とした経験を通して、自分の勉強への情熱を再確認し、熱心な学習ボランティア教師や同じ問題を抱える仲間と出会い、その後の高校、大学への進学を可能にした。このように、すべての経験は絡み合い、影響しあっている。

連続する経験のプロセスは一直線ではなく、行きつつ戻りつつ、分岐し合流し、進んでいく。Nさんは親友と一時期離れることで新しい友人を得、それによって親友との新たな関係を再構築していく。Mさんは、就活の際に理不尽な理由によって希望する職種の可能性を失ったが、別の仕事で能力を発揮し、評価され、重要なポジションに配置される。経験と経験は点として繋がり合うのではなく線として続いていくからこそ、波線のように変幻自在である。連続した経験の流れに明確な境界線はないが、分岐点と結合点はある。このような経験の有り様は、インゴルドの言う「線の流れ」とそこから絡まりあい織りあげられる「メッシュワーク」に喩えられる（インゴルド、2021）。つまり、経験は多様な経験が絡み合ってリゾーム状の軌跡（痕跡）を形成し、その軌跡の中で新たな経験が再生したり、加わったりして形を変えて生成する。

4-4-3 経験と自己変革

経験は、自己を変革させる。自己の変化は徐々に進行する。そのため、実際にその変化が意識されるのは、可視化される瞬間である。それは、あたかも突然にやってくるように見える。例えば、Nさんは小学校の時に、それまで耐えていたいじめの相手に突然反撃を起し、その行動にNさん自身が驚くが、それは長い沈黙の中で意識せずに自問自答した結果だろう。なぜ自分がピアスをしているということはいじめられなければならないのか、どうしたらこの状況から抜け出せるのかと問い、そしていじめられるのは自分が悪いのではなく、いじめる相手に非があるという答えを自分の中で導き出したのではないか。この時にクラスの中のある児童がNさんの身代わりに立ったということは、クラスの中でもNさんに対するいじめを否定する雰囲気が生まれていたのだろう。そして教師もNさんの問題を薄々理解していたのではないか。このような水面下での環境変化とNさんの内部での変化が重なり、機が熟するように起きた出来事だったと言える。この出来事を情動理論から見れば、Nさんを取り巻く環境（メッシュワーク）の多様な要素が絡まり合って、Nさんの行為を引き出したというように解釈できる。Nさんの個人的な行為能力（エージェンシー）というより、Nさんを取り巻くメッシュワークによって授かった力ということである。そして、Nさんはこの出来事を契機に、「他者に伝えるべきことは伝えること」、「行動していくことで状況は変わることを学び、その後のNさん「応答プロセス」の実践を支えていく。

その後、次々と顕在化されるNさんの自己変革の出来事、例えば親友と距離をおいて新しい友人をつくること、学習塾へ通って高校進学を果たすこと、高校で自分の中の壁を取り去ること、文化祭の企画を成功させること、親に黙って専門学校を受験すること、実家から離れて自活することなどの出来事は、Nさんの内的変化と外部の環境変化とがピタリと出会った瞬間に自ずと現れた現象であろう。出来事は奇跡でも偶然でもなく、なるべくして成った生成変化なのである。インゴルドは、どの個体も自分自身で存在するのではなく、他者との関係において、自己になっていくのだと述べる（インゴルド 2021）。

インゴルドは、進化は生産する（produce）ことではなく、生成する（generate）ことだと述べる（インゴルド、2021）。その意味は、散歩の比喻に例えられる。散歩は目的地を定めて効率よく最短で到着するのではなく、ふらりふらりと歩きながら周囲に目を配り、耳を澄ませ、風を感じ、気になったことがあれば立ち止まり、見知らぬ他者と出会って交流し、その中で何かを発見し、そして次に進むべき方向がおのずと開かれる。進むべき方向は、その道筋において生成された知識から自ずと示されるのである（インゴルド 2021）。自己の変革を促す経験は、このような生成のプロセス＝「応答プロセス」であろう。

4-4-4 経験の排除と共有

物語の構成は選択された断片的な経験ではなく、経験の総体であると前述した。しかし、現実の社会では経験を断片化して、有用な経験と無用な経験に分類し、無駄と思われる経験を排除したり、無視したりすることが多々ある。それは、経験の当事者に痛みや苦痛をもたらす。1.5世のような多数派と異なる経験を持つマイノリティにとっては深刻である。例えば、Nさんは、来日当初に日本語がわからないことや日本人とは異なる外観によって、小学校で孤立しいじめにもあうが、その経験は周囲の日本人児童にとっては想像もできず、自分と無関係の出来事として、排除される。Mさんは、就活の時に「帰化した外国人」という理由で希望の職種を断られ、異議を申し立てるが受け入れられない。このことは、仕事の可能性を失うことだけでなく、自己を否定されたような悔しさと絶望感をもたらした。その痛み現実とは、相手にとっては現実ではなく、蔑ろにされた。

一方で、Nさんの高校の同級生たちのように、他者の経験を“経験”そのものとして受け入れ、好意的な関心を示す態度は、人を飛躍させる。Nさんにとって、カンボジア人として、外国人として、難民としての経験は、その他の多様な経験の一部であって全てではない。同級生たちはNさんの好きなことや将来の夢についても関心を寄せたことだろう。Nさんの経験を序列化したり、分類したりせずに、そのままを受け入れる背景には、Nさんと同じように異質性によって排除された経験を持つ者として自分の経験が理解されず、受け入れられない痛みを知っているからであり、他者の苦難に対する感性と能力も持っていたからであろう。こうした共感的な環境の中で、Nさんは自分の経験を安心して話すことができた。Nさんはかつて透明人間として、沈黙を守ってきた。しかし、その沈黙は自らの選択というより、せざるを得なかった選択だ。壁が取れて、自分の経験が受け入れられるとわかった時、*〈自分は話してもいいんだ。自分の経験を話すことで、みんなが理解して、受け入れてくれるんだってことがわかってきて、話せるようになりました〉*と語るように、高校のクラスは安心して人と話せる場所＝「居場所」（メッシュワーク）となった。これは、経験の共有にとって重要な条件である。

経験の共有は一つの能力であり、訓練が必要である。Nさんは語ることに共に、聴くことの大切さも語っている。例えば、あるカンボジア人女性が仕事と子育ての両立の経験を語る時、ちょうど子育ての時期にあったNさんは自分の状況と重ねあわせて聴き、深く共感したという。語り手は聞き手の真摯な関心を実感することで、聞き手は語り手の経験を尊重することによって「語る-聴く」という行為は可能となる。人々は、昔から口から口へと語り伝えることを通して、自ずと語り方や聴き方を学んできた。これがベンヤミンのいう経験の交換能力である（ベンヤミン1997）。経験の交換・共有には身体的な温もりがあり、そこではAIのようなテクノロジーではできない手仕事の、情動的な感覚を通した訓練の様式がある。

経験を共有することは、言葉を使う行為である。Nさんは、専門学校の教師に「(略) あなたは

日本人にない良いものを持っている。辛いこともあるだろうけれど、その辛さを経験したからこそわかったことを大切に（略）」と言われ、その言葉に勇気づけられた。教師からの貴重な助言として受け止めた言葉であるが、この言葉が意味することは、すでにNさん中で育まれていた。かつて「難民」という言葉を男子児童から投げられた時、一緒にいたカンボジアの少女の痛みをNさんは深い思いを寄せている。つまり、他者の痛みへの共感である。言葉は、人を抑圧する道具としても、また人を癒し励ます道具としても用いられるが、経験の言葉は後者である。教師はNさんの過去の経験を知り、まず自分の中に落とし込んでから自身の言葉として発したから、Nさんの心に響いたのであろう。Nさんの内側に入って、Nさんの経験を自分の経験として感じとった教師のフィルターを通過した言葉は、Nさんのかつての経験を価値あるものとして再生させた。そこに言葉の力が宿っている。ベンヤミンは、真の経験は精神的な富を増すものであり、精神的内容の伝達は（広い意味での）言葉において（よってではない）行われると述べる（ベンヤミン 1995）。出来事という具体的な事象に意味を与えて経験とし、さらに抽象的な言葉にまとめたものが知恵や教訓と呼ばれるものであるなら、言葉は他者と共有されてこそ生きてくる。

経験の共有には、「語る-聴く」という能力に加えてもう一つの能力が必要である。それは想像力である。インゴルドは、真なる知識は経験と想像力から生まれると述べる（インゴルド 2020）。物語が経験の総体である時、語られなかった経験というミッシングリンクを補うものは想像力である。また他者の経験を自分の経験に落とし込んでいくときの橋渡しも想像力である。そして、想像力もまた訓練が必要であり、それは経験によって始まる。経験と想像力は一体であり、物語には両方が必要であり、それは知恵の源となる。

4-4-5 経験と他者との絡みあい

上述した専門学校の教師からの言葉がNさんの心に響いたのは言葉の内容からだけではなかったろう。そこには、教師との信頼関係によって醸し出された雰囲気がある。教師はNさんを毎日注意深く見守り、Nさんは日々の教師の態度からその誠実さを感じ取っていたであろう。このような配慮と尊敬の関係が、Nさんの心を動かす背景にあったと考えられる。双方が真剣に相手に向きあい、存在を認め合うことから生まれる関係（絡みあい）は、言語化する以前の言葉にならない情動による。

「絡み合い」の関係は経験の共有を可能にする。それは、受け取る側にとっては他者の経験を自分の経験として取り込むことであり、伝える側にとっては出来事の意味づけを深め、新しい発見の契機となる。Nさんと親しい関係にあったブラジル人の同級生は、文化祭でカンボジア料理の企画を協力するにあたり、実際にカンボジアの衣装を着て、その感触を味わった。そのブラジル人は、自分の新たな経験としてカンボジアの文化や世界観を知ることになったであろうし、N

さんはその友人と協力して企画を成功させたことで、他者と文化を共有することの意味を学ぶ契機となったであろう。このような経験の共有が可能となった背景には、クラスの中で醸成されていた生徒同士の対等で親密な関係の集合体(メッシュワーク)という環境がある。経験の共有は、具体的なモノやコトを媒介にしているとしても、その内実は「尊重するーされる」という個人や社会の関係の中で実現し、そしてそのような他者との関係を構築する糧となる。このことは、先行研究で紹介したコリアン第二世代の「生活文化の継承」の核心でもあった。

語り手と聞き手の関係性は経験の共有にとって重要な条件であるが、その関係自体が経験でもある。ただし、関係という経験は言葉にはならないことが多いため見落とされがちである。例えば、Nさんは難民キャンプの生活をかけがえのない日々として記憶しているが、その内実は言葉で明示されていない。それは散歩するときに繋がれた親の温かな手の温もり、あるいは危険が迫ってきた時にギュッと握られた手の痛みなどの感触として、生の潜在性として身体に刻み込まれているのだろう。Mさんは父親のいなかった幼少時にも寂しさを感じたことはなかったというが、それは母親の仕事を手伝ったり、祖父に勉強を見てもらったり、近所の子どもと遊んだりといった日々の和やかな営みによってであろう。それらは特別なことでも一回限りのことでもないから、日常化して特に意識されることはない。だからといって重要でないのではなく、当たり前だからこそ、経験の深層となる。これが、生活を通して経験する他者との関係性(絡みあい)の内実であろう。

安心や信頼、尊敬、あるいは不信や敵対といった抽象的な言葉で表現される他者との関係性は、上記のような生活世界の中で感じる「肌触り」のようなものである。1.5世が幼少期に獲得した「自分は大切にされる」「他者は信頼できる」「自分は世界の中で生きていける」といった世界観は、そのような「肌触り」によって生まれたのだろう。「肌触り」は身体に埋め込まれて、経験を包み込み、それぞれの経験に独自の彩りを与える。

NさんやMさんが子どもたちに伝えたい経験とは、そのような言葉にならない「肌触り」を含んだ総体である。Nさんは「日本人とカンボジア人の良い点を知って欲しい」、Mさんは「カンボジア人であることを忘れてほしくない」と語るが、それを単なる民族的アイデンティティのあり方として捉えてはならないだろう。「より良く生きてほしい」という願いの表現として捉え、その背景にある「肌触り」を探ることで、本来持っている意味を捉えることができる。NさんもMさんも、日々の営みの中で子どもへの関心と配慮をさまざまな形で示し、子どもはそれらを肌感覚で受け取り、親への信頼や尊敬を育んでいる。これらのコミュニケーションを子どもたちは、意識し言語化しているわけではないだろうが、確実に身体化し受け継がれていくものだ。そのような関係性の中で発せられる言葉として上記の言葉を理解することが重要である。言葉は関係という言葉にならない経験の中で生きている。これが経験の総体を継承することであり、経験を共

有することではないだろうか。

4-4-6 経験と歴史

経験を継承すること＝自己の物語を語り伝えることは、歴史を作ることである。移民1世と日本生まれの2世の間に位置する1.5世にとって、「日本に根付き、世代を紡ぐ」という言葉は、自分や家族の歴史（祖先からの歴史、そして移民としての歴史）を忘却せずに日本でより良く生きていくことであり、そして子孫にいのちの糧としての物語を繋いでいくことである。

Nさんは、子どもたちに〈難民として日本にきたことを話していきます。そして、日本とカンボジアの良い点を知ってほしい（中略）私はその挟間にいたので・・・〉と語り、Mさんは〈カンボジア人であることを忘れないでほしい（中略）そして、日本の社会の中での自分の役割を考えて担ってほしい〉と語る。Mさんが語るように、子どもたちはすでに日本の文化に馴染み、日本で生きていくことを前提としている。その子どもたちに、祖先がどのような場所でどのような文化の中で生きてきたか、自分たちはその祖先の地から日本という地になぜ、どのような経過をたどって来たのかという歴史を伝え、そして異なる文化の中を生きぬいて今がある現在の自分と子どもたちの存在についての物語を伝える。これは、次世代がより良く生きていくための過去と未来をつなぐ経験の継承であり、世代の異なる他者との経験の共有である。

ベンヤミンは「経験と貧困」のエッセイにおいて、経験を語り伝えるという伝統の衰退は、情報技術の発達によると指摘するが（ベンヤミン 1994）、それだけでなくトラウマ的な経験は当事者にとって語りにくく、継承の困難な経験である。では、その語りにくい経験はどのように記憶され、継承が可能となるのであろうか。例えば、Nさんはカンボジアの内戦やクメール・ルージュ時代について、当事者である両親から聞くことはあまりなく、また強いてその詳細を聞くことはしなかった。それは、両親の感情や状況を思い量ってのことだったろう。したがって、当時の出来事についての知識やイメージは、そのほとんどがマスメディアからの一方的な情報によるものだった。しかし、あるイベント（カンボジアの歴史を記憶する写真展のシンポジウム）で、親以外の1世たちの生の体験を聞く機会があり、あらためて祖国で何が起きたかについて、これまで知らなかった事実や背景を知り、もっと知りたい、そして次世代に伝えていきたいと思ったという。メディアによって構築される大きな歴史は、個人の小さな歴史を無視する。しかし、生身の人間の経験を聞くことで、聞き手の中に新たな経験が生まれ、そして自分の人生と深く関連する生きた歴史として共同体の歴史が生成されていく。

Nさんの祖国の歴史への向かい方への転換は、上述した先行研究の移民第二世代による「記憶の継承」の事例と重なる。ユダヤ系移民1.5世のホフマンは親から伝え聞く経験をそのまま受け取るのではなく、直接に体験はしていないが自分の人生に大きな影響を及ぼしたホロコーストを

自分の経験として取り込むためにさまざまな場所に赴き、さまざまな人の話を聞き、悲劇の歴史としてではなく、他者との和解・共生への道として新たに意味づけていく。ホフマンは、さらにこの経験を他の虐殺の出来事、例えばカンボジアのポルポト政権下の出来事とも関連づけ、平和へ向かうための普遍的な学びとして位置付ける。ホフマンの事例は、カンボジア人 1.5 世にとって自身の祖国の出来事をどのように継承するかについての重要な示唆を提供する。

ベンヤミンは経験の貧困化を指摘したが、同時に大きな歴史に裂け目を入れ、新しい歴史を構成する「真の経験」の可能性を示唆した（ベンヤミン 1994）。ホフマンの経験やカンボジア人 1.5 世の経験は、新しい歴史を構成する重要な要素になり得るだろう。

4-5 小括：応答プロセス

本章は、在日カンボジア人 1.5 世が自分の経験を子どもに伝えたいという思いはどのように形成されたのかという問いに始まり、そこに至るプロセスを描き、「経験の継承」の意味と意義について考察することを目的として論を進めた。

1.5 世の「経験の継承」の意味は、それまで生きてきた自己の物語を伝えることにあった。自己の物語は断片的な経験をつなぎ合わせた単なるストーリーではなく、また単なる積み重ねでもない。それは経験の総体であり、ある経験が次の経験を呼び込むように連続し交差し、またある経験が異なる状況の中で新しい経験となり、新しい自己や新しい視点を生み出すように連動する。経験＝自己の物語は、周囲の環境変化とともに新しい知を獲得し、成長する生きものである。

文化の挟間、世代の挟間という立場にある 1.5 世の自己物語は多様であり、生まれ育った地域や状況、来日の年齢や背景、日本に移住してからの生活環境などによって異なる。しかし、次世代への「経験の継承」に関心を寄せる 1.5 世たちに共通点がある。それは、幼少期にその物理的環境が厳しい状況にあっても豊かな人間関係を体験し、「自己の肯定」、「他者への信頼」、「生きることへの希望」という生の基本姿勢を身体化し、その後の移動によって生じる異なる言語や文化との緊張状況において、たとえ自己の否定、他者への不信、生きることへの不安が生じて、それらの試練を意味づけ（経験化）、他者の経験を共有し、新たな自己の生成に結びつけるなかで、進むべき方向が自ずと定まっていくという生の流れ＝応答プロセスを生きていることである。

「経験の継承」への志向は、自分に集中していた関心が他者への関心と向いていく成長の過程である。最大の動機は、自分が経験した痛みや困難を子どもたちには味合わせたくない、より良い未来を生きてほしいという願いである。その願いを意識化し、言語化し、知恵として他者に語り伝えることが「経験の継承」の意味である。しかし、「経験の継承」には言葉によって語られない生の潜在性としての経験も含まれる。そのひとつは日々の営みを通して知覚された他者との

絡みあい関係である。信頼や尊敬、安心といった抽象的な言葉で表現される他者との関係性は生活世界での「肌触り」のような経験であり、生の地層とも言える。これらを含めて経験の総体を伝えることが「経験の継承」の意義である。

「経験の継承」は歴史を構成する。1.5世にとって、祖国から日本に移動し、異文化社会の中で生きぬき、現在の自分と子どもたちが存在することを伝えていくことは、自身の生きた証であり、同時に次世代がより良く生きていくための準備行為である。それは自ずと過去と現在を結びつけ、自己と他者と結びつける歴史の構成となる。

1.5世は、異他なるもの（自己の外部にあり、自己とは同一化しない存在）との出会いを通して自己を変革し、国境や民族というカテゴリー、日本人と外国人という二項対立、マジョリティによる序列化という枠から抜け出し、多様な他者とともに生きる新しい地平を見出した。これが、「経験の継承」を通した「応答プロセス」の実践であり、この新しい地平への希望が、次世代に経験を継承していきたいという願いの源泉である。

第5章 モノとともに生きる在日カンボジア人

本章は、在日カンボジア人が過去の記憶をモノとともにどのように現在に呼び戻して生きているかについて、そのライフストーリーを通して描き、考察する。ライフストーリーに入る前に、問題関心、目的、方法、そして「モノの力と媒介作用」という本章で用いる概念を紹介する。

5-1 問題関心、目的、方法

本章の目的は、在日カンボジア人がモノという非人間である異質な他者とともに生きることの意味とその関係のあり方を探るものである。

第3章と第4章で筆者は、在日カンボジア難民1.5世のライフストーリーを通して、彼/彼女らが異文化社会のなかで不確定な状況を生き抜き、新しい地平を開いてきた経験と知恵を明らかにしてきた(濱野 2022、2023)。幼少時に日本に移住し、言語や生活習慣の異なる社会で国籍や民族の異なる他者とともに困難を乗り越え、今や新しい家族を持って社会で活躍している1.5世たちから、「異質な他者とともに生きる」という「応答プロセス」の生き方を学んだ。

上述の「異質な他者」は人間を指していた。しかし、人間は人間とだけつながって生きているのではない。他の生物や無生物、さらには人間が作った人工物なども含め世界の全ての存在とともに生きている。筆者がこのことに気づいた時期に、国内外のカンボジア人1.5世が中心となって、モノを通して祖国の歴史を次世代に継承していくための写真展⁵³が開催された。それは親世代である1世が語りにくいクメール・ルージュ時代の過酷な体験の記憶を、モノを通して語ってもらおうという趣旨である。そのモノを撮った写真展では、体験の当事者である鑑賞者が過去の出来事を思い出したり、直接に体験をしていない人がその歴史的出来事を自分の経験として受け止めたりする様子が見られ、モノが人を動かす力や生きる力となることが見てとれた。このような中で、人とモノとの関係に関心を持つようになった。

本章は、その写真展で紹介された二人の在日カンボジア人のライフストーリーを通して、モノは生きる上でどのような役割を果たしているのか、人とモノはどのような関係にあるのかを描く。そのための方法は、対話構築的インタビューと、関連するイベントでの参与観察、並びに文献・資料による。インタビューは日本語で行い、日時や状況についてはそれぞれの項に示す。

なお、本稿で用いる「モノ」という言葉の使い方について若干の説明をする。国語辞典によると、「物」は目にみえる物質、「もの」は抽象的な事柄を含む(例：冷たいもの)、「モノ」はその

⁵³ 写真家キムハック(カンボジア人)は、2014年から「Alive 生きる」というテーマで、各国に離散しているカンボジア難民の「モノ」にまつわる写真制作を始めた。その写真展を2019年にニュージーランドで、2022年8月と9月、そして2023年6月と7月に日本で開催し、2023年8月には「生きるールネッサンス」と題してカンボジアで開催した。

他の意味も含む（例：経営学におけるサービスや情報のこと）とされ、また「モノ」はミクロなレベルからマクロなレベルまでを含む広範囲な使われ方をする。以上の理由から、本稿では、世界を構成するすべての存在者を基本的に「モノ」と呼ぶ。それゆえに、人間も「モノ」である。ただし、本稿で「人とモノ」と表記する場合、それは、「人間というモノと非人間のモノ」という意味である。また一般的なイメージの「モノ」は目に見える形のある存在であるが、本稿では「モノ」を現象学的な意味として用いるため、言葉や音楽など目には見えないが人間が知覚する存在も「モノ」に含む。同様に一般的には人間に用いる「身体」という言葉も現象学的な意味として用いるため、本稿では「モノ」に対しても「身体」という言葉を用いる。

5-2 モノの力、媒介作用

ティム・インゴルドは、モノが生きているとは、モノが初めからいのちを所有しているのではなく、モノが「いのち」の中にあるときに「生きている」のだと述べる（インゴルド 2020）。それは世界の形成過程であり、「応答プロセス」である。以下で、インゴルドのモノについての思想と、それと親和性のあるジェーン・ベネットによるモノの概念を参照して、モノの力とその媒介作用について検討する。

5-2-1 モノの力

「モノは生きている」ということを、インゴルドは「オブジワの生きている石」の事例から読み解く（インゴルド 2020：24-28）。人類学者の A・アーヴィング・ハロウェルはカナダの先住民であるオブジワのコミュニティーに入って、「石」が生きた存在としてとらえられていることを知り、長老に「私たちが見ている石はすべて生きているのだろうか」と尋ねる。長老は、「いいや、でも生きているのもある」と答える。これをどう理解したらよいのか。一つには、それを信仰とする見方である。石が動かないことは知っていても、そのように信じる儀礼的態度である。もう一つは、人々は実際に石に呼びかけられる経験をしたのではないかということである。石は川や海の流れとともに波に乗り、崖の斜面を転がり落ち、他の石とぶつかり音を出す。その音に気がついた人間は、石に呼びかけられたように感じて、拾って家に持ち帰る。石はさまざまな他者と出会い、出来事を生み出す。石は注意を向けられ、その存在を認識されることによって生きた石となる。インゴルドは、「生きている石」とは単なる信仰や空想によってではなく、実際の経験に基づいて生成する現象なのである。モノは流れ、応答し、出来事を生成し、生きている（インゴルド 2021：75）。つまり、石は生の流れの中にある時にいのち⁵⁴を持つのである。

⁵⁴ ここで言う「いのち」とは、霊魂のようなことではなく、物質の循環とエネルギーの流れという見えない力である（インゴルド 2021：30）。つまり、循環せずに固定化され、エネルギー

政治思想家のジェーン・ベネットは、上述の「生きた石」の見方と親和性のある「震える物質 vibrant matter」という概念を提唱する。ベネットは、人間を能動的で活発な生きる存在とし、一方で物質を不活性な受動的なものとする見方に異を唱え、物質は生きている震える存在であると主張する（ベネット 2024：14）。物質は他の個体に働きかけ、出来事を生成させるとする。たとえばミミズは葉を食べ、土の中で糞を出し、その微生物が有機物を分解し、それを植物は栄養源として成長し、それを人間食べ、身体に入って、他の物質に形を変え、吸収されて、新たな生を育んでいく。ここに、多様な存在者たちの循環する生命の循環がある。この考えはアンリ・ベルクソンの生物における自発的な力が発動する「生の躍動」に依拠している（ベネット 2024:165）。また、ベネットは政治学者としての立場から、物質を活力ある存在として捉えることによって公共問題への対策を考える。例えば「ゴミ」を活力もつ物質として捉えることで、消費のパターンや流通システムが変わる。ベネットは物質を生きた存在とすることで、人間が物質を支配する仕組みを変え、対等な存在としての関係ができると主張する（ベネット 2024：15-17）。

ベネットは、さらにモノとモノがつながり形成される集合体としての生命について論じる。ベネットはスピノザの「合一的個体」とドウルーズとガタリの「アレンジメント」の概念を援用する。スピノザによると、諸物体は他の物体と接触し、反響し合い、合体し、新しい合一的個体を生み出す。個は自分を維持するために努力する。これが「コナトゥス」である。自分を維持するということは他者とのつながりを維持することである。コナトゥスによってつながる異質な物体が形成する集合体が「アセンブリッジ」である。アセンブリッジはそれ自体が常に生まれ変わっている（ベネット 2024：69-74）。これが、アセンブリッジという関係の集合体が生命体として生きていることである。このアセンブリッジは、インゴルドの「メッシュワーク」と重なる概念である。

5-2-2 モノの媒介作用

ベネットは物質の媒介者としての役割を重視する。それは異質な物質同士が協働・協力し、相互に介入してさまざまな出来事を生じさせる。それがアセンブリッジに勢いをつける（ベネット 2024:69）。ある物質とある物質のつながりによってさまざまな変化や効果が生み出されていく、これが媒介作用である。小さな媒介作用の効果は、累積されて大きな効果を生み出す。あたかも小さなミミズが世界を作るようである。ではアセンブリッジに勢いを与えるという媒介作用とは具体的にどのようなものなのか。

モノの媒介作用は、意志をもつ生きた行為であるという（ベネット 2024：75）。ベネットは、停電を例にとり説明する。停電は、多様なモノと人間の複雑な関係の交差＝アサンブリッジによ

の流れが止まって動かないモノは「いのち」を持つとは言えない。

って起こるのであって、特定の単独の要因・媒介者によるのではない。停電は、人間とモノとの絡まり合った間主観的な関係から引き起こされるのである（ベネット 2024：75-85）。

本章では、モノが媒介する出来事として「語りにくい記憶の想起」について検討していく。それは本章の冒頭で述べたように、在日カンボジア人がモノを通して過去の語りにくい出来事の記憶を語ることと関連するからである。

岩谷彩子は、ユダヤとジプシーというホロコーストの悲劇の記憶を抱える人々の記憶のあり方を想起の媒体としてのモノに注目して検討を行っている。想起の発現は、媒体であるモノの性質と社会環境によるという。また媒体となるモノは一つではなく複数が交差しているという（岩谷 2018）。岩谷の論考では、モノが記憶を想起させることで人間の主体形成が促進され、それによって想起された記憶を他者と共有することで共同体を形成するという。これは人間とモノの間主観的な関係を基盤としたモノの媒介作用というベネットの考えに通じる。

もう一つの「モノの媒介作用」に関連した事例は、モノの情動作用に関する研究である。西井涼子は、タイの農村でかつて同居していたあるタイ女性の誕生から亡くなるまでの人生を、西井自身や周囲の人々の女性にまつわる記憶をもとにして物語として構成した（西井 2020）。この記憶の媒体は、女性が大事にしていた“家”である。家をめぐってさまざまな出来事が起こり、その断片的な事象を組み合わせると、そこに女性の人生が浮かび上がり、生の軌跡として可視化される。物語となった女性の人生には、それまでは目には見えなかった複雑な出来事の交叉があり、意図せずにつながった人々の関係があり、そこから新たな出来事が生成していくという情動的な「生の潜在性」示される（西井 2020）。この事例では家というモノが、この女性と周囲の人や他のモノを集め「アセンブリッジ」が形成され、さらにそれが生きている人々の新しい行動を促していくことが具体的に示されている。ここには、家を媒体として想起される記憶の力が示されている。

インゴルドは記憶の働きを過去の生の線を辿りなおし、未来へ進むための意識の導き手として捉え、記憶を過去に封じ込めることに強く反対する（インゴルド 2017:169）。これは生の軌跡という未完の物語としての歴史観でもある。モノの媒介作用は、記憶の想起を通して歴史の構成に参加していく。

5-3 在日カンボジア人のライフストーリー

以下で紹介する二人の在日カンボジア人は、それぞれが「Alive」という写真展の写真家・企画者から声をかけられ、それまで自分の中にだけあったモノとの関係、あるいは意識されずにいたモノへの思いを、写真展を機に想起し、それを公開した人である。

5-3-1 Sさんのライフストーリー:絵画と対話

Sさんとは同年7月の写真展で出会い、展示された写真に感動した筆者がインタビューを申し込み、2023年10月31日に新宿のカフェで約3時間のインタビューを行なった。使用言語は、日本語である。

Sさんの生い立ち

Sさんは、1952年にコンポンチュナン州コンポントラーチ（瓜の村：プノンペンから約60キロ）で誕生し、2歳の時に母の妹（叔母）夫婦へ養子に出された。Sさんには実の弟がいたが、弟は母のもとに置かれ、Sさんは養子先である叔母の家に移った。それは生家と同じ村にあったが場所は異なる農村地域にあった。この村は伝統的なゴザ製品⁵⁵の生産地で、養母はこのゴザ製品や村で作られた染織物などを自宅兼店舗で販売していた。養父は、家に設置されたアトリエで金銀を細工しその加工品を母の店に置いていたが、田舎ということもありあまり売れなかった。養父母はともに忙しく働き、Sさんを細やかに世話する余裕はなく、Sさんは比較的自由に放任されて育った。Sさんはこの村の小学校に入学し1年生まで在籍した。

養父母は商売があまり繁盛せず、また人間関係の問題からコンポントラーチ村を離れることを決めた。Sさんは養父母とともにプノンペンに移動し、最終的に賃借アパートに落ち着いた。その後、小学校2年から中学、高校、そして日本に留学するまでプノンペンで暮らしたが、プノンペンでの生活は決して落ち着いた平穏なものではなかった。家の経済状況は厳しく、Sさんは幼い時から家の商売を手伝い、また隣のシクロを借りて運転手をしたり、港の荷の積み下ろしや駄菓子屋の移動販売をしたりして、お金を稼いだ。学校では一生懸命に勉強をして優秀な成績を取った。Sさんは中学生になると塾に行けない同級生に勉強を教えたり、宿題を手伝ったりして、そのお礼をもらった。中学・高校時代には、自宅にいても落ち着いて勉強のできる環境にないので、学校の倉庫、友人の家、お寺などを転々とした。このように住まいが安定せず移動を重ねる中で、持ち物は全て身につける習慣がついたという。

干渉や保護の少ない生活環境は、Sさんを自立的な人間へと育てた。Sさんは幼い頃から自分の生活を取り仕切り、自分の生活スタイルを身につける能力を養った。あるいは身に着けざるを得なかったと言ってもいいかもしれない。ただ、このような状況はSさんに限ったことではなく、1960年代当時のカンボジアの貧しい家の子どもの間では一般的な生活スタイルでもあった。

55 ゴザの素材となるイグサは、メコン流域のバサック川沿いにある生産地から、季節によって川の流れが上流に逆流する自然生態系を利用し、船でトンレ・サープ湖まで運ばれ、そこから各地へ運ばれる。このエコロジカルなシステムは人々の生活を支えているが、近年の開発事業の影響でこのシステムが破壊されていくことが懸念され、Sさんもその行方を心配している。

高校を卒業し大学進学を考えた S さんは、偶然に日本への国費留学制度を知り、応募して合格した。そして、1972 年 20 歳の時に来日し、1 年間の日本語研修後に大学に入学し、その後大学院に進学し、1982 年に博士課程を修了、1983 年に日本の企業に就職した。この間に、日本人女性と結婚した。

S さんの実母との関係

S さんは、夏休みなどに一人で実母のいる生家へ遊びに行くこともあった。しかし、それは実母に会いに行くというよりも遊びの範疇であり、実母との間に親密な関係を構築するようなものではなかった。実母との関係は疎遠なままで、S さんは成長した。S さんが 1972 年に 20 歳で日本に行くとき、養親や実の父は空港まで見送りに来たが、実母は姿を見せなかった。そして、翌年 1973 年に S さんがカンボジアに一時帰国した時に、実母と会う機会があったが、この時も言葉を交わすことなく、すれ違い際に一瞬目があっただけだったという。この時が、実母と会った最後の時となった。このような冷淡に見える母について、S さんは以下のように振り返る。

(空港に) 見送りに来なかったのも何か理由があったのでしょう。実の母は破天荒な遊び人で、家に腰を落ち着けるような人ではなく、母親としての資格はなかったのです。別に彼女を憎んでいるわけではないのです。今は、成長した私を見守ってくれているように感じます。もし実の母のもとで育っていたら、今のような自分はありません。だから、実の母にそれで (養子に出してくれて) よかったと伝えたい。

S さんの複雑な心の中が現れる語りである。ある意味では否定的なイメージと映る母親像とそれと距離をとって肯定的に捉え直す S さんの視点が同時に存在している。そして、そのような母親像を持った S さんにとって、母親がどのような人であれ、その存在の欠落は S さんの心の中の空洞、裂け目となっている。

育ててくれた母の写真は持っていますが、実の母の写真は一枚も持っていないくて、それがやはり悔しくて、写真一枚でもあればいいのにね。自分の人生において、母の写真くらいあってもいいではないですか。それは一つのルーツとして、自分の心の穴、空洞みたいなものを満たすことかもしれません。(中略) 安心感ですね。自分の中の隙間にたたみ込まれるような感じです。

実母の写真が欲しいという気持ちは、単なる思い出というだけでなく、母が存在したという証

明であると同時に、それは S さんの存在証明ともなる。「心の隙間にたたみ込まれるよう」であるということは、身体の壁に刻みこまれ、表には出ないが S さんの実在を確かなものにする感覚であろう。それは、言葉以前、意識以前の情動であろう。この隙間を埋めるために、写真に代わるものとしての絵画との出会いがある。

S さんと絵画との出会い

1972 年に国費留学生として日本に来た S さんは、学業を終えた後は帰国するつもりでいた。しかし、1975 年 4 月のポルポト政権樹立によって帰国できなくなった。この時、S さんが来日時に用いた前政権が発行したパスポートは無効になり、無国籍となった。日本では本国と違って身の安全は保障されたが、国籍を持たない状況は移動や仕事の自由を奪った。そして、S さんにとって何よりも辛かったことは、カンボジアの状況について全くわからないまま、家族や知人との連絡が途絶えたことであった。個人ではどうすることもできないこの状況に S さんは不安と無力感を覚えるばかりだった。〈(カンボジアへ) 行くこともできない、手紙も届かない、無力感です〉この無力感というネガティブな感情は、同時に自分の限界を認識して危機を乗り越える契機ともなるのだが、それはすぐには起こらない。S さんはこの間に日本人と結婚し、大きな心の支えを得た。

1979 年 12 月にポルポト政権が崩壊し新政権が樹立した直後、S さんの妻はある日本人ジャーナリストとともにカンボジア国内を訪問する機会を得た。訪れたカンボジアで見たものは、ベトナム戦争とポルポト政権によって破壊され尽くした国土、それによって厳しい生活を強いられた人々の姿だった。美術大学を出たばかりの若い画家である S さんの妻はその強烈な印象を帰国後に絵画として表現した。絵画のモチーフは、クロマー（カンボジアの伝統的スカーフ）を頭にまいた若い女性が朝市の路上で野菜を並べて売っている姿である。それはカンボジアという国の悲劇を一身に負いながらその日を懸命に生きる農村女性の姿であり、カンボジアという国の過酷な運命と強さを象徴している。〈犠牲になっている女性や子どもの姿に（妻は）心を動かされて、その象徴としてこの女性を描いたのです〉これがオリジナルの絵画である。オリジナルという意味は、S さんが持っている絵画はこの作品の「レプリカ」⁵⁶であるからだ。

このオリジナルの絵画はその後ある展覧会に出品され、高い評価を受けて 1981 年に美術館に買い取られていった。画家である妻も S さんも手放したくはなかったが、まだ新人の画家である妻にとって名誉なことでもあり、将来への可能性や経済的事情を考えて譲ることにした。〈彼女はその後ずっと難民の絵を描いて、10 年間くらい展覧会を各地で行い、新聞にも出ました。絵

⁵⁶ S さんは二つ目の絵画を「レプリカ」と呼ぶので本稿ではレプリカと称する。

葉書を作って、募金活動もしました」というように、絵に託した想いは続く。

オリジナルの絵画は、画家とSさんの手から離れていった。しかし、Sさんはこの絵に深く心を惹きつけられた。それは実母への思いを呼び起こしたからである。絵画を手元に置きたいと願った。そして妻に同じモチーフの絵（レプリカ）を作って欲しいと頼んだ。〈その絵から、母の思い出が蘇ってくるようで、写真の代わりに描いてくれないかって頼んだのです〉。妻はその後5年をかけて描き、1995年に「レプリカ」の絵を完成させた。このレプリカは、オリジナルの絵画と同じ女性の同じポーズを描いているが、その女性像は実母のイメージとは大きく異なる。なぜ、Sさんは実母像に近いモダンな女性像ではなく、農村の素朴な女性像のままで描いて欲しいと頼んだのだろうか。

このような座り方は、日本ではありえないでしょう。でもカンボジアでは典型的な座り方です。実母を思い出するためだったら、その人物の実像に似せて描くのが普通ではないですか。でもそうではなくて、なぜこのポーズを選んで描いてもらったか。普通は自分の実母をこのような惨めなイメージで描くのは嫌じゃないですか。それは日本人には考えられないことでしょう。（中略）これは、母のイメージではなく、カンボジアの女性のイメージなのです。カンボジアのアイデンティティなのです。このポーズで、どこの国の人かが想像できるわけです。

Sさんのこの語りから、実母への思いとカンボジアへの思いという二重の意味が読み取れる。加えてSさんは「日本では考えられないでしょう」と日本と比較することで、カンボジアと日本という二つの異なる文化の挟間にいる自分の立場、それによって生じる異文化社会におけるアイデンティティのギャップが反映されているとも解釈できる。つまり、この絵の中には、Sさんにとって現在の自分を成立させている3つの大きな関係の要素が含まれている。第一に実母との関係、第二にカンボジアという母国との関係、そして日本という異文化社会との関係である。それらが絵画の中に複合的に存在し、一つとなって複合的にSさんの前に現れ出てくるのである。

3つの要素においてSさんはそれぞれに空洞や隙間があり、また3つの要素間の分離がアイデンティティの揺らぎにつながる。それらの隙間を埋めて、つなぎ合わせ、調和させる媒体としての絵画の存在が見えてくる。このことをSさんは最初から意図していたわけでないが、単なる偶然とも言えない。何がSさんの前に「現れ」でて、Sさんを「衝き動かした」のか。それは絵の中に最初からあったのではなく、長い時間をかけ、Sさんと絵画の間で構築されたある関係性であろう。その結果として、〈この絵は、私の心の隙間を埋めてくれたのです〉と語り、そして〈どこに行くにしても、この絵は持っています〉という絵画への思いが生まれてきたのだろう。

対話と想像の力

Sさんの心の隙間を埋め、離れがたい存在となった絵画について、筆者は「Sさんにとって絵画はどのようなものですか？」と尋ねた。

対話です。絵を通して（母に）いろいろ聞きたかったことを聞いています。なぜ、私を養子に出したのか、いまだにわからない。誰に聞いてもわからない。別に彼女を憎んでいるわけではないのです。幸いにこの絵のおかげで、（母が）成長した私を見守ってくれているように感じるからです。

さらに、このようにも語る。

（母のことを）いろいろと想像します。シナリオや小説が書けるくらいです。たくさんのストーリーがあって、映画にしたり劇にしたりしたいくらいです。（中略）でも、ある程度は事実としての確信があった方がいいから色々な人に聞いたり、彼女の性格や社会情勢を考えたりしています。（中略）わかっていることと僕の想像とを繋ぎ合わせているのでパッチワークみたいで、全部を埋め尽くせるわけではないのですが・・・。

Sさんは絵画を通して母と対話し、母を想像する。対話の中で聞こえてくる声は実体としての母の声ではないが、Sさんの心の内に響く「現実の声」である。それは単なる空想ではなく、Sさんの実際の経験や記憶に根ざしている。Sさんは母のことをいろいろな人から聞いて情報を得、母の性格や当時の社会状況を踏まえて、その生き方を想定する。しかし、それらは断片的なものなのでストーリーとして組み立てるためには、その隙間を埋める想像力が必要となる。想像するイメージは一つでなく複数が可能であり、それによって具体的なストーリーの選択肢を広げられる。同時に、自省を通して抽象的な概念へと向かわせる契機ともなる。これが想像の力である。

実の父の消息はわかって、お墓もわかっているのですが、実の母のことはわからない。母と一緒にいた弟もわからない。それは、辛いです。そうになると、想像の世界です。それは、彼女に向かってではなくて、自分に向かって聞いていくということなのです。

最近になって養母や実父の消息についてわかってきたという⁵⁷。しかし、実母の消息について

⁵⁷ 養母はポルボト時代に病死したことがわかり、実の父についてもお墓を見つけ 2000 年に法事

は全くわからず、想像するしかない。それは、自分に向かって聞くことだという。対話と想像は一心同体である。想像は孤独な作業ではなく、他者との共同作業である。現実と違って、想像力によって構成される物語は一つとは限らず、幾つもののバージョンが可能である。想像力は、現実の拘束から自由になり、新しい地平に立つことを可能にする。Sさんは母との関係を通して自分を否定するのではなく、自分を肯定し、現在ある自分を母に伝えたいという気持ちになる。そして母が自分の成長を見守っているように感じる。これは、Sさんにとって、そして実母にとっての新しい地平であろう。さらに、想像力は複雑な現実世界の出来事を抽象化してその核心を明らかにすることを可能にする。Sさんは、母が自分を養子に出したことを単なる個人的な出来事に回収せずに、より広い歴史的文脈として捉えようとする。対話と想像を通して構成される物語は、Sさんを新たな地平へと導いていくのである。

世界へ開かれる回路

対話と想像を可能にしたSさんと絵画との関係は、一夜にして構築されたのではなく、長くゆっくりした時間の中で醸成されていった。その間、Sさんと絵画の世界は閉じられ、その中で自己完結していた。しかし、写真展「Alive」を契機に外の世界に開かれていく。

友達が家に来てこの絵を見てすぐにカンボジアの女性の絵ということはわかるでしょうが、それ以上のことを私が説明することはなかったですし、外にオープンにすることもなく、公表したのは今回の写真展が初めてです。

2023年8月に横浜で開催された写真展「Alive 生きる」は、クメール・ルージュ時代の悲劇的な歴史を「モノ」をめぐる人々の物語を通して理解し、継承することを目的としている。展示される写真は、そのモノたちである。初回の写真展は2022年に東京で開催され、Sさんはその後援者として関わっていた。被写体としての依頼も受けていたが、すぐには応じることができなかった。なぜなら、Sさんはこの時にすぐに絵画を思い浮かべることができなかったからだ。〈表参道の時（2022年）⁵⁸は、この絵を思い出すまでにいかなかったのです。まだこの絵が自分の中に出てきてなかったのです。まだ迷っている状態でした〉 Sさんは、この時点で、まだ自分の人生とカンボジアの歴史が交差する「モノ」が何なのか、明確に意識できていなかった。同時に、この時点で絵画にどういう意味があるのかについても意識していなかった。

を行うことができた。

⁵⁸ 「Alive 生きる」の日本での写真展の第一回は2022年に表参道で開催され、第二回は横浜で開催された。第一回の展示にSさんの写真はなく、第二回において展示されている。

Sさんはオリジナルの絵画から強い印象を受け、妻に頼んでレプリカを描いてもらったが、いざ絵画が手元に来てからは、絵は特に意識されることもなくそばにおかれてあった。Sさんと絵画は静かに日々を共に過ごした。このような関係であったから、写真展の依頼があった時に、歴史を証言する特別な「モノ」としてすぐに思い出すことはなかった。しかし、穏やかな日常の中で、絵とSさんは徐々に絡み合って、知らず知らずのうちに一体となって、そこから意味が生じてきた。ここで一体となるという意味は、一方が他方に同一化するというということではなく、双方が絡み合って新しい存在となることである。このような時間をかけた関係が、対話と想像という出来事を可能にした。

いろいろな偶然が重なって、横浜で開催した時にこれならと思って、出したのがこの絵です。(中略) 本当は、あまり思い出したくないことなのです。でも、キムハックさんの写真展がきっかけで、母が見守ってくれているという感じを持ったのです。この絵を公開したのは、あの(歴史的)悲劇を、彼女を通してもう一回皆に知らせたいという思いがあったからです。

絵画はSさんを動かした。この力は意識以前、言葉以前の感覚・情動としての潜在的な力である。それは、目にみえるものとして顕在化されていなかったが、確かに存在していたのである。

私の個人的な思いのある絵ですが、その背景には大勢の人が関係しています。(中略) 皆さんに公開して、自分のアイデンティティーとしてだけでなく、カンボジアのアイデンティティーとして伝えていきたいのです。歴史の事実を短期的、間接的なじゃなくて、長期的に見るために伝えていきたい。犠牲になった人は直接に殺されたい人だけじゃないということ、今でも苦しんでいる人がいるということ、あるいはその時代を利用する人たちもいるということ、そういう多様な人の在り方を知る必要があります。

Sさんの関心は、自分の私的な関心から祖国の歴史についてと広がっていく。クメール・ルージュ時代について、強制労働や大量虐殺という衝撃的な出来事だけが強調されそのイメージが一般化されているが、その時代を生きた一人ひとりの経験や影響は一様ではない。一つひとつの出来事は小さいが、その多様なあり方を知ることが歴史を見る視点として重要であるとSさんは考えている。Sさんにとって、実母の記憶というミクロな世界と祖国の歴史というマクロな物語は連動しているのである。

一番悔しいのは、歴史の事実がわかっていないことなのです。何百万という死者数のデータはあるのですが、そのことの詳細を調べようとするのはタブーなのです。研究して、調べればわかるのですが。(中略) 利害関係のために、事実の証言者が出てこないのです。(略)」

Sさんはクメール・ルージュの時代を日本で暮らした一人として、他者によって構築された歴史の下に埋もれたままになっている祖国の歴史を明らかにすることに使命感を持っている。今回の写真展を契機に私的な絵画を外に出したことも、自分の疑問への探究という試みの一つと言えるだろう。それはまた、戦争を知らない世代が多様な歴史の様相を知る機会ともなるからである。

過去の出来事について親から直接に話を聞くことなくマスメディアからの一方的な情報を受け取ってきた在日カンボジア人1.5世たちは、「他の1世の体験を聞かせてもらって、もっと色々なことを知りたくなった」と語る⁵⁹。またカンボジア本国で開催された写真展のシンポジウムでは、聴衆から絵画を通してさまざまな質問を受けたとスピーカーとして参加したSさんは印象深く語った。クメール・ルージュ時代の第2世代は、それぞれが自分なりのカンボジアの歴史への理解を深め、それを自分の経験とし、生きる糧を得ているようである。

さらにもう一点大切なこととして、Sさんと絵画の関係が写真展を通して国境を超えて多くの人に共有されたことである。それはこれまでとは異なるもう一つのカンボジアのアイデンティティが国境を超えて形成され、カンボジア人のもう一つの共同体が生まれる契機となる。この共同体は領土や国民によって規定される国家ではなく、人と人、人とモノとのつながりによって形成される共同体である。人間だけでなくあらゆる存在者を含めたフラットな共同体で、出入り自由で開かれた生の領域である。これは、「応答プロセス」における「メッシュワーク」と言えるだろう。

5-3-2 MSさんのライフストーリー：銀塊、言葉、石臼の物語

2022年9月の写真展で出会い、その後MSさん一家が筆者の自宅を訪問するなどインタビュー以前から親交は始まった。インタビューは2023年6月19日と2024年5月23日に筆者の自宅で

⁵⁹ この1.5世たちの思いは、具体的に実を結び、「Alive」という任意団体を立ち上げて、写真展の企画と開催に協力者として参加している。グループ「Alive」は、日本に住むカンボジアにルーツを持つ人々が「自分らしさ」を大事にし、家族との暮らしのウェルビーイングについて考え、当事者視点でサポート活動をすることを目的としている。(第二回写真展「Alive」の説明書より)

約3時間行なった。

MSさんの生い立ち

MSさんは、1971年にカンボジアのバタンバン州で生まれた。父親はタケオ州の農家の出身で、両親はタケオ州で結婚した。しかし、母が父の家族と折りが合わず家を出てバタンバン州に行った。父は母の後を追ってバタンバンにいき、土地を購入し落ち着くことになった。MSさんはそのバタンバンで生まれた。12人兄弟姉妹の10番目であった⁶⁰。1975年4月にクメール・ルージュ政権が樹立し、他の家族同様に集団居住地域に強制移動させられ、家族はバラバラにされた。それぞれがそれぞれの集団労働に従事させられ、家族の交流は奪われた。しかしMSさんはまだ4歳だったので、住居として与えられた一軒家に両親と妹と祖父の5人で住むことができた。朝から晩まで外での労働に駆り出された両親に代わって、MSさんの世話をを行ったのは祖父であった⁶¹。ちなみに、すぐ上の兄弟たちは幼少でありながら草むしりや動物の世話などの労働に従事させられ、辛い日々を送った。その点において、MSさんはポルポト体制下においても、祖父からの温かな保護のもとで暮らすことができ、自分は比較的運が良かったと振り返る。現在においても、Mさんは穏やかな子ども時代を良い思い出として記憶している。

ポルポト時代に大人たちはみんなとても苦勞したけれど、私はおじいちゃんが大切にしてくれたから、恵まれていましたね。おじいちゃんは、家で屋根の藁を編んだり、孫の面倒を見たりしていました。お父さんとお母さんは強制労働に連れて行かれましたが、おじいちゃんは年をとっていたので、(中略)。おじいちゃんの作業中もそばで遊んだりして、それがすごく楽しくて……。他の兄弟はそんなことはなかったのですが、わたしと妹はずっとおじいちゃんと一緒にいて、守られていたなと感じています。おじいちゃんへの信頼感がありました。

祖父によって与えられたこのような穏やかな生育環境がMさんの人格形成にプラスとなり、その後の厳しい現実を生き抜く力となっていく。

いのちと交換する銀塊

⁶⁰ 12人のうち8人はタケオ州で誕生し、4人はバタンバンで誕生した。母親がタケオ州を出た時は子どもを置いて行ったが、その後父親がバタンバンに行く時に全員を連れて行った。12人のうち1人はクメール・ルージュ時代に行方不明になり、亡くなったらしいとのこと。

⁶¹ MSさんによると、高齢者は外での重労働はできないので、その代わりに小さい子どもの世話を命じられた。

1979 年 1 月にベトナム軍の侵攻によってポルポト政権は崩壊し、人々は解放された。バラバラになっていた MS さん家族も再び一緒になることができた。しかし、新しく成立した国家の政府軍⁶²と旧政権のポルポト軍との間で攻防がつづき、国内は内戦状態となった。社会は混乱し、人々の生命と暮らしは脅かされ続けた。このような中で、生命の危険と将来への不安を覚えた大量の人々が家族と共に故郷を離れ国外へ避難することを決意した。MS さん家族もその中にあった。

9 歳の MS さんは、家族とともにバタンバンからタイ国境にある難民キャンプを目指し徒歩で向かった。キャンプまでの道程は闇夜の森の中を通り、川を渡り、ある時は地雷が埋まっているところも通るのであるから、持ち物は制限される。持っていくものは、乾燥トウモロコシ、鍋・釜など生存に必要な最小限のものである。この時に MS さんの両親は持っていた 5、6 個の銀塊⁶³を家族に分散し、携行させた⁶⁴。それはどのような意味や価値を持つのか。

内戦から逃れてきた人間にとって、金銀はすごい貴重品なのです。(中略) 万が一何かあったら、これで命と交換できるって考えるのです。形のあるものじゃなくて、命(いのち)と交換するんです。命の交換です。

「命の交換」ということは、単なる生存のための生命の維持という意味だけではない。あるエピソードを紹介しよう。幼い MS さんは、難民キャンプへの道程の最中に疲れ果て、力つき、倒れるほどに眠くなった。その時に母親が、「がんばって歩いて、キャンプに着いたら、お砂糖のかかったバケットを食べさせてあげるから」と MS さんを励まし、歩みを促した。そして無事にキャンプに到着した時に、銀塊をバケットと交換して本当に食べさせてくれたのである。銀塊はバケットと交換され、それは MS さんにとって生存のための食べ物というよりも明日を生きる気力を与える食べ物となった。また母親にとっては、子どもをなぐさめ、励まし、希望を与える愛の食べ物となった。銀塊と交換したバケットについて、MS さんは、〈バケットを見るたびに国境線を越える前のことを思い出して、どれだけ頑張ってきたかって思うのです〉と語り、その後の人生において、M さんを支える大切なモノとなる。銀塊は生存のためだけでなく、生きるための気力としての「いのち」と交換されたのである。

⁶² 社会主義国家カンブチア人民共和国のヘンサムリン政権の政府軍

⁶³ この銀塊は母親が両親から受け継いだもので、10x3x2(cm)くらいの大きさ。MS さんによると、カンボジアの中華系コミュニティで貨幣のように使われていたらしい。

⁶⁴ 銀塊を子どもに携帯させるときに、リュックの底に縫い付けたりして、子ども自身も気づかないように工夫したとのこと。また、金のアクセサリーなどは女性の下着にポケットを縫い付けて隠したという工夫もあったとのこと。

言語に込められた思い

難民キャンプに到着した MS さんは、生命の安全を保障されたキャンプの中で平穏に暮らし、小学校に入学した。そして中学校に入った 14 歳のとき（1985 年）、定住難民として日本政府の受け入れ審査を通った家族とともに来日した⁶⁵。

神奈川県にあった難民定住センターで半年間の日本語学習と生活オリエンテーションを受けた後、家族は本格的に地域社会に参入した。M さんは中学生の年齢であったが、日本語習得のため小学校 5 年に編入した。

MS さんや家族にとって人生の再出発である。両親は生活再建のために新たな仕事を始め、MS さんは日本の学校に入り、日本語を習得して授業についていかなくではならなかった。言語も生活習慣も全く異なる社会で生きていく苦労は、形は違っても大人も子ども同じであり、必死に生き抜く日々であった。その中で、大きな支えは母国であるカンボジアの文化である。それは言語であり、礼儀であり、宗教である。M さんの両親はそれらを大切にして、子どもたちに伝える努力を怠らなかった。

MS さんのクメール語は知的で美しい。それは、ある巧妙なやり方で父親が MS さんに教え込んだからだった。

父の身体をマッサージしてあげながら、父が仏教の説話を聞きたいと言って、私にお経を読ませるの。でも実は、父がそれを勉強したいからではなくて、娘に信仰心やクメール語を教えるためだったの。お父さんは子どもが日本の学校で日本語しか話さなくて、いくら家でカンボジア語を話していても、読み書きはできなくなってしまうと心配して、「（お経を）覚えたいから、お前ちょっとテープからノートに書き写してくれる」って言って、私がカンボジア語で全部書いてあげた。（中略）お父さんはお経のカセットテープを繰り返し聞くのだけれど、それは本人が聞きたいのではなくて、私（M さん）にクメール語を学ばせるためだったの。そのことに、今気付いたの。

MS さんは、このようにして知らず知らずのうちにクメール語や仏教の言葉を覚えた。そのおかげで難しいサンスクリットの仏教用語も理解できるようになった。このようにして言葉を身体に染み込ませて習得する方法を身につけたおかげで、言語そのものに興味を持つようになり、大人になってからクメール語と日本語の通訳や翻訳の仕事⁶⁶に関わるようになった。さらに言語の

⁶⁵ MS さんの父親がタケオ州で日本軍が占領中に使っていた基地で働いていたことから、日本への定住を最初から希望し、初期段階でカンボジア定住難民となった。

⁶⁶ MS さんは、カンボジア人の子どもが増加していく 1995 年頃から 2000 年代にかけて地方自治体の国際協力活動として行なわれていた公立小中学校での子どもや家族への通訳・相談業務に

持つ伝統や歴史に関心が向いて、ついには子育てをしながら日本の大学に入学して、日本の古文を専攻するまでに至った。また、このクメール語の学習から仏教に対する知識や教えに関心が向き、信仰心が深まっていった⁶⁷。〈父親から仕込まれたやり方が身体に染み込んでいるから、日本語についての講義なんかもずっと入ってきて、それはすごい能力ですね〉と語る。そして、当時は気づかなかった父の思いと工夫に大人になってから気づき、感謝している。

あの時は、(父が) 年とっても(仏教の) 説法の言葉を覚えていたっていうことに感動したんです。お父さんが勉強したいなら、私も頑張って助けてあげなくてはと。でも、そうしてやり終わった時に「私全部読めたよ」って言ったら、お父さんが、「よかったね」って。それで、わかったんです、本当は私を教えたかったのだと。すごい教師ですね。

MS さんにとってクメール語は単なる伝達道具ではなく、そこに込められた父の思いやカンボジアの文化、その基盤となる信仰心を理解し、自分のルーツに誇りを持つための大切なモノであり、異文化社会の日本においてカンボジア人として、そして難民として矜持を持って生きる力となった。その意味で、MS さんにとってのクメール語は先の銀塊と同じように形には現れない「いのち」の価値をもち、世界と MS さんの生をつなぐ媒体である。

石臼の物語

親の思いと母国の文化を想起させるという意味でのモノの価値について、もう一つの MS さんのエピソードを紹介しよう。それは、カンボジアの伝統的な料理道具である石臼にまつわることである。カンボジアでは香草や自然の調味料を石臼ですり潰し、新鮮なうちにふんだんに料理に使う。それによって、それぞれの家庭の味が生み出されるという家の歴史でもある。MS さんの母親は、〈石臼を使ってすり潰したものをパッパと手で入れるとほっとする。ミキサーで挽いたものとは味だって違う〉と語ったという。家族への愛情表現の道具でもあり、手に馴染んだ石臼⁶⁸を M さんの母親は難民キャンプから日本に持参した。

この持参した石臼には、難民キャンプ時代の一家の大切な出来事が刻まれている。それは、キャンプに着いた時に石臼がなく調味料を上手に用意できない母のために、M さんの父と祖父と叔父の3人が裏の岩山に登り、岩を掘り起こし削り砕いて石臼を作って母に渡したのである。母は

従事していた。

⁶⁷ MS さんは、仏教や日本の神道の精神に関心を持っていて、NGO が作った仏教の小冊子をカンボジアの子どもに伝えるために日本語からクメール語に訳し、自身でカンボジアに赴いて配布するなど積極的に活動している。

⁶⁸ 石臼は 50cm くらいある本格的なものから 20cm 弱くらいの手軽な小さなものまであって、M さんの母親が日本に持ってきた石臼は小さい石臼 3 つだった。

その石臼を使って、米をすり潰して麺を作り、カンボジアの伝統的な日常食であるノンバンチョという料理を作って、家族に供した。また自家用だけでなく自宅前で売り、子どもの文房具などをかうための現金を得た。しかし、二杯のどんぶりでは大した稼ぎにならないので、次に母は石臼で挽いて作った米麺やペーパーライスの小売業者にまとめ売りして利益を増やすようになった。Mさんは、〈母は子どもたちを養うために知恵を絞って、それがまた自分の生き甲斐にもなっていました〉と母の生活の知恵を称賛する。

一家を助けたこの石臼を母は日本に持参した。しかし、引越しの際にその打ち棒を失くしてしまい、落胆した母に義理の弟はバーベキューに行った先の河原から石臼の代わりになる石を見つけて母に渡した。義弟の気遣いと母の愛、そして母の手のぬくもりが刻まれた石臼は、日本の石とともにその役目を果たし、時を経て、その形を変えながら、さまざまな軌跡を刻み続けている。石臼には、そのものとしての歴史が内在している。

MSさんはこの石臼のエピソードを語るとき、〈この一つの石臼の後ろにたくさんの物語があるのです。(中略) 一つのものには一つの物語があって、だからもう本当に何百もの物語ができちゃうんです〉と語る。これがMSさんと石臼にとっての「いのち」なのだろう。つまり、MSさんとモノと絡み合って、物語という「いのち」を生成するのである。石臼は、MSさんの物語化によって、いのちを得るのである。現在、この石臼はその大切な記憶・物語とともにMSさんともにある。

モノに敬意を払う

MSさんにとって、上記の銀塊や石臼は物質であるが、同時に喜びや苦しさや悲しみという感情をともにし、ともに出来事を経験するパートナーである。過去から現在へとつながる生を支えるモノとその生の軌跡に対して、深く敬意を払うMSさんである。そのモノがどのような状況で現れ、どのような作用や出来事を引き起こし、どのように自身の形や色を変えて、現在の姿になったのか。そこにMSさんや他のモノとどのような関わりがあったのか。モノそのものは自分の来歴を認識したり、意識したりすることはない。その来歴を認識し、形として表現し、外の世界に提示することできるのは人間である。それが、言葉を用いて構成する物語という方法である。MSさんは、モノに対する敬意を物語化という行為を通して表現するのである。

モノを単なる道具として人間に都合の良いように利用し、必要がなくなったら廃棄するのであれば、それは「対象」であって「モノ」ではない。そこに、生きる軌跡を可視化する物語は生まれない。モノを物語化することは、モノの「いのち」に対する真摯な態度である。銀塊も石臼も、そしてクメール語もいのちを吹き込まれ、MSさんとともに生きている。

5-4 「モノとともに生きる」ことについての考察

上記では、SさんとMSさんの語りを通して、人間の側から見た人とモノとの関係の様相を見た。それでは、モノの側に立ってモノに語ってもらったらどうなるのか。「森の中にいると私が樹を見ているのではなく、樹が私を見ているように感じる」⁶⁹というマルセヌ・デシャンの言葉は示唆的である（メルロ＝ポンティ 1966：266）。また、人間がモノを表象するのではなく、モノに自身に語ってもらう必要があるとハイデッカーは述べる⁷⁰（霜山 2016:147）。人間である筆者によるモノの観点取りの挑戦である。

5-4-1 モノと対話

Sさんと絵画の関係の鍵は「対話」である。Sさんは絵画の意味を、実母と対話することと語る。その時、絵画はSさんと実母をつなぐ単なる無機的な媒体なのか。この問いにアプローチするためにまず対話について考えてみる。対話はダイアログとしてモノログと対比させられる。対話は、私と「あなた」⁷¹という二人称の関係である。会話と対比すると、会話は私的なおしゃべりに対して、対話は異なる意見を交換しあって合意に達するということが一般的な理解である。また電話や手紙と違って、対話は顔と顔を合わせる対面形式であって、相手の身振りや表情を読み取ることができる。思いつくままに並べてみたが、対話は自己と他者の信頼関係を作り、同時に対話を通して新たな出来事を生成する。この点から、対話におけるSさんの絵画の意味を考えてみよう。

絵画は、Sさんと実母の対話に参加していると言えるのではないだろうか。Sさんと実母との対話は二人だけで成立したのではない。まずこの絵画の元となったオリジナルの絵画の製作者であり、かつレプリカを制作した画家（Sさんの妻）がいて、その思いがあり、その思いを表現する絵の具やパレットがあり、絵画が描かれた部屋と家具があり、その周囲の環境があり、さらにSさんを巡る多様な人間関係も影響しているだろう。それらの多様なモノの連携の中で、本稿で取り上げた絵画が現れ出てくる（事象の生成）のである。これらは、それぞれがある意思を持って他のモノとつながる。これらのモノは、特定できる何か役割を担っているというよりも、相互

⁶⁹ メルロ＝ポンティは、このマルシヤンの言葉によって、絡みあいの本質である相互媒介的な関係、つまり存在の可逆性（交換可能性）、反転性（内と外、能動性と受動性、主観と客観という二項対立の反転可能性）について述べる。モノは、人の知覚を通して自己を知覚するという。また、存在者が世界に埋め込まれている時に、知覚はその世界の知覚以上でも以下でもないという（鷺田 2003：324）。

⁷⁰ 霜山は、この部分を、マルティン・ハイデッカーの講演記録である「建てる 住む 思考する」（『ハイデッカー 生誕120年、危機の時代の思索者』2009）河出書房に記載）より引用している。

⁷¹ 「あなた」は、二人称としての人である。この人称としてあなたは、私と呼びかけ応答する関係にある。

の関係の中で、何かの働きかけを行っているようだ。そこでのモノの存在意味は、参加すること、行為すること、そして他のモノに影響を与えることにある。それがどのような働きをし、どのような影響を与えているかは見た目だけではわからないし、因果論的に説明することは難しい。対話はそのような複雑な関係の中で、至る所で行われている。その多様な対話（日常の立ち話的な相談や交渉も含めて）を、出来事が起こる水面下での異なるモノ同士の関係によって生じる現象と捉えれば、それは情動論でいうところの「生の潜在性」である。もし絵画を単なる回路としての媒介という役割に封じ込めるのであれば、絵画の潜在的な力（他者への影響力）を奪うことになる。それは、機能を分離し効率的に生産する近代の分業体制のようである。またSさんと実母の対話に境界を設けて囲い込めば、他の関連する存在者を排除し、あるいは周辺に追いやることにもなる。生の領域である「メッシュワーク」において、その構成要素である存在者の間に序列や中心/周辺という区分はなく、それぞれが同格な立場でラウンドテーブルに座る場所を持つ。つまり、Sさんの絵画は単なる機械的な媒体ではなく、対話という出来事を生成する意思を持った生きる物質＝存在者である。

次に、対話の広がりについて考える。Sさんと絵画の対話は、長い間家の中で行われ、外に出ていくことはなかった。しかし、写真展「Alive」を契機に絵画はSさんとともに外部に現れ出て、新たな出来事が生成する。それは写真を通して、絵画の複製・イメージというもう一つのモノが誕生し、この新たなモノ（写真というイメージ）を通して、見知らぬ多くのオーディエンス（他者）と絵画（イメージ）が出会い、新たな対話が始まることである。写真に写った絵画を見たある人は、故郷での懐かしい農村の暮らしを思い出し、ある人は理不尽な運命に翻弄される祖国の歴史を憂い、ある人は戦争や平和について考え、ある人は人間の生きる強さを学ぶ。それは、写真に写った絵画がそれぞれのオーディエンスへ「あなたにとってのこの絵の意味は？」と問いかけ、その問いかけへのそれぞれの応答なのである。応答はそれぞれの人の多様な経験や価値観を反映している。そして、応答を通して新しい気づきを得た人たちは他の人に自分の経験を語り、また新たな対話が始まる。その場は公開シンポジウムであったり、個人的な集まりであったりする。こうして、対話が対話を呼び広がっていく。対話の場所や内容は多様であるが、それらの対話に関わった人とモノたちの間にはある共感が生まれる。それは意図されたものでも目に見えるものでもなく、リゾームのようにつながり広がっていく「メッシュワーク」である。その領域は、境界が緩やかで資格が問われない自由なメンバーによる「対話の共同体」とも言える。

対話の広がりには参加者の広がりを通じる。対話の共同体は、数限りない存在者がメンバーとなり得る。例えば、Sさんの事例において絵画という存在者に注目してみよう。まずオリジナルの絵画があり、レプリカの絵画あり、写真となった絵画があり、展示用の大パネルとなった絵画の写真があり、写真集に掲載され広く普及されている絵画の写真がある。これらは物体としてそれ

それぞれ異なる絵画であり、異なる存在者であり、周囲に異なる影響力を持つ。しかし、それらは密接につながっている。一つの絵画は形を変え、意味を変え、周囲との関係を変えながら、細胞分裂のように増殖し、成長し、多様な絵画になっていく。ここに、絵画における生のつながりを見ることができる。それぞれの絵画が、その状況下で多様な他者につながり、新たな出来事を生成する。そのつながり方は、まさしく「絡みあい」であり、「応答プロセス」である。

5-4-2 モノと物語

MS さんが語る銀塊は、多くの出来事を M さん家族とともに経験している。クメール・ルージュ政権崩壊後、何かの時のためにと MS さんの両親がバタンバンの家で保管していた幾片かの銀塊は内戦が始まると家族と一緒に戦火と地雷の中を潜りぬけ、難民キャンプに避難した。その時に、一つの銀塊は MS さんの母親が子どもに食べさせるためにバケットと交換され、家族のもとから離れていった。キャンプでは、銀塊はテント小屋の片隅で家族とともに過ごし、そして家族と一緒に日本にやって来た。多くの困難と葛藤に直面する家族に寄り添い、その貴重な経験や思いを自身の出来事として身体に刻みつけていった。これらは銀塊が MS さん家族とともにした来歴の一部である。銀塊は、もともとは MS さんの母親が両親から譲り受けたものである。

MS さんの母親は 10 歳くらいの時に両親と死に別れ、自立して生きるためにタケオ州で織り子として働きだした。そのために十分な学校教育は受けられなかったが、生活の中で直面する問題について自分で考え、行動し、問題を解決する能力を養っていった。保護する人も財産もない M さんの母親にとって、銀塊は生命を守り、両親の愛を思い起こさせ、生きる力を与える大切な宝であり、生きる支えとなったであろう。MS さんの母親の来歴は、幾多の困難を乗り越えて生き抜いた力を示す。織り子時代から始まり、結婚したが問題を抱えて家を出て、新たな地で 12 人の子どもを抱えて生活を再建したのも束の間、ポルポト政権下での強制移住と労働、解放後には難民キャンプに避難し、家族を守り、そして見知らぬ日本への移住と次々と襲いかかる思いがけない出来事を忍耐力と勇気と知恵によって生き抜いた。このような MS さんの母親の生の軌跡に寄り添い、その喜びや悲しみ、悔しさをともにした銀塊の歴史がある。銀塊の来歴をさらに遡れば、その銀塊の銀が掘り出された土地や採取人に始まり、銀塊の鑄造人や道具や技術、その銀塊を運搬する馬や牛や運搬人、銀塊を通貨として利用していた中華系の商売人たち、それら全ては銀塊の生きられた歴史を構成する要員である。この複雑に交差した歴史は、MS さんによって一つの物語として語られるのである。

モノの来歴を物語ることは、その生を証言することである。モノがモノとして現れ出ること、存在することは他のモノとのつながりにおいてである。ドゥルーズは、このことを「瓶」に喩えて説明する。「瓶」が意味を持つのは、瓶に何かが注がれた時である。その何かがワインなのか、

水なのかによって意味が異なり、また同じワインでも時と場所と目的によってその意味は変化する（ドゥルーズ 2002）。モノは単独ではモノとして存在しない。存在するためには、他者と出会い、関係を結ぶ必要がある。そして、出来事が生まれ、それにまつわる記憶や習慣、性質などが生まれてくる。それぞれの来歴・歴史は唯一無二のものであるが、同時にそれらは他者の来歴・歴史と相互に絡み合っている。その来歴＝生の軌跡は、モノの誕生以前からあり、そして消滅してから刻まれ続ける。インゴルドは、この生の軌跡を「生の線」として表現した。生の線は絶え間ない生成と分裂を繰り返し、他の線と「絡みあい」ながら拡がり、生命の領域（メッシュワーク）を形成する。その生の軌跡は物語という形で可視化される（インゴルド 2021：337）。

物語には語り手と聞き手がいる。そこには必ず伝えたいメッセージがある。この物語の特色を生かし、モノが語る声を物語として記述し伝えようとした事例研究に『マツタケ』がある。人類学者である著者のアナ・チンは、人間に踏み潰されながらも生きている多くの存在者の声をマツタケに託し、マツタケの物語を通して、この世界に生命をとりもどしたいと述べる。物語を書いたのは人間のチンであるが、チンはマツタケを外部から「客観的」に観察するのではなく、マツタケの内側に入って、マツタケの経験を自身の経験として記述する。であるから、『マツタケ』はマツタケと人間の共同制作といってもよい。モノは人間と協働して、自己の物語を語り得る。

本稿で紹介した MS さんの銀塊の物語は、そのモノ自身としての物語というより MS さんの自己の物語の中で現れ出てくる。MS さんの物語の中で、銀塊は M さんの母親を守り、戦火の中を M さん家族と一緒に生き延び、難民キャンプにたどり着きバケットと交換され、そして MS さんの手元から離れていく様子が語られる。その銀塊は、MS さんに、そして MS さんの母親に生きる希望を与えた。それは、「いのちの交換」であった。そして現在に至るまでその銀塊のイメージは、MS さんの「いのち」を支え続けている。物語は MS さんによって語られたが、物語は M さんが単独で構成したのではない。MS さんの物語は、銀塊の内側に入って、銀塊の声を感受し、その複雑に交叉した来歴の糸を解きほぐすようにして構成された。だとすれば、銀塊は MS さんの物語の共同製作者⁷²であり、MS さんの自己の物語の中で、自己の物語を語っていると言える。

銀塊の物語の共同制作は、銀塊と MS さんの信頼関係のもとで可能となった。それは、銀塊に MS さんを支える確固たる思いと意志があったからではなく、銀塊が MS さんにとってかけがえのない存在として共に暮らし、出来事を経験したパートナーとなったからである。MS さんと銀塊の生は絡まり合って、一つの生の線を紡いでいる。それは MS さんと銀塊がともに「いのち」を持っているということである。「いのち」を持つということは、このような生の流れの中にあることで、そのことはモノに限らず人間も同様である。人間も生の流れの中にいて初めていのちを

⁷² 新物質主義の提唱者であるジェーン・ベネットは、物質が作り手に物質の中の生命を認識させ、素材と共同制作するように仕向けると述べる（インゴルド 2017：76）。

持つことになる。物語は、このような生の流れの中にある人とモノによって構成される。

MSさんと銀塊との関係は新しいアニミズム⁷³の考えと重なる。人間と非人間の相互作用について論考した酒井妙子は、新しいアニミズムは単なる宗教的な信仰ではなく、人々の生活の中で実感されたモノとのパーソン的な関係であると述べる（坂井 2023）。ここでいうパーソンとは人間特有の資質を持つ、あるいは「人間」に格上げされるという意味ではなく、環境の中で他者とともに自律的に生きる存在を意味し、その点で人間も非人間も区別はない⁷⁴。インゴルドは、この新しいアニミズム的パーソンを西洋的パーソンと対比させ、西洋的パーソンは知性と意思を持つ人間が非人間のモノを管理・支配するが、新しいアニミズムにおけるパーソンは人もモノもそれぞれの世界において独自の知性と意思を持ち、自律的に生を営むという観点に立つ。この自律的な生を営む存在としてのモノに人間は敬意を払い、ともに生きる。このよう観点に立ってみれば、MSさんと銀塊の関係は新しいアニミズムの観点に近いかもしれない。

5-4-3 モノとイメージ

ここまで、モノの立場から考察してきた。事例で取り上げたモノたちは物体としても、人との関わり方においても異なる位相を示すが、ある共通点が見出される。それは、Sさんの絵画にしても、MSさんの銀塊にしても、実際の出来事や経験が刻まれた実在としてのモノではないことである。これを、どう理解したらよいだろうか。MSさんが今持っている銀塊は幼少時にバケットと交換した銀塊そのものではないし、Sさんの絵画も初めに会って心を揺さぶられたオリジナルの絵画ではなくそのレプリカである。これらをモノのイメージ（像）として捉えてみる。ここで、箭内のイメージ論（箭内 2018）を参照する。

箭内は、イメージを「Xに対する現れ」と定義し、「現れ」は人間だけでなくあらゆるモノを指す⁷⁵。そして、イメージは変化するという。はじめに現れた「原イメージ」は「脱イメージ化」され、状況や経験とともに変化し、形や意味を変えて「再イメージ化」される。この変化のサイクルは反復される。

インゴルドは、イメージとその対象となる物体の関係について、生の流れの中で物体からイメ

⁷³ 従来のアニミズムは、人類学者バーネット・タイラーが定義するモノに靈魂が宿っていると信じる宗教的信念である。それに対して、フィリップ・デスコラやデ・カストロが提唱するアニミズムは、自然の中に多種の「人々」が存在するという見方であり、前者はモノを「人々」として感情や意識を持ちコミュニケーション可能な存在として捉え、デ・カストロは自然の中に多様な人々が変身した形で存在するという「多自然主義」を提唱する（箭内 2018：147）

⁷⁴ ジェーン・ベネットは、人間と人間以外のものが連鎖・協働する世界（アセンブリッジ）を構想し、そこでは人間とモノは相互交換可能な存在であると論じる（ベネット 2023：29-30）。

⁷⁵ あるゆるモノの中には、人間の身体奥深くに対する「現れ」も、生物や無生物に対する「現れ」も含まれる。すべてを含むこの概念は、人間も文化も人工物も全て自然から出てきたという理由による（箭内 2018：244）。

ージへ、イメージから物体へと終わりのない往復が繰り返されると述べる（インゴルド 2017：52）。その物体のイメージの変化は、物体の来歴となってその身体に刻まれる。つまり、新しい出来事を経験するたびに物体のイメージは変化し続ける。

MS さんの手元に残った銀塊（バケットと交換されて離れていった銀塊ではない手元に残ったもう一つの銀塊）は、成長した M さんに対して幼少時における母の愛と難民時代を生き抜いた気力のイメージとして現れ、その後の人生の支えとなっていく。カンボジアの石臼の代用品である日本の石は、MS さんに対して母の家族への気配りという情感と手の温もりという身体感覚のイメージとして現れ、母国の食文化の繊細さを認識させる。父から教えられたクメール語は、父との豊かな交流や巧みな教育方法、仏教の説法をイメージさせ、洗練された母国語への誇りと信仰心を深め、さらに言語への学問的関心と通訳・翻訳という仕事、仏教を通しての現在のカンボジアの子どもの育成という新たな出来事へとつながる。S さんが持つレプリカ絵画は、S さんに対してはじめは実母との関係や実母の人生に対する懷疑として現れるが、その後の対話を通して実母や実母との関係は肯定的なイメージに変化する。また、母国の運命に対するどうにもならない無力感は、その後に歴史の真実への探究心へと転換する。

S さんと絵画のつながり、MS さんと銀塊のつながりは、写真展を契機に多様なオーディエンスの前に現れ出る。写真に写った絵画や銀貨は、それぞれのオーディエンスに対してそれぞれ独自のイメージとして現れ出る。例えば、ある人は S さんの写真を見てポルポト崩壊後のカンボジアの苦難とその時代を支えた女性の強さを想起し、ある人は日本に来た留学生の葛藤を想像する。MS さんの銀塊の写真を見た人は、難民の子どもの苦労を想像し、また石臼を見た人はカンボジアの食文化の豊かさを知る。それぞれのイメージは異なるが、そこにはある通底するイメージがある。その集積されたイメージは、人間とモノとのある種の集まりを作る。箭内はそれを「社会身体」⁷⁶と呼ぶ。実際に、上記の写真展を契機に世界各国に離散したカンボジア難民たちが、国境を超え、ある種の共同体を形成している⁷⁷。この社会的身体は、「メッシュワーク」と言えるだろう。

箭内のイメージ概念のもとになったアンリ・ベルクソンの「イマージュ」は、物質世界と精神世界の両方ともに属さない現象であり、物質や精神、主観と客観といった 2 元的世界が設定される以前の始原的世界にあるという。ベルクソンによると、記憶とはこのイマージュに存在する意識されずに身体に刻まれる軌跡である（ベルクソン 2019）。これは意識されて脳に保持される近

⁷⁶ 「社会的身体」とは、「多種多様なモノの求心力と遠心力を孕んだ身体・物体の社会的集まり」と定義される（箭内 2018:109）この概念は、ラトウールのすべてのモノの相互作用とその配置関係によって構成されるネットワーク概念と重なる（箭内 2018：244）。

⁷⁷ 例えば、異なる国籍のカンボジア人が集まってシンポジウムを開催したり、過去の記憶を保存するための組織を立ち上げたりする動きがすでに始まっている。

代的な記憶の形とは異なる記憶である。意識されない軌跡としての記憶は身体に潜在し、あるきっかけによって予期せずに想起される。その時に、知り得ないと思っていたことや存在していなかったと思っていたことが現れ出てくるのである。

この潜在的な記憶としてイメージがもつ影響力は大きい。今回の事例で紹介した人々は、出来事の軌跡を直接に刻む物体としてのモノを故郷に置いたまま日本へ移住した。モノだけでなく故郷の文化や歴史も手離した。そのような人たちにとって、日本で生き抜く力は、かつて自分が母国で生きたことを確認し証明する記憶である。とすれば、それは現実に実体としてあったモノではなくイメージとしてのモノであってもよい。大切なことは、そのモノの持つ生の軌跡＝記憶である。確認するが、物質としてのモノが必要ないと言っているのではなく、物質と記憶は一体であって、それが生の軌跡である。自分でも意識せず記憶していなかった出来事としての「生の潜在性」が、日々の出来事の水面下でどれほどカンボジア人たちの生きる力になっているかは、事例で示されたとおりである⁷⁸。

記憶としての生の軌跡は、そのモノが「不在」でもイメージの中に現れ出る⁷⁹。難民はすべてを失ったと表象されるが、そうではなくて、全ては存在しているのである。しかし、それらは今ここにはないという「不在」状態なのである。であるから、「不在」である過去の出来事や死者は、イメージを通して現在に呼び戻され、その姿を現す。そのためにモノがイメージとして人々の前に現れ出たと考えられないだろうか。

Sさんにしても、MSさんにしても今回の事例で取り上げたイメージ（現在）とそこにある記憶（過去）の間に何十年という時の流れがあり、幾多の出来事と経験を積んで、人生の知恵を身につけてきた。そして、自身の記憶を単なる自己の思い出や自己確認に留めておくのではなく、その記憶＝生の軌跡を新たな知として次世代に、そして他の人々に伝えていきたいと願っている。その願いが写真展での公表につながっている。

5-4-4 モノといのち

「モノは対話における参加者」、「モノは生の軌跡を物語る」、「モノはイメージになる」、このような存在である人とモノの関係をどのように捉えることができるだろうか。Sさんはオリジナルの絵画に対して実母との複雑な関係と母国の悲劇の歴史を感じ取り、心を揺さぶられる（アフェクトされる）。そしてレプリカの絵画とともに暮らし、ともに対話を重ね、実母との関係が再

⁷⁸ MSさんはこのことを深く認識し、いまだに多くの出来事や経験が封印されたままであることに対して、焦りと期待の両方の気持ちを持っている。

⁷⁹ インゴルドは、イメージと実存するモノのリアリティは不可分に結びついていて、イメージをリアリティの再生機能として捉え、視覚的なものや聴覚的なものからもリアリティが生み出されるといふ（インゴルド 2021：240）。

構築され、また母国の歴史についての新たな認識を得て真実への探究に向かう。こうして徐々に自身のアイデンティティの再統一が行われる。さらに、写真展を契機にSさんと絵画の私的な関係は、写真というイメージを通して多様なオーディエンスの前に現れ、新たな他者との対話が始まる。MSさんは、幼少期の難民時代の苦労をともにし、いのちと交換された銀塊とは離れたが、他の銀塊の中にその出来事と経験は保存され、鮮やかなイメージ・記憶として存在し続け、日本に来てからもMSさんを励ます。この銀塊に保存された記憶は、MSさんが大人になってから物語として可視化され⁸⁰、当時は気づかなかった母の愛や生きる勇気という新たな認識を生み、新たな対話の始まりとなる。

このようなSさんとMSさんの事例から、人とモノの生が絡みあい、そこから記憶が想起され、イメージとなり、過去の出来事や経験が呼び戻され、現在に現れて、さらにそこから他の存在者を招き入れて対話が始まり、新たな出来事が生成されていくプロセスが見えてくる。このプロセスは「応答プロセス」という生の流れであり、その生の流れは他の生の流れと合流し、大きな流れを形成していくことが事例を通して示された。この生の流れを、本稿では「人とモノの生きた関係」と捉える。そして、非人間のモノがいのちを持つことは、この生の流れの中にもとにいることであり、このことは人間も同様である。

5-5 小括：応答プロセス

本稿の目的は、「異質な他者とともに生きる」という大きな主題のもとで、この異質な他者を人間ではなく非人間のモノに広げて考えることで、「異質な他者とともに生きる」ことについての基本を考察することであった。そのためのアプローチとして在日カンボジア人とモノとの関わりを取り上げ、人とモノの存在のあり方、人とモノの関係のあり方について検討した。

事例によって示されたことは、人とモノは「応答プロセス」を通して、今ここにはない「不在」の出来事や人々を現在に招き入れ、新たな生の世界を開いていくことである。この生のあり方を可能にする人とモノとは、生の軌跡＝記憶を身体に刻み込ませ（生の潜在性）、その軌跡を通して死者を含めた多様な他者と対話を行う存在である。そのような人とモノがともに暮らし、ともに出来事を経験する中で生命の流れに参入し、生きた関係を構築する。事例によって示された「人とモノの生きた関係」は、それぞれが別個の存在として特質を失うことなく一体化し、新たな出来事を生成し、世界の形成にともに参加する関係である。それは個から集団へ、過去から現在へ、そして未来へといのちをつないでいく生の流れである。

⁸⁰ インゴルドは、モノの属性とはその物質性でも主観的な質でもなく、実践的に経験されるもので、それは物語として可視化されると述べる（インゴルド 2021：87）

以上から、「異質な他者とともに生きる」ことの基本は、その関係がお互いの異質性を梃子にして（媒介作用）、世界に開かれていくことであるとする。

終章

本章は2部構成である。第一部は『「応答プロセス」と在日カンボジア人の生き方』について、第二部は「在日、カンボジア人の生き方から学ぶこと」についてである。

第一部 「応答プロセス」と在日カンボジア人の生き方

第一部は、本稿の解釈のための道標として設定した「応答プロセス」に沿って、在日カンボジア人の事例を以下の3点から考察する。はじめに「応答プロセス」の促進要因と阻害要因について、次に「応答プロセス」と「移動」の関連について、そして「移動」と「異質な他者とともに生きること」についてである。

1 「応答プロセス」の促進と阻害

「応答プロセス」の促進：絡み合いとメッシュワーク

「応答プロセス」が促進されていく事例をまず検討する。結論から言えば、その鍵は「絡みあい」と「メッシュワーク」にある。

Pさん（第3章 希望に生きる在日カンボジア人1.5世）は、職場で同僚のブラジル人家族から疎まれたとき、ありのままに接することによって関係を改善した。この「ありのまま」とは何を意味するのだろうか。ありのままに事態を受け止める、ありのままに相手を受け止め、ありのままの自分である、ということであるとすれば、そこには他者との「絡みあい」の関係の条件が示唆される。絡みあいの条件とは、自己を出て他者の内側に入ること、そして自己の利益のためではなく、より始原的、情動的なつながりである。自己を忘れるということが、〈ありのままで接し、本音で話し、嫌なことは嫌と言います〉という態度だろう。しかし、絡みあいの関係はすぐにできるものではない。見知らぬ者同士が出会い、その後どのような関係を構築するかにはいくつもの選択肢がある。無視する、敵対する、親密になる、利用する。Pさんは意識して選択したというより、それまでの経験やその時の状況の中で自ずと「ありのまま」という態度に導かれていったのであろう。それは生の線の流れともいえる。Pさんとブラジル人家族は、「ありのまま」から「絡みあい」の関係になっていったように見える。ここには、ブラジル人家族の態度の変化もあった。それは、Pさんがブラジル人家族に対して、いつもと同じように道具を使いやすい位置に置き、他の同僚に対するのと同じように仕事を調整するなどの配慮を続けた効果

だった。それが徐々にブラジル人家族の態度を変えていき、一緒にテニスをするまで親密になった。両者は、以前とは異なる新しい関係を構築し、ともに新しい存在になったと言える。その後のブラジル人家族の動向はわからないが、Pさんはこの経験から「ありのまま」という態度を大切に、その後の人間関係の軸にしている。

もう一点、Pさんの事例から指摘しておきたいことは、このような個の関係は周囲の環境と関連することである。両者の関係の構築は、両者だけの出来事ではなく、その水面下で起こっている多様な出来事に影響され、それらとの相互関係によって表に出た効果と言える。たとえば、職場の人々の動向やモノの用いられ方などである。日本人の上司は、Pさんが仕事で遅くなると夜間高校まで車で送っていったり、Pさんが事務関係に移動したいと申し出ると高校でコンピューター操作を学ぶことを奨励し実際に配置移転を行ったりするなど好意的である。それはPさんに限ったことではなく、働く人への配慮という環境である。あるいはPさんは事務職に配置されたことで作業服から事務服へ変更するのであるが、昼食時には作業服に戻って元の同僚と一緒に食事をとるといったような配慮をしている。このようなさまざまな人やモノのあり方が、全体の関係の構築に影響を及ぼしている。これは多様な存在者の関係の集合体として「メッシュワーク」である。この職場は、多分生産性向上のみを至上価値とするのではなく、それぞれの働く人やモノのより良き生を考慮しているのだろう。このような職場では、機械や道具に対しても丁寧な取り扱いがなされているだろう。つまり、この職場の「メッシュワーク」は生の流れの中にあると言える。しかし、「メッシュワーク」は、その構成する関係によって日々変化するのだから、いつでも生の流れが保障されているわけではない。Pさんとブラジル人家族が対立している時にはその流れが滞り、好ましい関係の時には流れが勢いを増していく。生の流れにはその速度や方向に変化をきたす周囲の要素が影響するということである。Pさんは、ありのままで他者とともに生きるという生き方を通して、「応答プロセス」を実践している。

次は、「第4章 経験を継承する在日カンボジア人1.5世」のNさんの「応答プロセス」の生き方である。Nさんは、新たな環境を求めて入学した高校で、学友たちはNさんのカンボジア語やカンボジアの文化に好意的な関心を示し、それによってNさんは「外国人」という壁を取り去った。最初から、Nさんと他の生徒のあいだで「絡みあい」の関係が成り立っていた。なぜだろうか。ひとつにはこの高校が外国にルーツのある子どもたちとの共生に関心があり、そのために多様な国籍の生徒や共生に関心のある生徒が集まっていたことがある。カテゴリーによって人間を判断することの暴力性や無意味さを経験から知っていた生徒たちは、国境や民族という壁をなくしたいと思い、その思いがある雰囲気(情動)を自然と作り出していたのではないだろうか。そのような雰囲気は上から計画的に意図されたり強制されたりすることとは異なり、完全な秩序でも無秩序でもない、緩やかな秩序である。自然的な合意の中で作られる集団の秩序には、それ

なりの調和や一致があり、同時にポジティブにもネガティブにも常に変化生成する。このような変化の流れを作っていくのは、クラスの生徒たち一人ひとりでありその関係性である。生徒たちは、クラスという「メッシュワーク」を構成している存在であると同時に、それによって動かされる存在でもある。その一人であるNさんは、文化祭でのクラスの企画としてカンボジア料理の出店を提案し、同意を得て友人とともに、そしてNさんの母親まで巻き込み、大成功させた。小さな渦は大きな渦になり、Nさんの撒いた種子は周囲の他者とともに大きく成長した。Nさんは「他者とともに働く・挑戦する」生き方を通して「メッシュワーク」の中でいのちを得て、いのちの種子を植え付けていくのである。

「第5章 モノとともに生きる在日カンボジア人」のSさんは、1975年に留学生として来日したが本国の政変によって突然に母国とのつながりを切られ、国籍を失い、本国の家族や知人との連絡が途絶え、無力感に襲われる。その中で、ある絵画を通して母国での記憶を蘇らせ、断片化してしまった自己を再構築し、多様な他者と出会う新しい世界へ入っていくのである。その絵画との出会いは、偶然でもあり、恣意的でもある。画家である妻が描いたオリジナルの絵画との出会いは意図せざることであったが、その絵画に心を惹かれレプリカの制作を画家に頼んだという点では意図した出会いである。出会いは偶然であることによって、自分の利害や他者のまなざしが入る余地がなくなり、ありのままに向かい合うことが可能となる。これが、「絡みあい」の条件でもある。では、Sさんとレプリカの絵画の場合はどうか。レプリカの絵画は、Sさんのもとの来てから、あたかも空気のように意識されることなくSさんの隣にいる存在だった。Sさんがこの絵の意味を考え出した契機は、モノを通してカンボジアの歴史を語るという趣旨の写真展への参加だった。自分の存在や生の軌跡についてモノを通して考えることは、自分だけでなくその取り巻く人間、モノ、景色、すべての記憶を想起し、物語化していくことである。それは、出来事の事実そのものではなく、その時の状況の中で生成される。Sさんにとって絵画に描かれたカンボジアの農村女性は、実母とは全く異なる女性像であったが、自分と実母の関係や自分のルーツを想起させた。それらは、Sさんの心の空洞としてあったものだった。絵画を通して実母と対話をし、自己の再生に繋がった。絵画は、Sさんと実母をつなぎ、心の空洞を埋める重要な媒介者となった。この時のSさんと絵画の関係は、「絡みあい」であろう。Sさんは、レプリカの絵画の制作を、自分のアイデンティティのために妻に頼んだわけではない。絵画に出会った時の心の震え（情動）という生の流れに沿っただけのことである。Sさんは絵画を通して想起した記憶と絡み合っていると言える。記憶との「絡み合い」である。記憶は出来事の事実そのものではなく、再構成した物語であるとする、記憶と絡み合っ生成した物語は、自分に都合の良い物語の構築ではなく、登場する他者（人、モノ）を気遣い、他者の事情を想像し、自分と他者との調和や和解が可能となるような物語となるのではないだろうか。Sさんは絵画を通して記憶と「絡

みあい」、自己の物語を編成することで実母との和解が成立し、新しい地平を見出すという「応答プロセス」を実践している。

「第5章 モノとともに生きる在日カンボジア人」のMSさんは、ポルポト政権下で住んでいた土地から他の場所へ強制移住させられ、解放後は混乱を避けるためにタイの難民キャンプへ移動した。その時に疲れ果てた MS さんに母親が銀塊をバケットと交換し、それを食べた MS さんは元気をとれどした。MS さんを救ったその銀塊は手元から離れていったが、そのイメージは身体に深く残り、大人になって母から譲り受けた銀塊を見たとき、難民時代の苦難を癒した記憶が蘇り、同時に母の思いへ至った。この MS さんと銀塊のイメージとの関係をどのように見たらよいのだろうか。イメージとの「絡みあい」と見ることができるだろうか。記憶の想起は、その時の文脈（状況）の中で現れ出てくるものだとするれば、自分の文脈の中でのイメージなのか、あるいは他者の文脈の中でのイメージなのか。MS さんが、母親の内側に入って想起したイメージとすれば、それは絡みあいという関係となり得る。MS さんが銀塊のイメージと出会った時、すでに自分が母親になり、子どもへの愛を知り、また母から譲り受けた銀塊が自分のそばに置かれ、そして写真展という出来事があった。このような「メッシュワーク」の中で、MS さんの過去の記憶が現在を支え、さらに他者と世界を分かち合うことへと開かれていく生き方によって、実践される「応答プロセス」である。

「応答プロセス」を阻害：他者の対象化

「応答プロセス」が阻害される事例を検討していく。それは、「他者の対象化」という関係の中で見られた。

P さんの場合、それは就職活動を始めたときだった。関心のある会社に電話をし、名をなおり、応募したいという目的を伝える。しかし、ここで待ったがかかる。カンボジア名、つまり「アジア系の外国名」という情報を得た電話の相手は応対を拒否する。この対応が、テレホンカードがなくなるほど繰り返されたという。つまり、一人や一社ではない。これが、何を意味するのか。それは、アジア系外国人というカテゴリーによって人間を分類し、序列化する日本の会社組織の姿である。電話の相手・会社にとって、求めているのは効率よく働く人材であって、より良い生を生きようとする人間、ともに社会を作っていく人間ではない。外国人は、言葉のことや日本的習慣や秩序の面で効率的でない、合理的でないといみなされ、自動的に排除される。これは、他者をありのままに受け取る態度とは逆であり、他者を勝手に色づけ（ラベリング・表象）する態度である。「絡みあい」というつながりにはならず、主体と客体を作り出し、新たな個の生成にはならない。つまり「応答プロセス」の阻害要因は、一つにはカテゴリー化によって他者を対象化すること、主体と客体を作り出し、それを固定化することである。

Mさんもまた就職活動のとき、「応答プロセス」を拒む日本社会の壁に突き当たる。応募先の市役所で希望の職場配置について相談したところ、カンボジアというルーツを理由に拒否される。ここでも日本社会のカテゴリー化、人種差別、よそ者排除という傾向によって、「絡みあい」という関係性が拒まれる。その背景は、何なのか。生産性や効率性を考える民間会社であれば、Mさんのような優秀な「人材」は必要とされるはずであるが、行政組織においてそうならないのはなぜか。それは市役所という行政組織の特質なのか、あるいは一般的な日本社会のアジアに対する見方が反映されているのか。明治以降の国家による西洋追従、アジア蔑視という対外観⁸¹を内面化した日本人の生活経験の累積結果なのだろう。それが、行政の中でも慣例として残り、制度のように定着していったことによるのではないか。Mさんはこの出来事に怒りと悔しさを感じ、その理不尽な制度に対して異議申し立てをして、最終的には変更に至らせる。見事な巻き返しである。しかし、それは自分のためではなく、これから日本で生きていく次世代の人に自分のような経験をさせないためであるという。そうして、未来へ新しい道を切り開いていくのである。

次にNさんの「応答プロセス」が阻害された事例を検討する。Nさんは8歳で日本に来て小学校に編入したが、言葉も文化も異なる学校で孤立し、いじめにもあい、カンボジア人であることや難民であることを消したかったという。公立小学校は国家が作った集合体である。子どもたちは「より良い国民」となるために、規律を教えられ、秩序を守り、入学と卒業という限られた時間の中で決められた目標を達成し、他の学校に勝手に行くことは許されず、外部者との自由な交流はない。どこにも逃げ出る隙間のないブロックが形成される。ここは安全であるが、自由のない不活性な領域である。このような環境の中で、子どもは競争によって支配され、分類され、序列化される。学童のあいだで生をとともにする「絡みあい」という関係は遠のく。Nさんを疎外する子どもは、生を導く線の流れの中ではなく、他者を対象化するブロックの中に閉じ込められてしまっていたのではないか。より速く、より大きく、より上へという一方方向に向かって子どもたちに隊列を組ませ前進させる学校は、自由で開放的な「メッシュワーク」という生の領域にはなり得ない。

しかし、Nさんはこの閉塞的な領域のわずかな隙間から抜け出し、危機をすり抜ける。たとえば、自分をいじめていた同級生の名簿の名の横にバカと匿名で書いて、教師やクラス全員を動揺させた。Nさんが行ったことが判明し、このことによって教師や同級生は問題の根に気づき、自分たちを振り返る契機とし、状況は変わった。Nさん自身は、自分の大胆な行動に自分でも驚い

⁸¹ 日本近代の立役者である福沢諭吉の「天は人の上に人を造らず」は有名であるが、これは平等を主張しているのではなく、現実には優秀なものが中心となって国を反映させるべきという論で、その中でアジアの「後進的」文明と「人種」を関連づけて説明する。これが、日本人が尊敬する福沢諭吉の考えである（2024年9月11日朝日新聞の「日曜に想う」有田哲文の記述より）

たと言っているが、それはなるべくしてなった自然の出来事と言える。なぜなら、Nさんは自己を維持するための努力（コナトウス）を行ったのである。自分を維持することは、自分に影響を与える環境をより快適に変えるということである。Nさんの行為は、相手をやり返すためでも他者の関心と呼ぶためでもなく、自分の身体知覚に正直に反応しただけなのだ。それは、意識以前の情動的な行動と言える。Nさんの生の流れを導き支えたのは、クラスの水面下で生じていた子どもたちの正義感や教師の注意関心かもしれない。それを「メッシュワーク」と見るなら、「応答プロセス」が阻害されても、「メッシュワーク」によって「応答プロセス」への転換は十分可能なのである。

在日カンボジア人の「応答プロセス」の特徴

以上の「応答プロセス」の促進と阻害の事例から、在日カンボジア人の「応答プロセス」の特徴は、お互いの特質（差異）を保持したまま新たな個（新たな差異）を生成変化する「絡み合い」という関係と、その関係が自律的に展開して別の生と絡み合う多様な関係の網「メッシュワーク」であることが示された。「応答プロセス」において、他者を対象化する関係は生じない。なぜなら、「応答プロセス」は他者の内側に入って他者と一体となる関係（同化ではない）であるから、外部から他者を眼差し、対象化するという関係にはならない。

2 「応答プロセス」における「移動」

ここまで在日カンボジア人の生き方を「応答プロセス」の視点から考察したが、次にその生き方に影響を与える要素としての「移動」との関連について考える。5人の来日に至る経緯はそれぞれ異なるが、日本へ移動してきたという点において共通である。それはまた在日カンボジア人として規定される根拠でもある。

基本的に農耕社会であるカンボジアでは定住が基本の生活スタイルであったが、1970年以降には繰り返される内戦の中で農村から都市への人の流出が始まり、移動が日常化し、それが難民流出の背景にあると言われる（栗野 1986）。一方で、カンボジアでは伝統的にトンレ・サープ湖の魚の捕獲や加工のために季節的に人々の移動が行われ、異なる地域の住民交流が行われていた。しかし、国外への移動は一般的ではなかった。1979年の難民流出という現象はそれまでの人々の移動とは大きく異なるものだった。生き延びるために、何も持たず何の保証もなく全くの素手で未知の世界へ参入することであった。これはジョルジュ・アガンベンのいうところの「剥き出しの生」⁸²である（アガンベン 2007）。この移動は不安と不確実性に満ちているものだったが、

⁸² 古代において罪人や障害を持った人などをホモ・サケル（聖なる人間）⁸²と呼び、法的秩序の

一方で新たな他者や文化との出会いとつながり、そして再生への始まりともなった。

移動は、場所から場所への単なる地理的な行為や現象ではなく、人、物、情報などあるゆるモノが動き周り、つながり、出来事が起こる現象である。ジョン・アーリは、移動性とは関係性⁸³であると述べる（アーリ 2015）。ではカンボジア人は日本への移動によって、どのような他者と出会い、どのような関係が生じ、そしてどのような出来事が生じたのだろうか。

「第3章 希望を生きる 1.5 世」の P さんは、来日して親戚の家に身を寄せていたが、腸チフスにかかって病院に入院した。家という私的な場所から病院という公共施設への移動である。入院中に日本語の学習書を買って、独学で学習を始めた。そして、身の回りの世話をしてくれる看護師たちと会話を始めた。次には、なんと間違い電話で応対に出た全く知らない日本人に自分の立場を説明した上で、会話を始めた。まさしく実践を通した学習である。それは同時に、さまざまな日本人との交流の機会となり、日本の文化を学ぶ機会ともなった。P さんと看護師、あるいは電話の相手との出会いは全くの偶然で、そこには何の前提条件も思惑もなかった。しかし、ここから P さんは日本語だけでなく、日本人の対応の仕方や言葉遣いを学び、新たな「知」として、退院後の生活の糧とした。「知」とは、それまで知らなかったこと（未知）を知ること、それはものの見方が変わることであり、新しい地平に向かう契機となることだった。

「第3章 経験の継承を生きる 1.5 世」の N さんは、小中学校時代には「異質な存在」として同級生から冷たい眼差しを受け自分の殻に閉じこもった。しかし、この状況を変えたいと考え、高校はそれまでの自分を知る同級生が進む近隣の高校ではなく、県内のさまざま地域からの生徒が集まり、国際学科もある高校を選んだ。自分を全く新しい環境の中において、やり直してみたかったのだ。これは、異なる環境への移動である。そして、高校で出会った多様な背景をもつ学友たちは、その異質性を尊重しあい、相互に好意的な関心を寄せ、絡みあいという関係の中でともに学ぶコミュニティ＝「メッシュワーク」となった。そのコミュニティで N さんは「外国人」や「難民」という壁が取り払われ、「カンボジア人であること、難民であることは自慢してもいいことなのだ」という新しい「知」を得て、来日前の快活な自分を取り戻した。その後は、文化祭でカンボジア料理の出店をクラスの仲間とともに大成功させ、さらに専門学校へ進学するなど大きな飛躍を遂げていく。

「第3章 経験の継承を生きる 1.5 世」のもう一人の M さんは、カンボジアでは常に優秀な成

外に置いた。ジョルジュ・アガンベンはこのような存在を「剥き出しの生」⁸²とし、現代においては法的権利を剥奪された難民がそれにあたるとする。しかし、その「剥き出しの生」は排除や同化を基礎としない共同体が生成する可能性がある⁸³と論じる（アガンベン 2007）。

⁸³ジョン・アーリはドゥルーズのノマド概念を現代の「流動性」と接合させ、人、モノ、情報など全てが移動している状況は、どこも定住の場所とはならず、どこにいても「一時休止」や「中継地点」の場所という感覚を生むという（アーリ 2015）。

績をおさめていたが、日本では言葉の壁によって最下位の成績表を受け取り大きなショックを受ける。そして中国人の友人の紹介で、日本人ボランティアが自宅で行なっている無料の学習塾に通うことになった。これは学校から塾へという学習の場の移動である。学習塾では、Mさんと同じように日本語が壁となって教科を理解できない子どもたちが集まり、高校進学をめざしともに励まし合うコミュニティ＝「メッシュワーク」であった。この学習塾の教師はプリンターを購入し独自の教科書を作るなど、生徒たちのために一生懸命だった。Mさんはこの塾で、教科の学習だけでなく、教師や仲間との励まし合いや連帯の力を学んだ。その新たな「知」を踏み台にして高校進学を果たし、大学まで進んだ。

「第5章 モノとともに生きる在日カンボジ人」のMSさんは、幼少期に故郷から隣国タイへ移動した。その時に疲れ果てた心身に元気を与え生きる力を与えたのが、母親が与えてくれたバケツだった。このバケツは母親が何かの時に大切に携えていた銀塊と交換して手に入れたものだった。その時には銀塊に込められた母の思いに気づかなかったが、自分が子どもを持って気づいたという。これも長い時間を経て、移動によるモノとの出会いを通して発見した「知」と言えるだろう。もう一人のSさんは、母国の政変によって持っていたパスポートが無効となり、国籍を失い、日本の外に出ることができなかった。その時に、妻がカンボジアへ行き、帰国後にその訪問時に受けたカンボジアの印象を描いた絵画との出会いが、その後のSさんの自己のアイデンティティの統合と再生につながっていく。これも、Sさん自身の移動ではなかったが、妻という他者の移動を通しての知の生成と言える。

5人の事例を通して、移動と他者（人とモノ）との出会い、そして知の生成は密接に繋がっていることが明らかとなった。移動による未知なる場所への移動は、未知なる他者との出会いを導き、そこから〈いまだ一知らない〉知を得る。これを「知の移動」と呼ぶ。場所の移動、文化の移動、世代間の移動、過去から未来への移動、そして知の移動は一連の出来事である。「知の移動」とはものの見方が変化し、新しい生き方に移動していくことを意味する。

3 「知の移動」と「異質な他者とともに生きる」

「知の移動」とは、〈いまだ一知らない〉知を得るということである。それは自分にはないもの、あるいは自分の中にあっても気づいていないものに出会うことである。その異質なことに出会った時の感情や反応は、小さな違和感から衝撃的な驚愕まで様々である。「第3章 経験の継承を生きる1.5世」のMさんは、日本人がまだ使えるモノをゴミ捨て場に捨てていくのを見て驚いたが、それを大いに楽しんだ。Nさんは運動会に親が昼食を持ってきて参加する日本の習慣を想像もできなかったが、だからと言って日本人を批判したり、その習慣の良し悪しを判断したり

することはなかった。未知なる存在と出会ったとき、基本的にはまっさらな状態であるはずなのに不快だから排除したいといったネガティブな反応、あるいは素晴らしいから真似したいというようなポジティブな反応があるのはなぜか。それは、先入観や偏見と言われるものだろう。しかし、実際にはそのような明確な二項対立的な反応ではなく、戸惑いや懷疑といった曖昧な感情が一般的だろう。そして、そこから「知の移動」が始まるのであろう。

「第3章 経験の継承を生きる」のNさんは、自分の中の「外国人」の壁が取れて本来の姿で周囲の日本人同僚たちと交流するが、そこで周囲の日本人が言う「Nさんがカンボジア人だなんて信じられない、日本人と同じみたい」という言葉に戸惑う。相手は好意的に言ったのであろうが、Nさんは〈いくら日本語ができるようになって、日本の習慣に馴染んでも、日本人にはなれないし、日本人とは違う〉という違和感を持つ。この出来事が直接的な理由ではないかもしれないが、Nさんは同時期にクメールの古典舞踊を学び始める。筆者の解釈であるが、Nさんは、「日本人みたい」という言葉をきっかけに、〈カンボジア人であることを消したい〉と思ったかつての自分を再帰し、あらためて自分にとってのカンボジアというルーツの意味を考えだしたのではないだろうか。自分が今ここで存在すること、母国カンボジアへの思い、祖先が伝えてきたこと、難民となって経験したこと、それらに対する敬意や誇りが生まれてきたのではないだろうか。このように様々な他者と出会う中で、無意識のうちに「知の移動」が始まっていく。

もう一つの事例をあげよう。「第5章 モノとともに生きる在日カンボジア人」のSさんは、絵画を通して幼いときに別れた実母と対話を行うが、これは想像上の出会いと再会である。Sさんは実母に「なぜ、自分を養子に出したのか」というこれまで自分の中にあった疑問を投げかける。その問いに対しての実母の答え（想像上）は、ある時はSさんの想定通りかもしれないが、ある時は思いがけない答え（異質な答え）となって返ってくるのだろう。Sさんによればそこには数えきれないストーリーのバージョンがあるという。それらの詳細はわからないが、大切なことはその繰り返された対話の積み重ねのなかで、実母とSさんが絡みあい、そこから新たな知が生成され、世界に開かれていく過程である。そこからSさんは、自分がどこからどのように来たのかというルーツを再確認し、自己のアイデンティティを再統合していく。Sさんはこのことを〈自分の心の空洞が埋められていった〉と語る。そしてSさんは実母に、〈養子に出してくれてよかった、なぜなら今の自分があるのはそのためだから〉と伝えたいと何度も繰り返し語った。自分を養子に出した実母を、このような生き方をした一人の人間として、距離を持って向かい合えるようになった。このことを、筆者はSさんの実母に対する懷疑から和解への「知の移動」と解釈する。絵画というモノ（異質な他者）が媒介し新たな知を生み出し、生きる力を与えたといえる。

上述したように「知の移動」の出発点は異質な他者との出会いである。そして、異質な他者と

絡みあい、以前とは異なる新たな個が生成する萌芽を孕んでいる。本稿では、異質な他者について当初は一般的な属性（国籍や世代や種差）によってその異質性を規定したが、それはこの考察を通して再考されることになる。再規定においては、国籍や民族などの社会的カテゴリー、世代カテゴリー、人間と非人間の種のカテゴリーは、それ自身で「異質な他者」の規定条件にはならない。「異質な他者」の異質性とはそれぞれの持つ知の異質性である。その知とは、世界観であり、処世術であり、また日常の生活の知恵である。他者の中にあるそのような知を知りたい、学びたいと求めることから「異質な他者」は生成する。それが絡み合いの関係を可能にする。ちなみに、本稿が規定する「同質な他者」とは、他者の異質性が無視され、あるいは同化や支配の対象として剥奪され、境界線によって分断された外部者として固定される存在である。このような他者との間で絡み合いの関係は成立しない。

他者が異質なものの、未知を持っていると気づいた時に「異質な他者」となるのであるから、カテゴリーに関わらず誰でも何でも「異質な他者」となり得る。その未知は驚嘆するような事象の中にだけあるのではなく、身の回りの人やモノの中にあり、慣れ親しんだことの中にあり。必要なことは、それを見出す感覚と能力であろう。

異質な他者との絡みあいにおいて、それぞれの性質が合体して新たな性質（差異）を持つ個となるのだが、その時にそれぞれの元の性質も保持される。つまり分離と合体という矛盾した事象が両立するのである。これによって多種多様な関係が生成され、メッシュワークとなる。であるから、このメッシュワークの中に知が内包されていると言える。つまり、メッシュワークとは関係のシステムであると同時に知のシステムでもある。

上記の論から、「異質な他者とともに生きること」を「異なる知をもつ他者（異質な他者）とのつながり（絡みあい）によって、ものの見方が変化し（知の移動）、新たな世界の形成（メッシュワーク）に参加していくこと」と言い換えることができる。これが、「応答プロセス」の生き方である。この生き方によって、在日カンボジア人は直面する危機をすり抜け、新しい地平に開かれていくことが本稿で示された。このことから、「異質な他者とともに生きる」ことは、私たちが生きるための条件であり、新しい地平への可能性を持っていると言える。これが本稿の結論である。

第二部 在日カンボジア人の生き方から学ぶこと

在日カンボジア人のライフストーリーを通して見えてきた「応答プロセス」の生き方から、私たち日本人は何を学ぶことができるのだろうか。

本稿の事例や先行研究、関連する文献・資料から日本人の「他者を対象化」し「よそ者を排除」

する傾向が示された。これは明治以来の日本という国家が進めてきた西洋近代的人間観と資本主義的経済システムのもとで形成され、強化されてきたものである。その中で、原子化した個人（孤人）は「自己実現」や「自己利益」を追求し、他者の苦難に無関心となり、その集合体である社会は「開発」や「進歩」という名のもとで生命と暮らしを破壊し、安全を求めて内に閉じこもり、先が見えない状態に陥っているのが私たちの現在である。

この閉塞状態から抜け出し新しい地平を開くために、在日カンボジア人の「異質な他者とともに生きる」生き方が貴重な示唆を与えてくれる。第一に、異質であることに価値を見出すことである。これまでの日本社会は同質であることが自明とされ、それを旨としてきたが、そうではなく異質であることが当たり前であるというモノの見方への転換（知の移動）である。ここで言う異質性は既存のカテゴリーによるのではなく、他者の中にある〈いまだ一知らない〉知の存在である。そのことに気づき、そこから学ぼうとする態度は、異質性が自明であるという視点から生まれる。第二に、他者との関係を自己実現や自己の利益のためではなく、より始原的・情動的（アフェクト）な感覚によって関わり、絡みあいの関係を築くことである。それは無秩序・無方向のように見えるが、実はもう一つの秩序であり、方向性である。予測や計画が頼りにならない不確定な状況を生き抜くために有効な戦略なのである。第三に、ルーツを大切にすることである。ルーツへの自覚はマイノリティにとっては自ずと意識させられる状態であるが、マジョリティが意識することは少ない。しかし、それは自分の成り立ちを理解し、他者とともに生きるために重要なことである。死者となった祖先や過去の記憶との絡みあいを通して、自分が大きな生のつながりの中にいることを実感し、そこから先人の知恵や思いを学ぶことである。以上は、在日カンボジア人の「応答プロセス」の生き方から筆者自身が学んだことでもある。

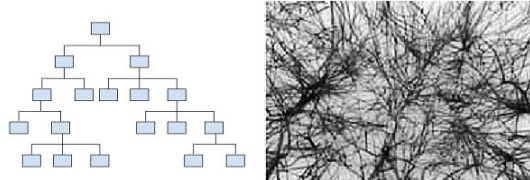
筆者はインタビューを始めるに際し「応答プロセス」という解釈の道標を持っていたわけではない。様々な在日カンボジア人との語りを聞く中で生じた問いに対する答えを模索する中で出会った概念や理論を用いて徐々に組み立てていったのである。在日カンボジア人たちの現実を身体で感じ、それを理論によって解釈するという反復運動の中で、彼/彼女らとの対話は深まり、ともに探究する姿勢ができた。この過程を通して、思いがけない他者とのつながりが次々と展開し、新しいメッシュワークが形成されていった。そして、気がついてみると筆者のものの見方が変化し、生き方も変化した。これを、もう一つの「応答プロセス」として記しておく。

最後に、本稿の限界と留意点について述べる。本稿で紹介した在日カンボジア人たちは危機を乗り越え、新しい地平に立つことができ、現在を生きている人たちである。しかし新しい地平を見つけあぐねている人々もいる。紹介した5人の生き方が在日カンボジア人の生き方を代表している訳ではない。また、本稿のライフストーリーはポジティブな面を前景させているが、それは個人を賞賛するためではなく、序章で述べたように、これまで「難民」としての困難や問題点が

過剰に強調されることでステレオタイプ化した負のイメージを是正するためであった。もう一点は、「メッシュワーク」の重要性を考察で主張したが、その詳細な様相を描くまでには至らず、その入り口で終わってしまっている。このことは今後の課題とする。

補足説明 (以下の半括弧の番号は、本文中の注の番号と同じ)

- 5) モーリス・メルロ・ポンティの概念は、インゴルドの思想に重要な影響を与えている。「巻き込み」という概念は英語で implication、これは含意、関わり、包含といった意味を持つ。「巻き込み」は、他者の中に入って相互浸透する内面的な交流である。これをポンティは、内属するという。この内属を可能にするのは、意識と身体が分離する以前の始原的な「身体性」である。(鷺田 2003 : 323、258)。「身体」は、物質と意識の合体した存在で、世界と自己を媒介するメディウムであるとする。(鷺田 2003:323)。このような身体性が「巻き込み」の土壌となる。「巻き込み」の特性は、両者の立場が交換可能となる「可逆性」と、主体/客体、中心/周辺、主/従といった二項対立の境界が反転する「反転性」である(鷺田 2003)。巻き込みによって両者の立場は交換可能となり(可逆性)、可能となる(反転性)。このことから、対等で合一的な関係が可能となる。その両者は「結び目」という共通経験＝出来事によってつながり、ある共通感覚が生まれ、共感関係が形成される(鷺田 2003 : 120-135)。このような状態を、「ともに」という言葉の内実として捉えることができる。
- 6) スピノザは、「エチカ」において、諸物体(個体)は他者との接触を通して、反響し合い、動揺すると述べ、これを「情動(アフェクトウス)」とする(箭内 2020:48)。ここでの諸物体とは、単一的なバラバラの個体ではなく、個体が合一して形成された新たな合一的個体である。たとえば、人間の身体もさまざまな器官が集まった合一的個体としての物体であり、その合一的個体が集まった社会集団は高次の合一的個体と言える。高次の合一的個体において、個々の本性や差異は保持されたまま相互にアフェクト(影響、作用、触発、感受)しあい、その合一性は保持される。「コナトウス」は、「あらゆる事物が自分の存在に固執しようとする努力(第三部定理7)」と定義される。別個の個が集まって合体した個は、その新たな個の状態を維持し続けるのではなく、新たな個を生成し続けていく。これが「自分の存在に固執する努力」である。この合体というつながり方において、量と質の面で強弱があり、その強度によって多様な個が存在可能となる。スピノザは、このような形で世界に「他性」が内包されていると考える。
- 7) ジル・ドルーズは世界の存在のあり方を様々な要素の関連とその「アレンジメント(配置)」とし、その構造を「リゾーム(根茎)」に例えた。リゾーム構造の特徴は、異質な要素が接合すること、要素は多様であること、接続は切断されること、そして常に生成変化すること、である。リゾーム構造は平板上に展開し、無秩序・無方向に伸びていき、中心と周辺がなく、主と従がない(ドルーズ 2010 : 上巻)。その形を以下の樹木(ツリー)と比較する。



- 8) ブルーノ・ラトゥールとミッシェル・カロンの提唱する「アクターネットワーク (ANT)」は、近代体制を支えてきた「自然と社会の分離」という枠組みを「ネットワーク」という繋がり
の枠組みに変えることで、気候変動や格差や移民といった現代の問題を乗り越えようとする
(ラトゥール 2008 : 13) 理論である。この新しい枠組みを誘導した概念はジェームズ・ギブ
ソンの「アフォーダンス」である。「アフォーダンス」は、生物は外部環境からの刺激によっ
て反応し行動する受動的な存在ではなく、内発的な知覚によって外部環境に適応した行動を自
ら取る能動的な生き方を提示する (河野他 2023)。この考えから、人もモノも自然も環境・
知覚・行為という三者が一体となって作り上げられる存在であるという原理のもとで、自然
環境だけを取り出して客観的世界とすることに意味はない。つまり、世界は自然と社会がも
ともと混合しているものであり、それを歪めた近代の世界観を見直すことが ANT 論の意図であ
る。ラトゥールは自身の研究領域である科学人類学の実践から、環境の中で生物のみならず
あらゆる存在者が相互に影響を与えあって事象を生成していくという ANT 論の基本的考え
を確信した (ラトゥール 2008:21)。事象を起こす行為能力は人間だけではなく人間以外の存
在者にもあり、全ての存在者は世界を形成するアクターであるとする。ANT 論では、人、物、
言葉、思想、芸術、イメージ、制度、自然現象などいわゆる物体という枠を超えた存在も含
む。ネットワークのつながりの中でアクター間には対等であり、中心/周辺という位置付けや
主観/客観という序列はない。このような多様なアクターから構成されるネットワークは異
種混合のフラットな集合体 (アセンブリッジ) を形成する。このアセンブリッジの様相を、
文化人類学者のアナ・チンはマツタケというアクターと他のアクターとの関係を通して実際
のフィールドから検証した。それによると、マツタケは人間世界の科学的計画は受け付けな
いため人工栽培という資本主義的経済システムから免れていることや、森の中で他の存在者
とともに生き、そこでは思わぬ他者との出会いがあり、「連携の網」となっていることを示
した (アナ 2019)。アセンブリッジにおいて、人間は特別な存在ではなく、したがって人間
の論理をモノに押し付けても意味がないということであり、ANT 論は近代的西洋の人間主体
中心の世界観を否定し、新たな世界観を作ろうとする脱人間中心主義の一環である。

- 16) 「情動」は、emotion と affect という二つの意味があるが、情動論において用いられる意味

は後者である。「情動」は、「文化によって焦点が結ばれる前の潜在性、意識以前、感情以前、言語・意味以前のもの、そして純粹に身体的、前言語的、無意識的な感情」と定義される（ローゼンワイン・クリスティアーニ 2021：16）。情動は感覚を重要な核とするが、それは個人内部の心理学的な領域としてではなく、外部の存在者たちとの相互関係における感覚領域である（小栗 2022）。情動は環境という媒質を生存基盤として生きる全ての存在者の間で起こる現象であり、そこに人間と非人間の区別はなく、人間中心主義的な見方は否定され、他の存在者との感覚を通して共生のあり方が前面に出てくる。また、情動論においては、他者との関係を通して生成される出来事に焦点を当てる。出来事はその水面下で起きている異質で複雑で内在的な個の絡まり合いによって生じるという。それを「生の潜在性」という（西井・箭内 2020：3）。インゴルドはこの世界は情動的なものと宇宙的なものによって満たされていると述べ、物質（大気、水、大地）と精神（感覚、感情、認識、思考）が融合している空間（雰囲気：アウラ）に私たちは生きているという（インゴルド 2018：308）。

- 17) 花崎皋平は北海道に住み、沖縄に滞在し、水俣病の運動に関わる中で、経済至上主義と管理システムによって生命と自然と人間性が破壊され、暮らしと尊厳を奪われた民衆たちが、国家権力や産業界に対して自ら立ち上がる抵抗としての共生思想を提唱する。新たな世界観としての共生思想は、国家を超えて人々が出会い、それぞれの主張を交わし合い、共通の次元を開いていくプロセスによって生まれるという。その新しい世界では、誰かを加害者として糾弾するだけではなく、誰でもが加害者にも受苦者にもなり得るという認識のもとで、自己と他者が相互の「苦悩」を通して「共苦的」な関係を軸にする生き方が求められると論じる（花崎 2001）。
- 18) 井上達夫は共生の思想を「正義」の視点から異質な人格が互いに他者を単なる手段としてではなく、他者を目的それ自体として扱いながら共に結合することを義務とする法則であると論じる。そのことは、会話という現実的な営為に基礎を置くことで現実化する。井上は、会話をコミュニケーションという情報伝達や共通理解という目的性を持った行為ではなく、ともに生きていくためのより根源的な人間の営みとして捉える（井上 1996）。
- 19) 共同体・共同性について、従来の共同体は地縁や血縁という共同性によってつながる集合体であり、その内部では秩序・規律が保たれ、生産性が向上し、安全で豊かな生活が保証されることが求められたが、この共同体の論理によって形成された国民国家は、その自己中心的で排他的な性質によって、20 世紀の戦争を引き起こした。この経験を経て、ジャン＝リュック・ナンシーは古典的な共同体とは異なる新たな共同体を構想した。それは、「無為の共同

体」と呼ばれ、経済的・物質的な共通利益や領土的な統治・支配による共同体ではなく、人間が根源的にもつ「他者とのつながり」を基礎にする共同体である。このような共同体は、必ずしも具体的な共通性や目標を持つ必要はなく、また所与の属性を問うこともない。それは意図的に営まれる共同体ではなく自然に作られ、また営為や有為に価値を置くのではない「無為の共同体」である。しかし、同じ状況下のもとにある場合、異なるもの同士が共通する何かを見出し、それによってつながることは可能である。上記のナンシーの共同体の思想と近接する共同体の概念として、ジョルジュ・バタイユの異質性を核にした「無頭の共同体」やモーリス・ブランショの「明かしえぬ共同体」、アルフォン・リングスの「何も共有していない者たちの共同体」などがあげられる。それらは、いずれも国民国家やファシズム、資本主義という近代的体制を経て、その矛盾や問題を乗り越えるために生み出された共同体構想である。

- 20) 「異質な他者」といったとき、「マイノリティ」や「よそ者」と呼ばれる人たちを思い浮かぶ人は多いかもしれない。社会思想事典によると、「マイノリティ」はある地域や国において、文化的（言語、宗教、習俗など）に「異質」だとされ、多数派から区別される社会集団であり、その異質性によって抑圧される少数集団も含まれる場合もある（桜井 2008：299）。「よそ者」は、現代社会学辞典によれば、あるコミュニティーの人にとって外から来た「異質な存在」である（鬼頭 2012:1294）。ジークムント・バウマンは、理解しあっていると思っている集団の内部にいるものにとって、「よそ者」は理解できない異質なものであるとみなされ、その「異質性」は吐だされるか、あるいは飲み込まれるかであると論じる（バウマン 2016:82）。つまり、「異質な他者」は、「マジョリティ」にとって、わからないもの、不快なもの、邪魔なもの、存在してほしくないもの、を指すようだ。それらの「異質性」によって、社会から排除・差別され、何らかの不利益を被り「社会的弱者」という烙印を押される。

社会的弱者を生み出す理由は感情的なことだけでなく、その背景には異質な存在が社会の秩序を乱すという統治者の論理がある。バタイユは、同質を基礎にして秩序を保つ社会において、異質であることは「生産に寄与せず、無用で、秩序を見出す」ことを意味するという（澤田他 2023）。つまり、「異質な存在」は社会の中で存在するに値しない、さらには邪魔な存在と統治者は考える。このように価値づけされた「異質な他者」の存在は、均質な人間＝国民によって構成される国民国家の論理を乱す要因となる。

引用・参考文献

〈日本語文献〉

- アガンベン、ジョルジュ 高桑和巳訳 (2007) 『ホモ・サケル：主権権力と剥き出しの生』 講談社
- 浅野智彦 (2021) 「自我/自己」『現代社会学事典』弘文堂：505-509
- アナ・チン 赤嶺淳訳 (2019) 『マツタケ：不確定な時代を生きる術』みすず書房
- アーリ、ジョン(2015) 吉原直樹・伊藤嘉高訳『モビリティーズ：移動の社会学』作品社
- アルヴァックス、モーリス 小関藤一郎訳 (1989) 『集合的記憶』行路社
- アーレント、H 志水速雄訳 (1994) 『人間の条件』筑摩書房
- インゴルド、ティム 工藤晋・菅啓次郎訳 (2014) 『ラインズ：線の文化史』左右社
- 金子遊・水野由美子・小林耕二訳 (2017) 『メイキング：人類学・考古学・芸術・建築』左右社
- 笥菜奈子・島村幸忠・宇佐美達郎訳 (2018) 『ライフ・オブ・ラインズ：線の生態人類学』フィルムアート社
- 奥野克巳・宮崎幸子訳 (2020) 『人類学とは何か』亜紀書房
- 柴田崇・野中哲士・佐古仁志・原島大輔・青山慶・柳沢田実訳 (2021) 『生きていくこと：動く、知る、記述する』左右社
- 奥野克巳訳 (2023) 『応答、しつづけよ。』亜紀書房
- 井上達夫 (1996) 『共生の作法：会話としての正義』勁草書房
- 石川実 (1981) 「生活文化の捉え方」石川・井上忠司編『生活文化を学ぶ人のために』、世界史思想社：1-14
- 榎井緑 (2011) 「外国にルーツをもつ子どもたちのこれまでと現状」『外国にルーツをもつ子どもたち』現代人文社：7-15
- 大谷杏 (2013) 「インドシナ難民 2 世、3 世が抱える学習問題と学校・地域の対応」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』20 号：221-230
- 岡本祐子・上手由香・高野恵代 (編) (2018) 『世代継承性研究の展望』ナカニシヤ出版
- 奥田道大・田嶋淳子編著 (1991) 『池袋のアジア系外国人』メコン社
- 奥野克巳 (2022) 「アニミズム、人間とモノの「間」の人類学的現象学」『絡みあう生命：人間を超えた人類学』亜紀書房：234-332
- 小栗宏太 (2022) 「情動の人類学：感情史との対話」『文化人類学』87/1：94-106

- 小田亮（2010）「グローカリゼーションと共同性」小田亮編『グローカリゼーションと共同性』
成城大学民俗学研究所：1-42
- 柿木伸之（2006）「経験の廃橋から新たな歴史の経験へ」『特集「歴史、経験、論理」』32号
比較思想学会：37-48
- （2021）『断絶からの歴史：ベンヤミンの歴史哲学』月曜社
- 姜尚中（1996）『オリエンタの彼方へ 近代文化批判』岩波書店
- ギデンス、A 秋吉 美都・安藤 太郎・筒井 淳也訳（2005）『モダニティと自己アイデンティティ
後期近代における自己と社会』ハーベスト社
- 鬼頭秀一（2012）「よそ者」『現代社会学事典』弘文堂：1294
- 栗本英世（2016）「日本の多文化共生の限界と可能性」大阪大学未来戦略機構『未来共生学』3号：
69-88
- 栗野鳳（1986）「難民大量流出の原因についての一考察」『難民問題の学術的研究』御茶ノ水書房：
47-61
- 梶田孝通・丹野 清人・樋口 直人（2005）『顔の见えない定住化—日系ブラジル人と国家・市場・
移民ネットワーク』名古屋大学出版
- 河合優子（2016）「多文化社会と異文化コミュニケーションを捉える視点としての交錯」河合優
子編『交錯する多文化社会』ナカニシヤ出版：1-23
- 河野哲也・田中彰吾（2023）『アフォーダンス：そのルーツと最前線 知の生態学の冒険 J・
J・ギブソンの継承』東京大学出版会
- 久郷ボンナレット（2001）『色のない空：虐殺と差別を超えて』春秋社
- サイード、エドワード 板垣雄三・杉田英明監修（1993）『オリエンタリズム』平凡社
- 斎藤純一（2000）『公共性』岩波書店
- 坂井妙子（2023）「人間と非人間の相互作用：ミルバにおける間主観的プロセスから」『文化人
類学』87巻4号：573-592
- 酒井直樹・鵜飼哲・酒井直樹・テッサ・モーリス＝スズキ・李孝徳（2012）『レイシズム・ス
タディーズ序説』以文社
- 桜井厚（2012）『ライフストーリー論』弘文堂
- 桜井哲夫（2008）「マイノリティ」『社会思想事典』岩波書店：299
- 澤田直・岩野卓二編（2023）『はじまりのバタイユ：贈与・共同体・アナキズム』法政大学出版
会
- 志水宏吉・清水睦美編著（2001）『ニューカマーと教育：学校文化とエスニシティの葛藤をめぐ
って』明石書店

- 志水宏吉 (2020) 「私たちが考える共生学」 志水宏吉他編著『共生学宣言』大阪大学出版会：1-26
- 清水睦美 (2021) 『日本社会の移民第二世代』明石書店
- (2023) 「移民第二世代が学校で直面してきたこと」『世界4』岩波書店：199-206
- 霜山博也 (2016) 「ハイデッカーの時空間における枠組みとしての〈物〉」『哲学の探究』43号：143-161
- シュッツ、アルフレッド、ルックマン、トーマス 那須 壽 訳 (2015) 『生活世界の構造』筑摩書房
- 鈴木美奈子 (1999) 「カンボジア難民の日本定住以前の移動過程に関する一考察」『立教大学大学院社会学研究科論集』6号：43-55
- (2000) 「構造不況のなかの在日カンボジア人就業および家族生活への影響」宮島喬編『外国籍住民と『社会的文化的受け入れ政策』日本学術振興会：87-99
- (2003a) 「インドシナ難民家族の日本社会への適応をめぐる諸問題：カンボジアの場合」『第37回学術フロンティア・セミナー』学術フロンティアセミナー：307-321
- (2003b) 「難民経験と世代間関係：在日カンボジア家族の事例を中心に」『社会学論集』16号 関東社会学会：52-64
- 滝澤三郎・山田満編著 (2017) 『難民を知るための基礎知識』明石書店.
- 滝浦静雄 (1972) 『想像の現象学』紀伊國屋書店
- 戴エイカ (1999) 『多文化主義とディアスポラ』明石書店.
- 鳥居一平 (2020) 『国家と移民：外国人労働者と日本の未来』集英社
- 日本国際ボランティアセンター (1990) 『N G O の挑戦 下刊』メコン社
- 内閣官房 インドシナ難民対策連絡調整会議事務局 (1997) 『インドシナ難民定住者の現状と定住促進に関する今後の課題』
- ナンシー、ジャン・リュック 西谷 修、安原 伸一朗訳 (2001) 『無為の共同体—哲学を問い直す分有の思考』以文社
- 西井涼子・箭内匡編 (2011) 『時間の人類学 情動、自然、社会空間』世界思想社
- (2020) 『アフェクトウス 生の外側に触れる』京都大学出版会
- 西井涼子 (2020) 「吊いの家—情動・モノ・死者」西井涼子・箭内匡編『アフェクトウス 生の外側に触れる』京都大学出版会：127-157
- 西谷修 (2012) 「アガンベン」『現代社会学事典』弘文堂：7-8
- 西原和久 (2012) 「経験」『現代社会学事典』弘文堂、2012：336-337
- ネグリ、アントニオ 鈴木創士訳 (1994) 「千のプラトールについて」宇野邦一編『ドゥルーズ横断』

河出書房

田中宏 (2013) 『在日外国人 第三版:法の壁、心の溝』、岩波書店

田辺繁治 (2003) 『生きかたの人類学:実践とは何か』 講談社

———— (2008) 『ケアのコミュニティ』 岩波書店

ドゥルーズ、ジルとガタリ、フェリックス 宇野邦一・小沢明宏・田中敏彦・豊崎光一・宮林寛

守中高明訳 (2010) 『千のプラトー下:資本主義と分裂症』 河出書房

ドゥルーズ、ジル 守中高明・谷昌親訳 (2002) 『批評と臨床』 河出書房

バウマン、ジグムント 森田典正訳 (2001) 『リキッド・モダニティ 液状化する社会』 大月書店

橋本みゆき編著 (2021) 『二世に聴く 在日コリアンの生活文化—継承の語り』 社会評論社

長谷部美佳 (2010) 「結婚移民に対する移民ネットワークと移民コミュニティの役割」『社会学論考』 31 号 首都大学東京・都立大学社会学研究会:1-27

花崎皋平 (2001) 『アイデンティティと共生の哲学』 平凡社

パットナム、ロバート 柴内 康文訳 (2000=2006) 『孤独なボーリング:米国コミュニティの崩壊と再生』 柏書房

濱野敏子 (2022) 「希望を生きる移民 1.5 世:在日カンボジア人 1.5 世の語りから」『コミュニケーション科学』 56 号:49-81

———— (2023) 「経験の継承:在日カンボジア人 1.5 世の語りから」『コミュニケーション科学』 58 号:113-148

———— (2024) 「人とモノの生きた関係:在日カンボジア人のライフストーリーから」『コミュニケーション科学』 60 号:176-197

広田康生 (2003) 『エスニシティと都市』 有信堂

吹浦忠正 (1989) 『難民』 日本教育新聞社.

ブロッホ、エルンスト 山下肇・瀬戸 鞏吉・片岡 啓治・沼崎 雅行・石丸 昭二訳 (2012) 『希望の原理 第一巻』 白水社

ベネット、ジェーン 林道郎訳 (2023) 『震える物質:物の政治的エコロジー』 水声社

ベルクソン、アンリ 真方敬道訳 (1979) 『創造的進化』 岩波書店

———— 杉山直樹訳 (2019) 『物質と記憶』 講談社

ベンヤミン、W 浅井健二郎・久保哲司・西村龍一・三宅晶子・内村博信訳 (1996) 「物語作者」『ベンヤミン・コレクション エッセイの思想』、筑摩書房:283-334

———— 浅井健二郎・久保哲司・西村龍一・三宅晶子・内村博信訳 (1996) 「経験と貧困」『ベンヤミン・コレクション エッセイの思想』 筑摩書房:271-284

———— 浅井健二郎・久保哲司訳 (1995) 「言語一般および人間の言語について」『ベンヤミン・

コレクション 近代の意味』筑摩書房：7-36

堀井愛（2005）「在日カンボジア難民におけるディアスポラ性：顕在と融合」『哲学論集』52号
大谷大学大学院：108-1123.

堀井愛（2006）「ノスタルジアの共同体：在日カンボジア難民尾コミュニティ・センター設立経過
を事例として」『大谷大学大学院紀要』23号：79-109

堀井愛（2009）「在日カンボジア難民若者文化の一局面：カンボジア料理店での事例を中心とし
て」『哲学論集』55号 大谷大学大学院：1-20

ホフマン、エヴァ 早川敦子訳（2011）『記憶を和解のために』みすず書房

——— 木村博江訳（1992）『アメリカに生きる私：二つの文化、二つの言語の間で』新宿書房
ポルテス、A. ルンバウト、ルベン 村井忠政訳者代表（2014）『現代アメリカ移民第二世代の研究』明石書店

三浦綾希子（2015）『ニューカマーの子どもと移民コミュニティ』勁草書房

宮崎広和（2009）『希望という方法』以文社

宮島喬・太田晴雄（2005）『外国人の子どもと日本の教育：不就学問題と多文化共生の課題』東
京大学出版会

メルロ＝ポンティ、モーリス 滝浦静雄・木田元訳（1966）『眼と精神』みすず書房

森田京子（2007）『子どもたちのアイデンティティ・ポリティックス ブラジル人のいる小学校
のエスノグラフィー』新曜社

箭内匡（2018）『イメージの人類学』せりか書房

———（2020）「スピノザと植物人類学—アフェクトウス概念の人類学的一展開」西井涼子・
箭内匡編『アフェクトウス 生の外側に触れる』京都大学出版会：43-69

やまだようこ（2012）『世代を結ぶ』新曜社

———（2019）『ものがたりの発生』新曜社

———（2021）『ナラティブ研究』新曜社

山田昌弘（2001）『家族というリスク』勁草書房

ラトウール、ブルーノ 川村久美子訳（2008）『虚構の近代』科学人類学は警告する』新評社

——— 川村久美子訳（2019）『地球に降り立つ 新気候体制を生き抜くための政治』新評社

ローゼンワイン、バーバラ、クリスティアーニ、リッカルド 伊藤剛史訳（2021）『感情史とは
何か』岩波書店

鷺田清一（2023）『メルロ＝ポンティ：可逆性』講談社

渡部一郎．（2013）「インドシナ難民の独自性と定住外国人の共通課題」『外国人コミュニティ調
査報告書』．神奈川国際交流財団：79-83.

〈英語文献〉

Ingold, Tim (2000) *Perception of Environment Essays on livelihood, dwelling and skill*, Routledge

———— (2007) *Lines A brief history*, Routledge

———— (2011) *Being Alive Essays on movement, knowledge and description*, Routledge

———— (2013) *Making: Anthropology, Archaeology, Art and Architecture*, Routledge

———— (2015) *The Life of Lines*, Routledge

———— (2017) *Correspondence: Knowing from the Inside*, University of Aberdeen

———— (2018) *Anthropology Why It Matters*, Polity Press

Rambaut、Ruben (1991). *The Agony of Exile:A Study of the Migration and Adaptation of Indochinese Refugee Adult and Children. Refugee Children Theory, Research, and Service.*
The Johns Hopkins Universith Press : 61.

謝辞

ご多忙の中、聞き取り調査に快くご協力くださった在日カンボジア人の方々と関係する皆さまに心より感謝を申し上げます。一人ひとりの貴重なご経験と深い洞察から発せられる人生の語りは、私の浅薄な理解を超えるものでした。

入学以来の指導教員であり、主査のコミュニケーション研究科の小林誠先生には、まとまらない論文作成を忍耐強く、丁寧にご指導していただき、心より感謝いたします。また、副査の本橋哲也先生と松永智子先生からは貴重なご助言を通してご指導いただき、心よりお礼申し上げます。

2024 年 12 月

濱野 敏子